

新修 茨木市史 史料集 12

# 將軍山古墳群 II

— 考古學資料調査報告集 2 —

平成20（2008）年3月

茨木市

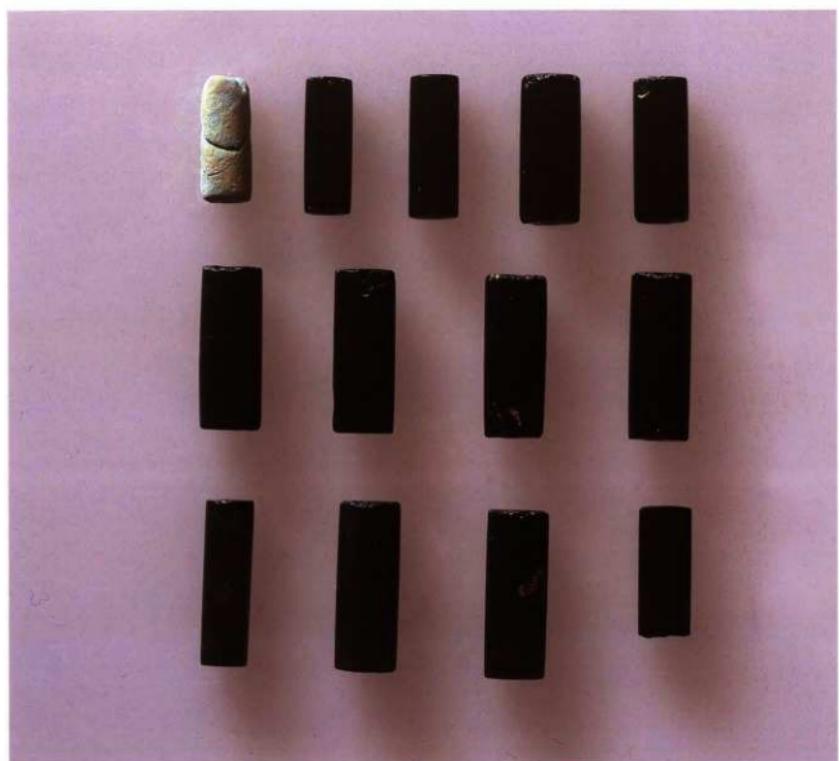
將軍山古墳群 II  
— 考古学資料調査報告集 2 —

平成 20 (2008) 年 3 月

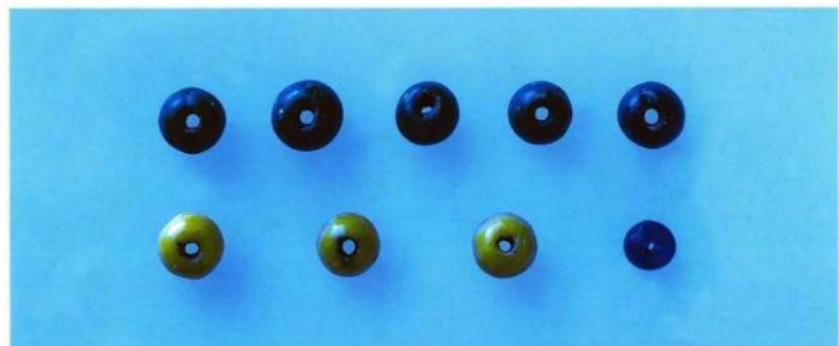
茨木市







4号墳出土管玉



7号墳出土丸玉



## 將軍山古墳群IIの発刊に際して

本書は、茨木市安威小字將軍山に所在した將軍山古墳群についての2冊目の資料調査報告書である。茨木市立文化財資料館に保管されている同古墳関係資料のうち、將軍山古墳出土の埴輪を中心に『將軍山古墳群I』において平成17（2005）年に報告した。しかし、將軍山古墳をとりまくようにして所在する後期の古墳から出土した須恵器や鉄器などの遺物に加え、調査時に作成された図面等の記録類も未整理のまま文化財資料館に保管されているので、それらを整理したうえで『將軍山古墳群II』として報告することとした。

昭和39（1964）年の調査からすでに40年以上の月日がたち、残された調査記録類も文化財としての価値を有しているといえる。図面類をそのまま示すことも考えられたが、製図など最小限の加工を施したうえで、古墳ごとに構成して提示することとした。したがって、3から7号墳の遺物に関しては新たに図面を作成して、ほぼ漏らさず提示することができたが、古墳ごとに記録の残され方の違いから、遺構の記述には精粗が生じている。

今回、調査時に作成された図面類を提示できた結果、將軍山古墳（2号墳）の墳丘についての情報が飛躍的に増え、全長107m、後円部径77.5mで三段築成の墳丘が明らかとなった。また、3号墳から7号墳の図面と遺物に対する検討から、6世紀前葉から6世紀後葉にかけて4号墳、5号墳、3号墳、7号墳の順に築造された過程が明らかとなった。前期の大型前方後円墳を日印に後期の古墳群が營まれる事例の一つとして理解することができる。

本書には、將軍山古墳群のほか、安威古墳群についての測量調査や遺物調査の報告を掲載した。安威古墳群は將軍山古墳群の近くに立地するというだけでなく、前期と後期に造墓がおこなわれたという点でも共通していることも注意される。また、市内の古鏡調査の一環としておこなった溝呂神社所蔵の神人龍虎画像鏡の報告も併せて掲載している。いずれも早くから注目されてきた遺跡遺物であるが、最新の見聞から改めて検討をおこなっている。

將軍山古墳群の資料整理では、廣瀬覚氏、若杉智宏氏を中心に村田陽氏、所梓氏に力を尽くしていただいた。資料の整理を快諾いただいた奥井哲秀氏をはじめとする教育委員会、文化財資料館の皆様にも改めてお礼申しあげたい。関連資料の調査では、免山篤氏、阿為神社宮司 森川正啓氏、溝呂神社宮司 三島紀之氏にたいへんお世話になった。末筆ながら謝意を表する次第である。

平成20（2008）年3月

茨木市史編さん委員会  
菱 田 哲 郎

## 例　　言

- 1、本書は、長らく大阪市立博物館にて保管され、昭和59年に同館より茨木市立文化財資料館に移管された將軍山古墳群の出土遺物および調査資料のうち、『新修 茨木市史』編さん事業の一環として実施した、將軍山古墳群の墳丘・石室調査資料並びに3～7号墳（6号墳は除く）の出土遺物の整理・検討作業の報告書である。また、合わせて近接する安威古墳群の測量調査、安威12号墳採集埴輪・須恵器、溝呬神社所蔵神人龍虎画像鏡の調査成果を掲載した。
- 2、將軍山古墳群の整理・検討作業は平成14年4月から開始し、これまでに將軍山古墳（2号墳）の出土埴輪の整理・検討作業を終え、その成果を平成17年刊行の『將軍山古墳群Ⅰ』に報告している。本書は『將軍山古墳群Ⅰ』刊行後、継続してきた整理・検討作業の成果を報告するものである。
- 3、將軍山古墳群出土遺物の整理作業については、廣瀬 覚、若杉智宏、村田 陽、所 柊が中心となつておこなった。
- 4、安威古墳群の測量調査は、平成14年7月、平成16年12月に菱田哲郎を中心に京都府立大学考古学研究室が実施した。また安威12号墳の埴輪・須恵器は、昭和26年から34年にかけて免山 篤氏により採集されたものである。採集当時の様子については免山氏よりご教示を賜った。
- 5、溝呬神社所蔵鏡の調査および本書への掲載については宮司三島紀之氏にご快諾を頂き、京都大学人文科学研究所研究員の下垣仁志氏に製図および検討を依頼し、玉稿を賜った。
- 6、掲載した遺物写真は菱田が撮影した。また、將軍山古墳群の調査写真については茨木市教育委員会から提供を受けた。
- 7、將軍山古墳群出土鉄製品については、大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター並びに大手前大学准教授森下章司氏にご協力を賜り、X線写真的撮影をおこなった。
- 8、將軍山古墳群の出土遺物については、京都大学名誉教授 小野山 節先生、浜松市教育委員会 鈴木 有氏、吹山市立博物館 藤原 学氏よりご教示を賜った。
- 9、本書の編集は菱田の指導のもと所の協力を得て若杉がおこなった。執筆分担は目次の通りである。

# 目 次

第1章 はじめに	(廣瀬 覚)	1
第2章 将軍山古墳（2号墳）の墳丘		
1 墳丘の形態と構築過程	(廣瀬)	2
2 舟石	(廣瀬)	11
3 まとめ	(廣瀬)	14
第3章 3～7号墳の調査		
1 将軍山古墳群について	(若杉智宏)	16
2 3号墳		
(1) 墳丘	(若杉)	18
(2) 箱式石棺	(若杉)	18
(3) 横穴式石室		
a 石室の構造	(若杉)	20
b 遺物出土状況	(若杉)	20
(4) 出土遺物		
a 土器	(若杉)	24
b 鉄製品	(若杉)	30
(5) 小結	(若杉)	34
3 4号墳		
(1) 位置と造構		
a 墳丘と石室	(若杉)	36
b 遺物出土状況	(若杉)	36
(2) 出土遺物		
a 土器	(村田 陽・若杉)	38
b 玉	(所 悅)	39
c 鉄製品	(若杉)	42
(3) 小結	(若杉)	47
4 5号墳		
(1) 位置と造構		
a 位置と石室	(若杉)	48

b 石室の構造	(若杉)	48
c 遺物出土状況	(若杉)	48
(2) 出土遺物		
a 土器	(村田・若杉)	49
b 鉄製品	(若杉)	49
(3) 小結	(若杉)	51
5 7号墳		
(1) 位置	(若杉)	52
(2) 出土遺物		
a 土器	(村山・若杉)	52
b 玉	(所)	53
c 鉄製品	(若杉)	55
(3) 小結	(若杉)	63
6 その他の出土遺物		
(1) 墓輪	(所)	64
(2) 土器	(若杉)	64
(3) 古錢	(若杉)	64
第4章 考察		
墳丘構造からみた将軍山古墳	(若杉)	65
第5章 総括		
將軍山古墳群出土遺物観察表		74
附篇1 安威古墳群測量調査報告		
附篇2 安威12号墳採集の埴輪・須恵器	(所)	83
附篇3 津呂神社藤原氏作神人龍虎画像鏡	(下垣仁志)	91
図版		
	卷末	

## 卷頭図版目次

卷頭図版 1 将軍山古墳群調査風景  
卷頭図版 2 将軍山 7号墳出土馬具

卷頭図版 3 将軍山 4号墳・7号墳出土玉類  
卷頭図版 4 溝昨神社蔵繩氏作神人龍虎画像鏡

## 図版目次

- |                    |                         |
|--------------------|-------------------------|
| 図版 1 将軍山古墳遠景       | 図版20 将軍山 4号墳須恵器・玉       |
| 図版 2 将軍山古墳上空写真 1   | 図版21 将軍山 4号墳鉄製品 1       |
| 図版 3 将軍山古墳上空写真 2   | 図版22 将軍山 4号墳鉄製品 2       |
| 図版 4 将軍山古墳上空写真 3   | 図版23 将軍山 4号墳鉄製品 3       |
| 図版 5 将軍山古墳調査風景     | 図版24 将軍山 4号墳鉄製品 4       |
| 図版 6 将軍山古墳葺石検出状況 1 | 図版25 将軍山 5号墳石室          |
| 図版 7 将軍山古墳葺石検出状況 2 | 図版26 将軍山 5号墳石室・須恵器      |
| 図版 8 将軍山古墳埴輪検出状況   | 図版27 将軍山 5号墳鉄製品         |
| 図版 9 将軍山古墳動物形土製品   | 図版28 将軍山 7号墳須恵器・玉       |
| 図版10 箱式石棺          | 図版29 将軍山 7号墳鉄製品 1       |
| 図版11 将軍山 3号墳石室     | 図版30 将軍山 7号墳鉄製品 2       |
| 図版12 将軍山 3号墳遺物検出状況 | 図版31 将軍山 7号墳鉄製品 3       |
| 図版13 将軍山 3号墳須恵器 1  | 図版32 将軍山 7号墳鉄製品 4       |
| 図版14 将軍山 3号墳須恵器 2  | 図版33 将軍山 7号墳鉄製品 5       |
| 図版15 将軍山 3号墳須恵器 3  | 図版34 将軍山 7号墳鉄製品 6       |
| 図版16 将軍山 3号墳鉄製品 1  | 図版35 将軍山古墳群埴輪・安威12号埴輪 1 |
| 図版17 将軍山 3号墳鉄製品 2  | 図版36 安威12号埴輪 2          |
| 図版18 将軍山 3号墳鉄製品 3  | 図版37 溝昨神社蔵繩氏作神人龍虎画像鏡    |
| 図版19 将軍山 4号墳石室     |                         |

## 挿図目次

第1図 将軍山古墳墳丘復元図	3	第24図 4号墳石室内遺物出土状況	37
第2図 後円部北側葺石平面図	4	第25図 4号墳出土須恵器	39
第3図 前方部南側葺石および埴輪列平面図	5	第26図 4号墳出土管玉	40
第4図 前方部土層断面図	7	第27図 4号墳出土鐵鎌1	41
第5図 後円部西側葺石平面図	9	第28図 4号墳出土鐵鎌2	42
第6図 後円部東側上段・中段葺石平面図	9	第29図 4号墳出土铁刀	43
第7図 西側くびれ部上段・中段 葺石および埴輪列平面図	10	第30図 4号墳出土鐵鋤	45
第8図 前方部西側上段・中段 葺石および埴輪列平面図	11	第31図 4号墳出土工具・不明鉄製品	46
第9図 前方部東側葺石平面図	12	第32図 5号墳横穴式石室実測図	48
第10図 東側くびれ部葺石平面図	13	第33図 5号墳石室内遺物出土状況	49
第11図 将軍山古墳群測量図	17	第34図 5号墳出土須恵器	50
第12図 2号墳前方部前端および 3号墳墳丘の土層断面図	19	第35図 5号墳出土鐵鎌	50
第13図 箱式石棺平面図・立面図	19	第36図 7号墳出土須恵器1	53
第14図 3号墳横穴式石室実測図	21	第37図 7号墳出土須恵器2	54
第15図 3号墳石室内遺物出土状況	23	第38図 7号墳出土糞玉・丸玉	55
第16図 3号墳出土須恵器1	25	第39図 7号墳出土鐵鎌	57
第17図 3号墳出土須恵器2	27	第40図 7号墳出土工具	58
第18図 3号墳出土須恵器3	28	第41図 7号墳出土馬具1	59
第19図 3号墳出土須恵器4	29	第42図 7号墳出土馬具2・不明鉄製品	61
第20図 3号墳出土武器・工具・不明鉄製品	31	第43図 将軍山古墳群出土遺物	64
第21図 3号墳出土馬具1	33	第44図 前期中葉前後の古墳の墳形	66
第22図 3号墳出土馬具2	34	第45図 安威古墳群(5~11号墳)の地形	80
第23図 4号墳石室実測図	36	第46図 安威5号墳詳細	81
		第47図 安威12号墳探集埴輪1	84
		第48図 安威12号墳探集埴輪2	86
		第49図 安威12号墳探集埴輪3	87
		第50図 安威12号墳探集須恵器	88

## 表目次

第1表 将軍山古墳群一覧	1	第2表 前方部における各斜面の大きさ	67
--------------	---	--------------------	----

# 第1章 はじめに

茨木市史編さん室では、平成17(2005)年3月に『將軍山古墳群I』(考古学資料調査報告集1)と題して、茨木市安威小字將軍山に所在した將軍山古墳についての調査報告書を刊行した。同書は、昭和39(1964)年に宅地開発によって消滅した將軍山古墳から出土した埴輪の整理報告を中心としたものであり、これによって、実体がよく知られてこなかった將軍山古墳の築造時期や淀川流域の前期古墳の中での位置づけを図ることが可能となった。

一方、將軍山古墳の周囲には他に5基の後期古墳が存在したことが知られており、「將軍山古墳群」なる名称は、これらの後期古墳と將軍山古墳とを一体的に捉えた総称である。このうち、現存するのは1号墳(將軍塚古墳・現大鐵冠鎌足古廟)のみで、3~7号墳が將軍山古墳(2号墳)とともに調査の後、地上から完全に姿を消している。その際の調査資料は、將軍山古墳(2号墳)のものとともに、調査を実施した大阪市立博物館に長らく保管(昭和59(1984)年に茨木市立文化財資料館に移管)されてきたが、『將軍山古墳群I』では同資料について一切触れることができなかった。本書は、『將軍山古墳群I』刊行以後、継続してきた、3~7号墳の出土遺物、図面、写真類の整理・検討作業の成果を中心に報告するものである。

なお、本書第2章には、將軍山古墳(2号墳)の墳丘に関する資料の整理・検討成果をあわせて掲載した。『將軍山古墳群I』では、將軍山古墳の埴輪のみの報告となつたため、ここで墳丘の形態やその構築技法、葺石に関する報告を補うこととする。また附篇として、安威古墳群の測量調査、免山篤氏所蔵の安威12号墳採集埴輪・須恵器、溝咲神社所蔵の神人龍虎画像鏡に関する報告を掲載した。本書を通じて、茨木市域とりわけ安威地域の古墳に対する理解が深まれば幸いである。

(廣瀬 覚)

第1表 將軍山古墳群一覧

古 墓	墳 形	規 模	埋 葩 主 体	開 口 方 向	出 土 遺 物	備 考
1号墳 (將軍塚古墳)	円 墳	—	右片袖式横穴式石室	南	—	
2号墳 (將軍塚古墳)	前方後円墳	墳長約107m	堅穴式石槨	—	石袋勾玉・ガラス製小玉 ・石劍頭・鉄劍・鉄鏃 ・鐵劍・鐵刀・短刀・鐵錐	1956年調査 1964年調査
3号墳	円 墳	径約25m	左片袖式横穴式石室	南西	須恵器・土師器・鐵錐 ・鐵刀・工具・馬具	1964年調査
4号墳	—	—	横穴式石室か	—	須恵器・石製骨玉・鐵錐 ・鐵刀・鐵錐・工具	1964年調査
5号墳	—	—	横穴式石室	南西	須恵器・鐵錐	1964年調査
6号墳	—	—	—	—	—	久番 (3号墳墳丘上の常式石門)
7号墳	—	—	横穴式石室か	—	須恵器・ガラス製小玉・ ガラス製丸玉・鐵錐・工具・馬具	1964年調査

## 第2章 将軍山古墳(2号墳)の墳丘

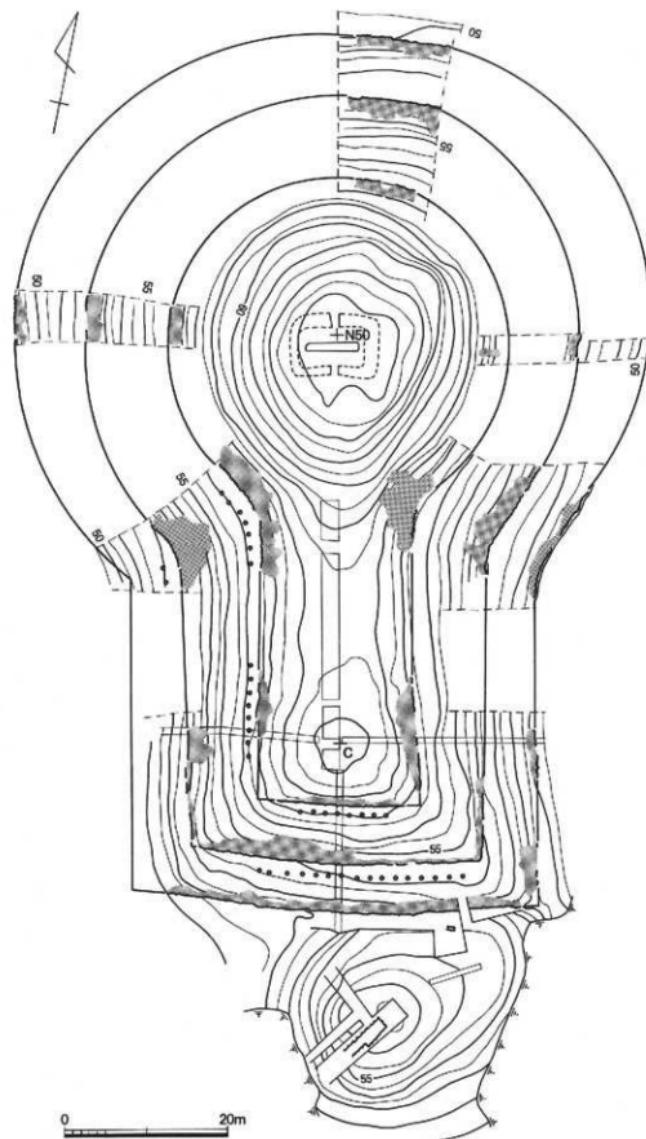
### 1 墳丘の形態と構築過程

将軍山古墳の墳丘に関して残された実測図としては、墳丘全体および前方部前面に付設する3号墳の位置を記した平板測量図(原図1:200)と、前方部を中心とする土層断面図(原図1:10)、および葺石・埴輪列検出状況の平面図(原図1:10)の3種がある。このうち土層断面図と平面図については、図中に標高と局地座標(東西南北を示す「E」「W」「S」「N」と距離を示す数値の組合せ)が表記されていた。当初は、この局地座標がどこを原点としたものであるのかが不明であったが、幸いにも測量図中の前方部に記された細長い長方形の枠が、墳丘主軸およびそれに直交するラインに沿って設定されたトレンチの表現であること、土層断面図はこの前方部のトレンチの壁面を記録したものであることが、図面相互の対応関係から明らかとなった。それらの原図を照合させた結果、将軍山古墳調査時の局地座標は、前方部頂のトレンチ交差部分を原点として配された点が明確となった。

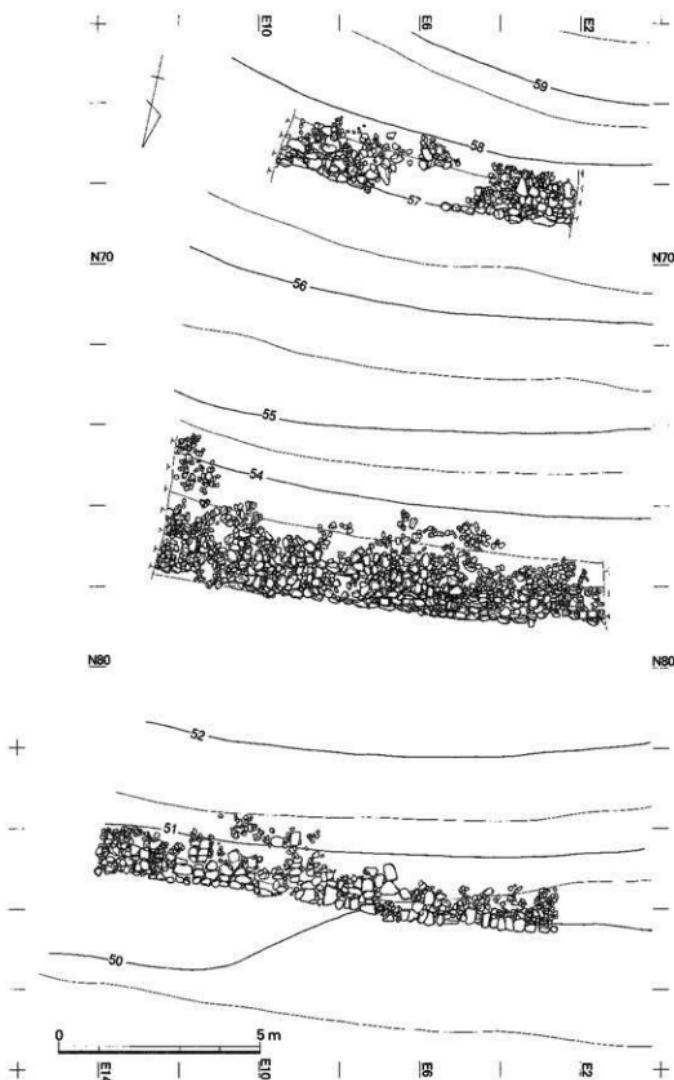
その点を踏まえて、平板測量図に各調査区の平面図を貼り込んで作成したものが第1図である。図中の灰色のトーンは検出された葺石の残存範囲、○は埴輪の検出位置を示している。これによると、将軍山古墳の墳丘調査は前方部を中心に広範囲にわたって実施されたものの、墳丘全体を完掘するには至らず、とりわけ後円部は部分的な調査に留まったことがわかる。等高線は原則として0.5m単位で図示しているが、未調査部分については等高線の表記を控えた。これは、未調査部分の等高線が原図では破線で表現されており、忠実な等高線ではないと判断されたためである。見苦しい図面となるが、墳形に対する誤解を招く恐れがあるため、この部分の等高線は敢えて省略することとした。

そうした不備を含むものの、この図を通して、墳丘は後円部、前方部ともに3段築成であることがはっきりと見てとれる。墳形は、後円部が厳密な正円を描かず、とりわけくびれ部付近は湾曲が緩く、前方部への変換点も不明瞭である。前方部は両側面がほぼ平行して直線的に走る。前方部前面も概ね直線的であるものの、中段、下段裾は西側がやや湾曲する。墳長は、後円部北側の調査区が主軸よりや東に外れるため推定値となるが、107.3m前後とみて大きな間違いはないだろう。墳丘各段の傾斜角度は概ね30度前後、テラス幅は1.5m前後を測る。

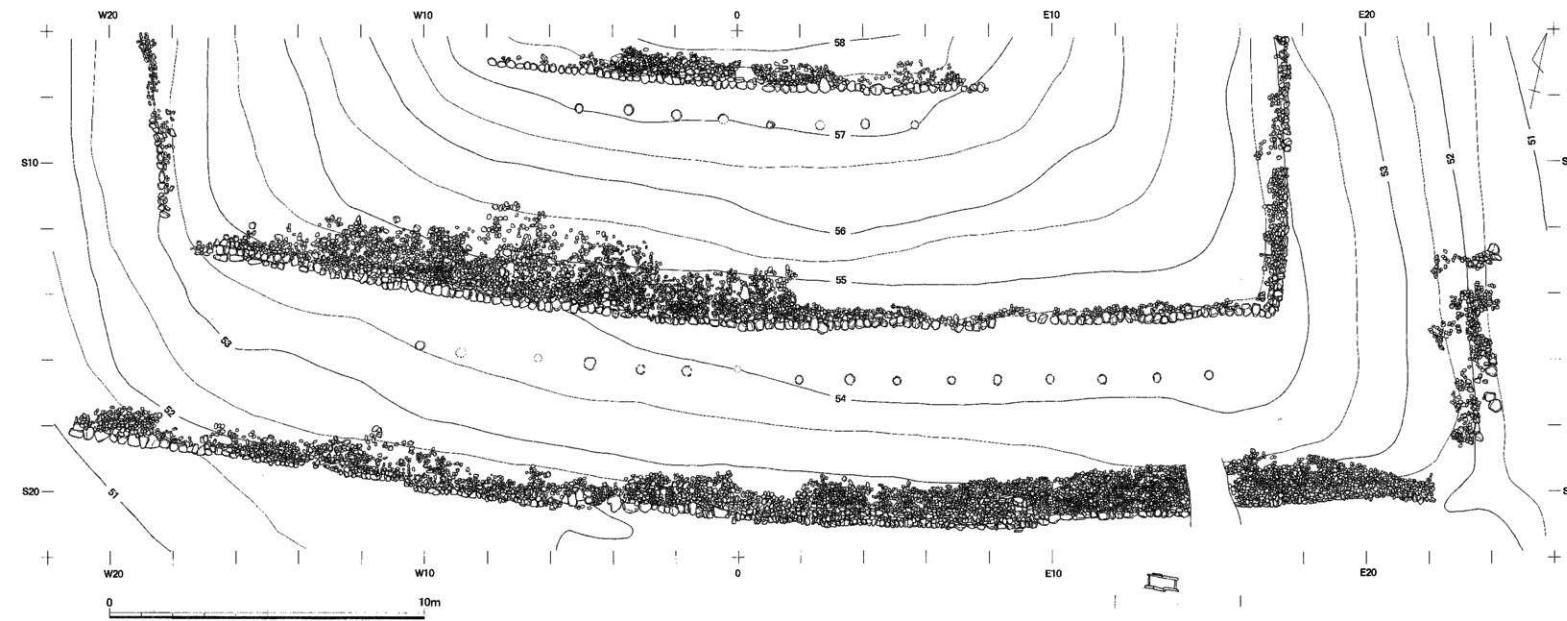
後円部径は最大でも77.5m前後で、過去の報告(約84m)[大阪市博1965]よりは低い数値となる。また前方部長は40.5m前後で、後円部径と前方部長の比はおよそ2:1となり、一般的な前方後円墳よりも極端に前方部が短い値となる。ただし、この数値は墳丘裾(下段裾)での計測によるものであり、中段では約3:2、上段では4:3と、上段ほど前方部長の比が大きく増加することとなる。この点は、将軍山古墳の構築過程と密接な関係があると推測される。



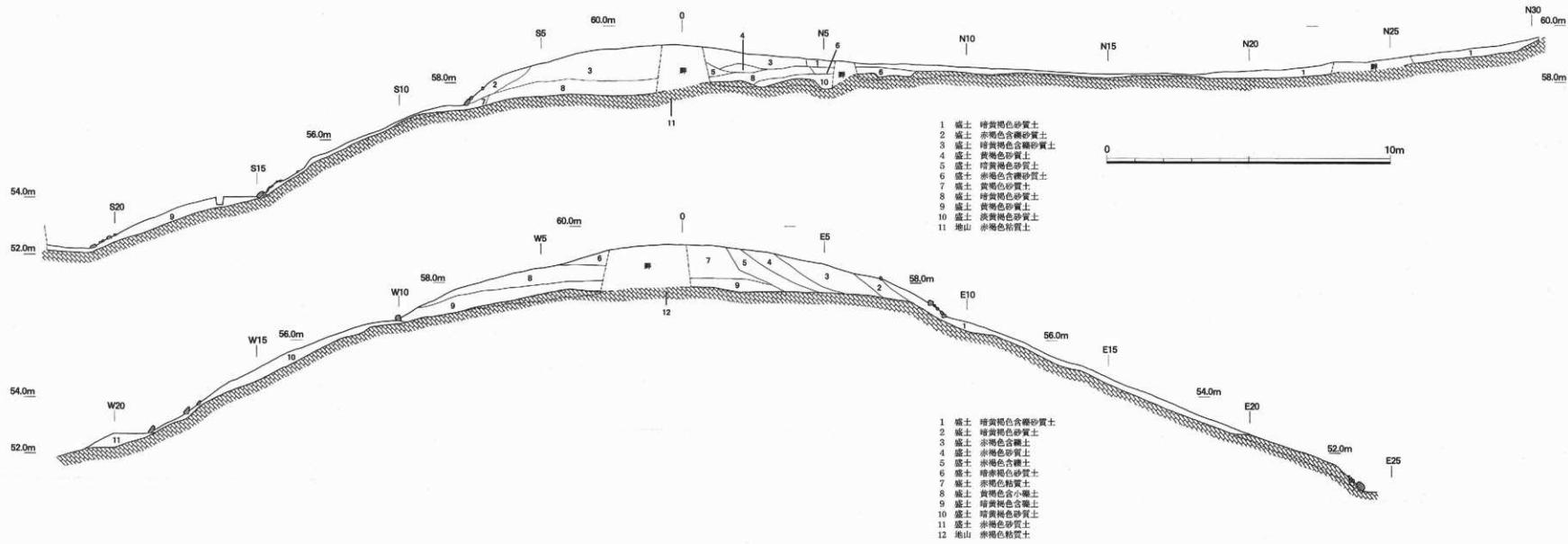
第1図 将軍山古墳墳丘復元図



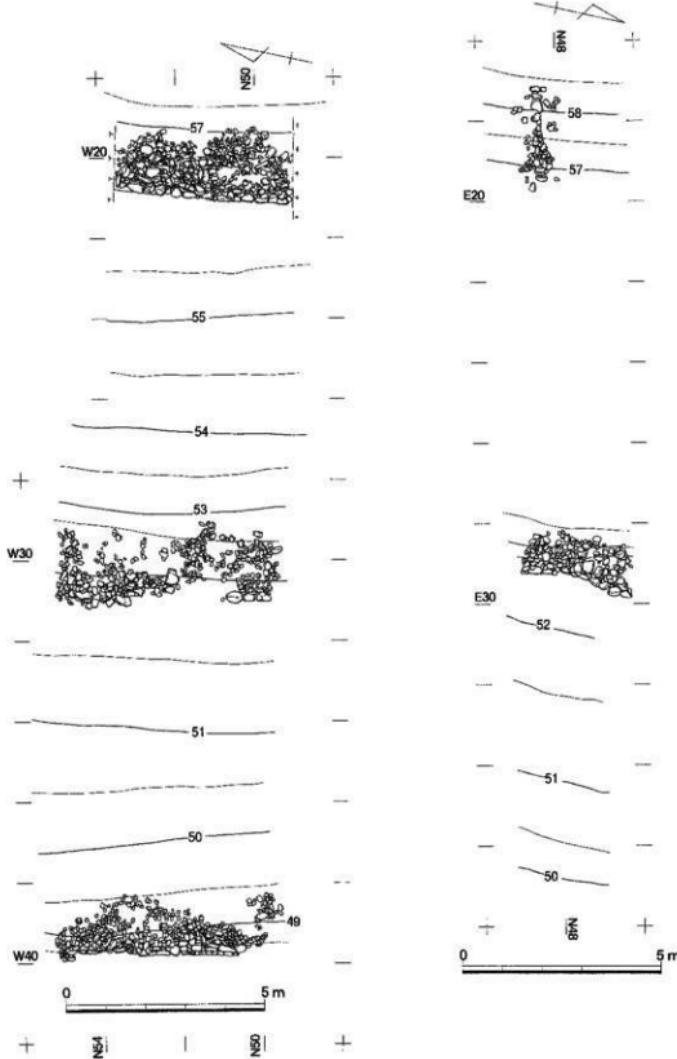
第2図 後円部北側蓋石平面図



第3図 前方部南側葺石および埴輪列平面図

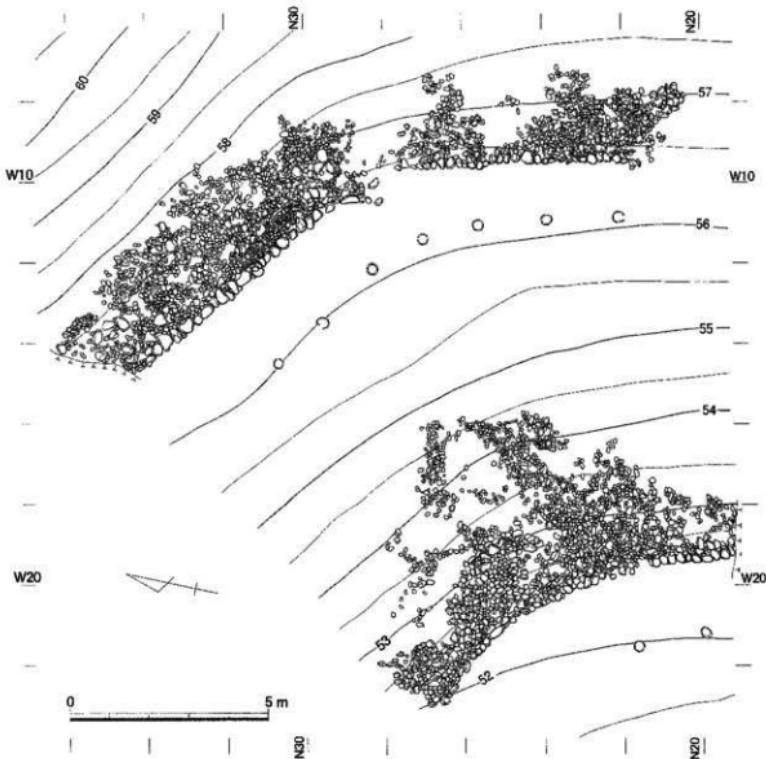


第4図 前方部土層断面図（上：南北トレンチ西壁 下：東西トレンチ北壁）



第5図 後円部西側蓋石平面図

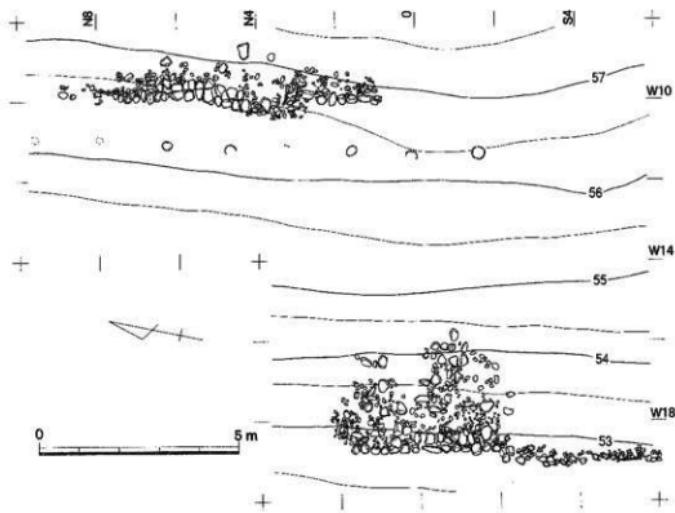
第6図 後円部東側上段・中段蓋石平面図



第7図 西側くびれ部上段・中段墓石および埴輪列平面図

第4図の前方部南北・東西トレンチの断面図によると、将軍山古墳の墳丘は、前方部墳頂部に約1.5mほどの盛土が施されており、各段表層部分にも若干の盛土がなされているものの、それを除く墳丘の大部分が地山を利用して構築されていることがわかる。昭和31(1956)年の後円部豊穴式石槨の調査成果〔小林1956〕によると、深さ2m余の真横の下部0.4~0.5mは地山を掘り下げて成形しているとのことであり、したがって後円部も同様に墳頂下1.5mよりも下部は地山によって成形されていたものと判断できる。

将軍山古墳は、南北方向に伸びる洪積丘陵の南端に立地するが、以上の調査所見からは、墳丘は比較的傾斜の緩やかな南北尾根の先端を最大限に利用するかたちで成形されたものと理解できる。おそらく尾根先端の最高地点を後円部墳頂とし、そこを基準として各部位の設定がなされていったものと推察されるが、そうした高低差のある地形上では著しく斜距離での割付を強いられ



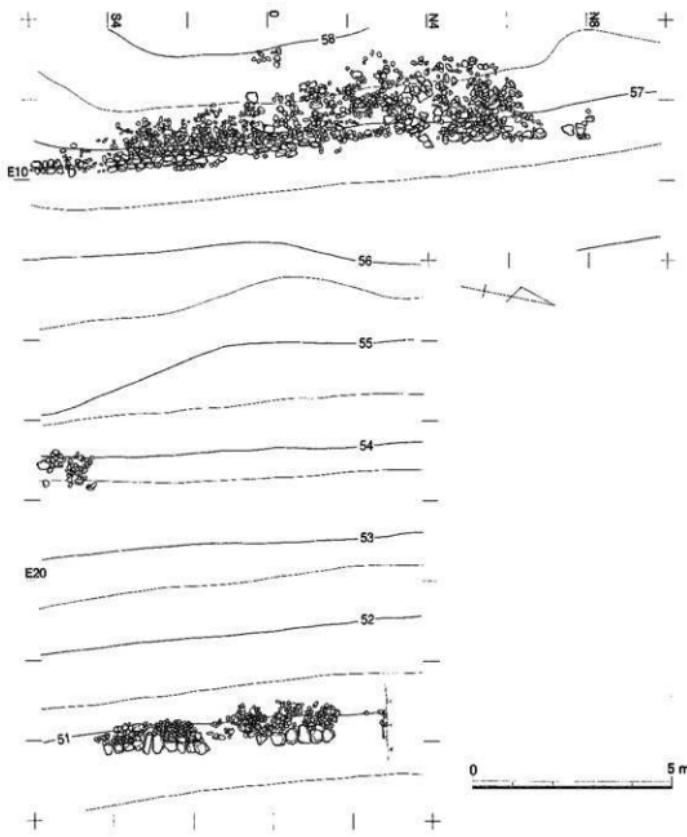
第8図 前方部西側上段・中段墓石および埴輪列平面図

ることになるため、墳丘下部ほど計画上のプランから逸脱する可能性が高まる。上述の後円部径と前方部長の比率が上段と下段で大きく異なる点は、そうした旧地形に制約された墳丘構築の結果と理解できよう。また、くびれ部の屈曲が不明瞭な点も当初から計画された形状ではなく、尾根の旧状や地山の削り込みの甘さに起因したものと推測される。

なお、前方部先端東側には径 25 m 前後の円墳である 3 号墳が取り付くが、3 号墳が構築されるのは後述のように将軍山古墳が築造されて約 200 年後のことである。後に 3 号墳として利用されることとなるこの部分は、将軍山古墳構築時に前方部から切り離された残丘部分と推定される。調査写真からも将軍山古墳前面東側は、この尾根先端を V 字谷状に削り込んで切断することで成形されている様子が見てとれる（図版 4 および図版 10 右下）。一方、前方部前面下段では、高等線が埴輪軸に対して斜交して走っており、また 3 号墳西側の等高線の流れからも、前方部西側に關しては南西にむかって下がる尾根の旧状をほぼそのまま利用するかたちで構築されているものと推測される。前方部前面の中・下段掘ラインが緩やかに湾曲する点も、そうした旧地形の成形が不徹底である点を反映したものと理解できる。

## 2 墓石

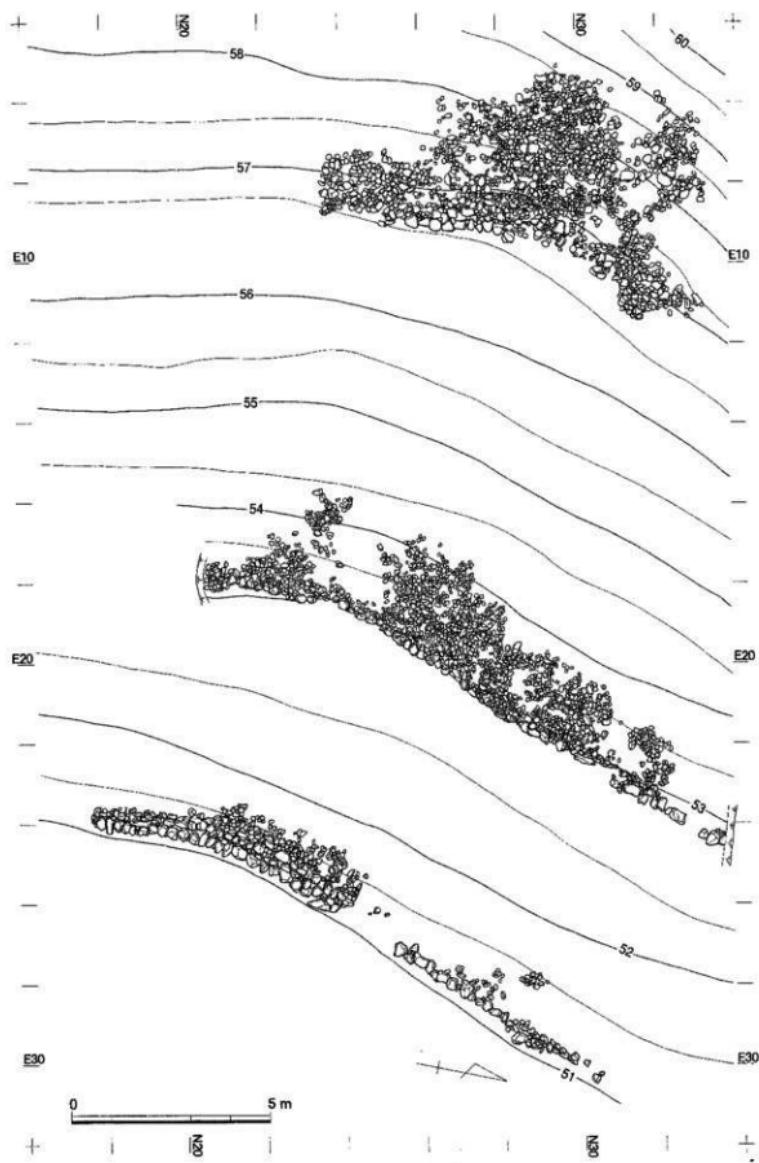
墓石および埴輪列に関しては、調査区全域にわたる平面図が残されており、これと調査写真とを合わせて検討することで、將軍山古墳の墓石の施工方法のほぼ全容を理解することができる。



第9図 前方部東側葺石平面図

すなわち、将軍山古墳の葺石は、基底石に扁平な石材を用い、これを縦使いして斜面に立て掛けた点を基本的な特徴とする。基底石よりも上部の石材は、比較的小振りの川原石を下から丁寧に積み上げる。また、土層断面図からも、裏込めはほとんど使用されていないものと判断される。その他、特筆すべき点として、各調査区とも、所々にやや大きめの石材を用いて縦方向の区画列が設けられている点を指摘できる。

ただし、調査区ごとに若干の様相の差も指摘できる。例えば、前方部前面下段の東半は基底石も含めて使用石材が総じて小さい。また、前方部東斜面上段や後円部北側上段、後円部西側下段では一部に基底石を横使いする状況が確認できる。その他、各調査区を通じて扁平な石材を面的



第10図 東側くびれ部墓石平面図

に数枚貼り付ける部分が認められる。しかしながら、そうした部分的な相異を含むものの、古墳全体としては、基底石のみを縦使いして斜面に貼り付けるという手法が實かれていると言える。そのことは、基底石にも小振りな石材を用いる前方部前面下段東半でも、執拗に基底石を縦使いしている状況からも見てとることができる。

こうした明確な裏込めを用いず、かつ扁平な石材を基底石として斜面に立て掛ける特徴をもつ葺石は、向日市元船荷古墳〔京大 1971〕や同五塚原古墳〔和田ほか 2003〕、神戸市西求女塚古墳〔安田編 2004〕など、淀川右岸から大阪湾北岸にかけての前期古墳で採用される傾向がある。ただし、それらの古墳の葺石は將軍山古墳のものよりも傾斜が急角度で、五塚原古墳では裾部から急角度で立ち上った後、途中で傾斜変換し上方斜面へと至る特徴が確認されている。一方、將軍山古墳の葺石は、そうした明確な立ち上がりをもたず、裾部から上部まで 30 度前後の一定の角度で葺かれている。この点は、上記 3 基の古墳が古墳時代前期でも初頭の築造であるのに対し、將軍山古墳の築造時期がそれよりも後とする点を示すものと理解できよう。

なお使用石材は、写真による限り縦じて円磨度が高い印象を受ける。とりわけ基底石は、いずれも角が落ち全体的に丸みを帯びる。岩石名や風化度等は写真からはうかがうことはできないため、採取地を厳密に議論することは困難である。ただし、ほぼ同時期に佐保川を挟んで対岸に築造された紫金山古墳の葺石が近くを流れる勝尾寺川や佐保川の石材を用いているとされる〔橋本 2005〕ことからすると、將軍山古墳の葺石も、丘陵のすぐ西脇を流れる佐保川を中心に採取された蓋然性が高いものと推測される。

### 3まとめ

以上、將軍山古墳の墳丘、および葺石に関する過去の調査内容を再検討してきた。將軍山古墳の墳丘はかなりの広範囲にわたって発掘されたことが周知されてきたものの、それに対する詳細な報告はなく、墳丘規模についても調査直後に出了された略報〔大阪市博 1965〕によって約 110m という数値が得られていて過ぎない。しかしながら、今回の検討成果によって、墳長は 107m 強であることが判明し、後円部径も最大 77.5m 前後、前方部長も 40.5m 前後となり、いずれも略報の数値を改める結果となった。またその構築方法も、盛土の使用量が極端に少なく、墳丘の大部分が地山で成形されていること、そのために墳丘形態は旧地形に制約されてやや歪な形状をとることが判明した。さらに葺石については、基底石に扁平な石材を縦使いして貼り付けるという、淀川右岸から大阪湾北岸にかけての前期古墳でしばしば用いられる技法が採用されていることが明らかとなった。

ところで、佐保川の対岸に位置する紫金山古墳〔阪口編 2005〕は、近年の調査で墳長が約 110m を測る後円部・前方部とも 3 段築成の前方後円墳であることが判明している。墳丘は將軍山古墳同様、大部分が地山削りだしによって成形されるものの、全体の形状は將軍山古墳とは一致しないようである。ただし、両古墳とも墳丘が旧地形の形状に大きく制約を受けており、墳長の 3

mの差異も含めて墳丘形態の不一致が何らかの意味を有するかどうかはにわかに判断できない。一方、葺石の様相については、將軍山古墳でみられたような基底石に扁平な石材を貼り付ける特徴が紫金山古墳では全くと言ってよいほど確認できないことから、それぞれ異なる技術系譜によって施工されたものと理解できる。『將軍山古墳群Ⅰ』で検討したように、両古墳間では埴輪の系譜関係も大きく異なっており、これらの点は、今後、両古墳築造の背景を理解していく上で重要な意味を有するものと考える。

將軍山古墳については、これまで、後円部墳頂に築かれた竪穴式石槨に用いられた結晶片岩類がほぼ全て四国吉野川流域産と推定されること、同石槨の埋葬頭位も近畿地方では珍しく四国地域に多い東西方位であること、さらには出土した壺形埴輪の技術系譜が東四国地域の壺に求められること〔廣瀬 2005〕から、東四国地域との密接な関係の中で築造されたことが推察されてきた。加えて、北條芳隆は徳島県板野町に所在する愛宕山古墳と將軍山古墳との間で、墳丘の築造規格が共有されている可能性を指摘している〔北條 2003〕。

北條の指摘は、上述の將軍山古墳の略報の数値に基づくものであり、また旧地形に大きく制約を受けた將軍山古墳墳丘の歪な形状が、他古墳との比較においてどれほど耐えうるかは定かではない。しかし、前期前半段階において積石塚を中心として墳丘構築をおこなっていた東四国地域がそれを放棄し、地山削り出しによる大型の墳丘を構築し始める背景には、近畿地方の古墳との密接な関係が十分想定されるところである。將軍山古墳の築造された前期中葉の段階では、地山削り出しを基本とする前方後円墳が淀川流域で多数築かれており、將軍山古墳の築造はそうした淀川流域内の動向とも無関係ではない。むしろ古墳構築技術をめぐる広範な地域間交流の結節点に將軍山古墳が位置した可能性を指摘しておきたい。

(廣瀬)

## 第3章 3～7号墳の調査

### 1 将軍山古墳群について（第11図）

将軍山古墳群とは、前期古墳である2号墳（将軍山古墳）とその周間に展開する5基の後期古墳の総称である。これらの古墳のうち、現存するのは北側の高所に位置する1号墳（将軍塚古墳）のみで、他の5基の古墳は宅地開発により姿を消している。

古墳群は北摂山地から南に伸びる洪積丘陵の南端に位置しており、中央に前方後円墳である2号墳（将軍山古墳）が所在し、その北側の山頂には1号墳が位置する。径約25mの円墳である3号墳は、2号墳の南側にあり、前方部に接する形で存在した。3号墳の南で検出された石室床面が4号墳であり、3号墳の南東で工事中に偶然発見された石室が5号墳となっている。2号墳の後円部北西で検出された石室床面が7号墳である。なお、将軍山古墳群では6号墳は欠番となっているが、今回の整理作業の結果、6号墳という名称は、2号墳の前方部前面から検出された箱式石棺に対して、調査時に与えられたものであることが判明した。この箱式石棺は、本来は周辺埋葬として扱われるべきものであったため、調査終了後に単独の古墳としての枠がはずされ、同時に「6号墳」の名称も使用されなくなったものと考えられる。

将軍山古墳群の後期古墳の調査は、昭和39年（1964年）に、2号墳の石棺移築調査や墳丘調査とあわせておこなわれた。調査は開発工事と並行しておこなわれており、調査風景の写真には丘陵の斜面を切り崩す重機の姿が写り込んでいる。当時の調査環境の厳しさは、5号墳がブルドーザーの掘削により発見された事実からもうかがえよう。このような環境にもかかわらず、大阪市立博物館による献身的な調査により、遺構・遺物の検出・記録化等がおこなわれた。この時の調査資料は大阪市立博物館を経て、現在茨木市立文化財資料館に保管されている。

昭和39年（1964年）の調査時のものとして保管されていた資料はコンテナ32箱にのぼる。後期古墳の資料は、そのうちの16箱に、2号墳の円筒埴輪や壺形埴輪とともに収められていた。資料の内容は主に須恵器と鉄製品であり、残された注記や石室床面から出土古墳の判別をおこない、その後、洗浄、接合、図化、写真撮影等の作業をおこなった。

本章では、これら文化財資料館保管資料の整理成果をもとに、2号墳周囲の後期古墳についての内容報告をおこなう。なお、本章においては、前期古墳である将軍山古墳を「2号墳」と記述するものとする。

（若杉智宏）



第11図 将軍山古墳群測量図

## 2 3号墳

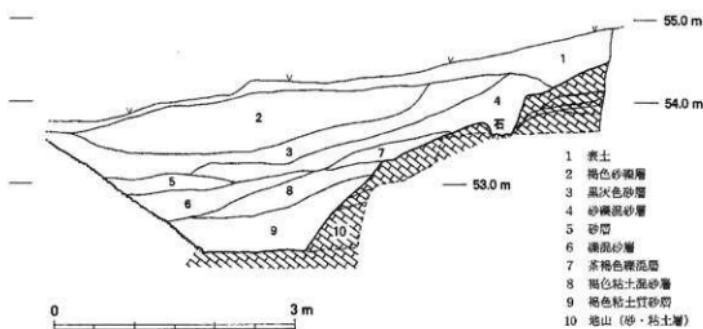
### (1) 墳丘

3号墳は、2号墳の南側に、前方部に接する形で築造されていた。3号墳の墳丘については、2号墳の測量図の一部として図面が残っている(第1図)。墳丘は、北東に張り出す楕円形を呈しており、過去の報告〔大阪市博1965〕によると、径約25mの円墳に復元できるようである。3号墳の墳丘に関する図面としては、第1図の他に、第12図(原図1:20)が残されている。この図は2号墳の前方部前面東寄りに残された畔の西側壁を西側からみた土層図と考えられ、2号墳の前方部前端と3号墳の墳丘の関係を知ることができる。この図によると、3号墳の墳丘は地山削り出しで成形されており、3号墳の墳裾と2号墳前方部の墳裾との間は約1.3mと非常に近接していたことが読み取れる。また図には、トレチ南端より約1.3m北側の3号墳墳丘上に、土坑のようなものが表されている。これについては、坑の底に石が存在したことが注記からわかる以外、一切情報が残されておらず、また、後述する箱式石棺とも位置が異なっていることから、何を表現したものであるのかを明らかにすることはできなかった。

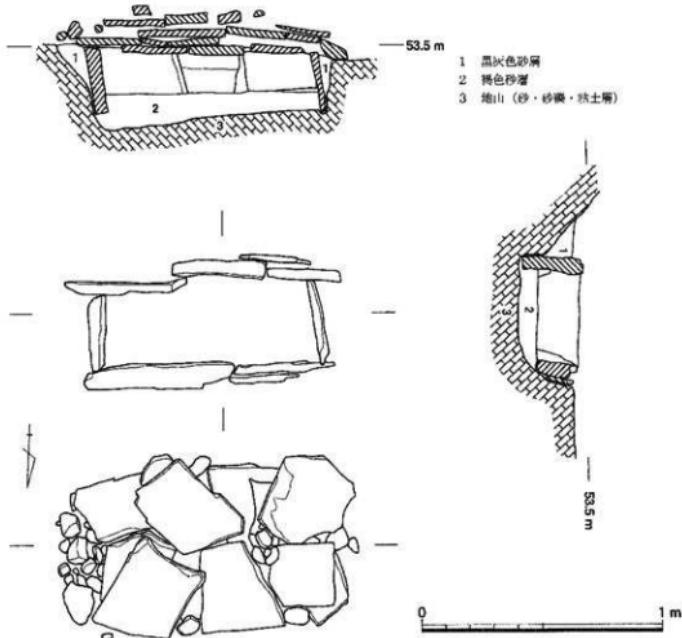
また、畔より約1m西側、2号墳の前方部前面基底石より約2m南側では、箱式石棺が検出されている(第1図)。この箱式石棺については、従来2号墳に帰属する周辺埋葬として記述がなされてきた〔大阪市博1965など〕。しかし、測量図の原図に残された注記によると、箱式石棺の高さは53.5m、2号墳前方部前面の基底石の高さは52.3mであり、両者の比高差が1m以上もあつたことがわかる。両者の位置関係は図版10の右下の写真をみても確かめることができ、この箱式石棺を2号墳の周辺埋葬と理解するには勝敗を覚える。仮に2号墳の周辺埋葬として箱式石棺を築く場合、その場所は前方部墳裾外側の平坦面に築くのが自然であろう。しかし、実際には石棺は3号墳の墳丘上に位置しているのであり、以上の理由から考え、この箱式石棺は、2号墳と同じ古墳時代前期に築かれたものではなく、後期古墳である3号墳の周辺埋葬として築かれたものと判断する。

### (2) 箱式石棺(第13図、図版10)

箱式石棺に関しては、平面図および立面図(原図1:10)が残されている。石棺は東西方向に長軸を向け、内法は長さ88cm、幅36cmを測る。蓋石には十数枚の板石を用いており、板石を長軸に沿って2列に並べ、隙間を礫で埋めることで蓋としていたようである。長側石には、北辺で3枚、南辺で4枚の板石が使用されているが、両辺ともそのうちの1枚は、平継ぎされた板石の継ぎ目を補う形で用いられている。石の継ぎ方は、2箇所が平継ぎ、1箇所が重ね継ぎとなっている。底石はもたず、小口は短側石が長側石に挟まれる構造をとる。板石の石材については、2号墳の竪穴式石槨と同じ結晶片岩であったとされている〔史学研究会1965、石部1975など〕。



第12図 2号墳前方部前端および3号墳墳丘の土層断面図（西より）



第13図 箱式石棺平面図・立面図

### (3) 横穴式石室

#### a 石室の構造（第14図、図版11）

3号墳の石室については残存状況が良好で、残された実測図（原図1:10）からその様相を知ることができる。以下、図面から読み取れる範囲で記述をおこなう。石室は、南西に開口する左片袖式の横穴式石室である。羨道前半部が崩壊しているため、石室の全長は不明であるが、残存長は6.1mを測る。玄室長は3.52m、奥壁幅は1.46m、玄室最大幅は1.58m、最小幅は1.43mである。玄門幅は0.92mを測る。側壁石材は3段目より上部が失われているため、玄室の高さは不明であるが、側壁の最大残存高は1.20mである。玄室の平面形はほぼ長方形を呈しており、西壁は多少の凹凸はあるものの、奥壁から玄門に向かって主軸にはほぼ平行にのびている。東壁は奥壁から玄門に向かって外側にわずかに開く。羨道は2.55mが残存しているが、それより先を失っているため、本来の長さは不明である。羨道の平面形は東壁が主軸にはほぼ平行であるのに対し、西壁は羨門に向かいやや外側に開いている。羨道幅は最大で1.0m、最小で0.91mである。羨道の石材は2段目までしか残存しておらず、最大残存高は玄門付近で1.16mを測る。

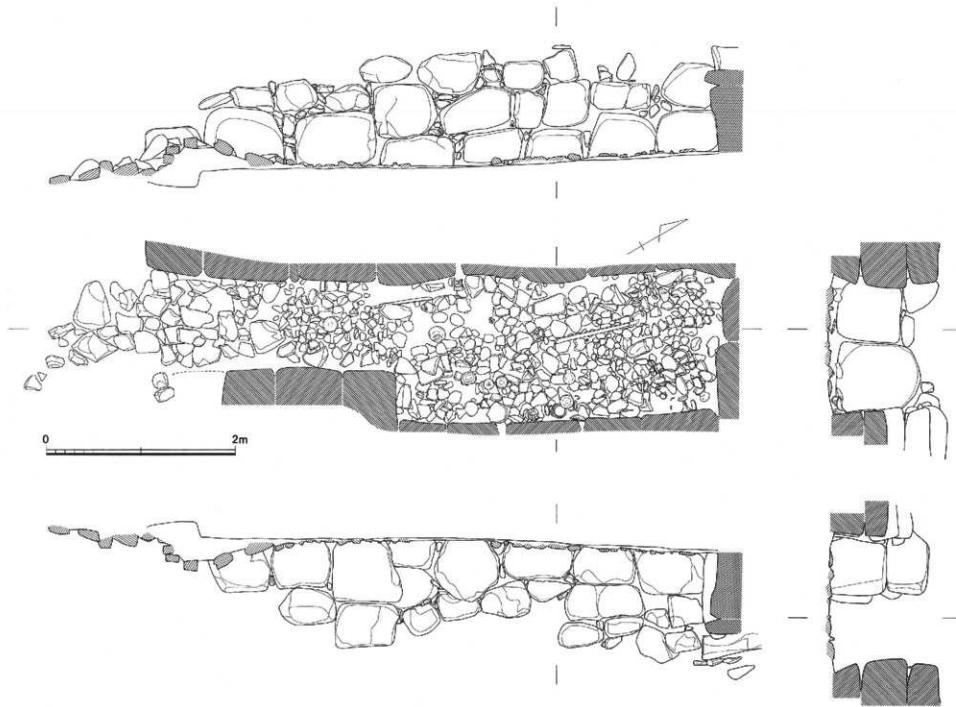
玄室の断面形をみると、残存している3段目まではほぼ垂直に積まれており、奥壁は幅75cm、高さ70cmと90cmの大型の石を左右に2石並べ、基礎としている。東西の側壁では幅60～85cmの大型の石を基礎とし、2段目以上はそれらと同等もしくは若干小さめの石を積み上げている。袖部の基底石には、幅75cm、高さ70cmの特に大型の石が据えられている。両壁とも玄室、羨道それぞれでは水平方向に目地が通っているが、玄門を境に水平方向の目地が途切れている。このことから、石室の構築単位は玄室と羨道で分かれていたと理解できる。

床面は奥壁側が高く、玄門との間で約15cmの比高差がある。玄室から羨道にかけては、10～15cmほどの大きさの敷石が施されていることが確認できる。また、羨道の敷石残存部より南、玄門より1.4～3.6mの範囲には、幅15～35cmの石が堆積している状況が記録されている。図面・写真のみでこれらの石群の性格を判断することは難しいが、転落石の集石、あるいは閉塞石の痕跡の可能性が考えられる。

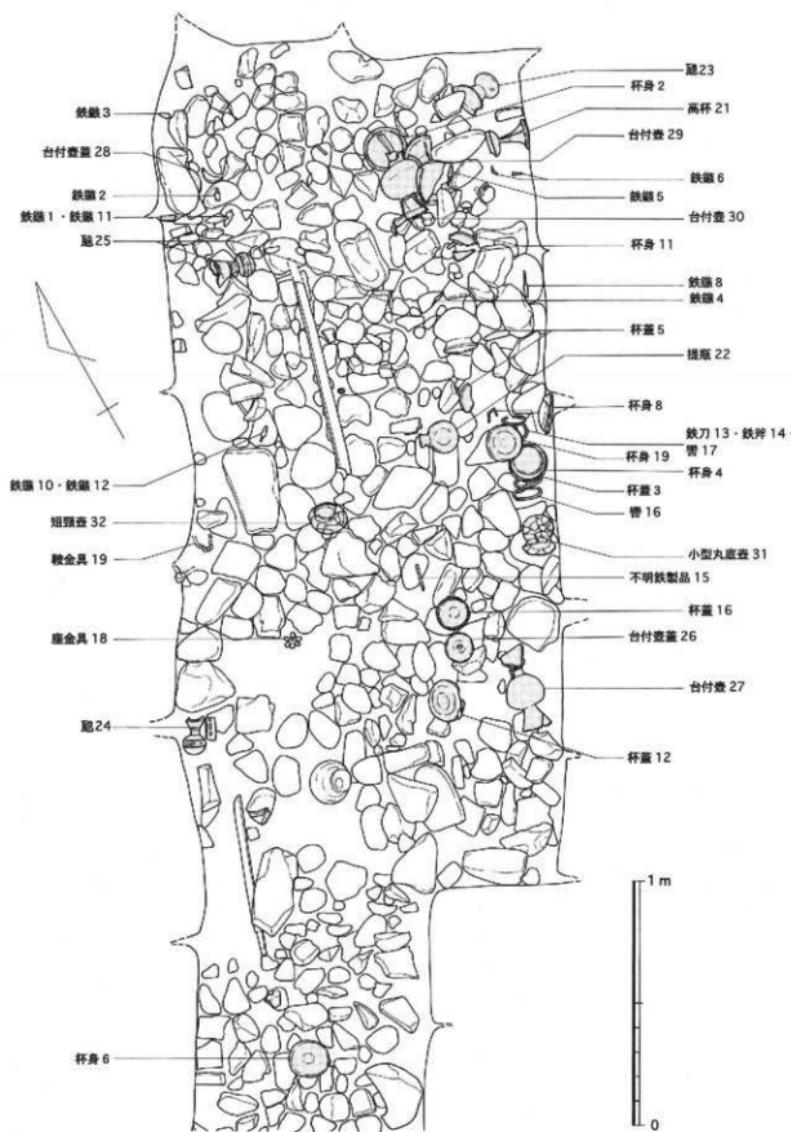
#### b 遺物出土状況（第15図、図版12）

3号墳の石室実測図には、床面から検出された副葬品の出土状況が記録されている。第15図は、第14図の床面部分を拡大して作成した遺物出土状況図である。実測図や遺物に残された注記、石室内の写真などから、図面と実際の遺物の対応関係が確実に判明したものにトーンを貼り、その位置を示してある（4号墳の第24図、5号墳の第33図についても、同様の方法で出土状況図を作成した）。

石室は調査時に既に上半が失われており、後世の盗掘や搅乱などの影響が想定できることから、検出された遺物も埋葬当時の位置を保つてはいないと考えられる。大阪市立博物館の報告によると、3号墳からは須恵器、土師器、鉄刀、鐵鏃、金環など50点ほどの遺物が出土したようであり



第14図 3号墳横穴式石室実測図



第15図 3号墳石室内遺物出土状況

〔大阪市博1965〕、また、第15図をみると、鉄刀や完形の土器などが多数認められ、その出土状況が確認できる。しかし、これらの遺物は、その全てが現存しているわけではない。過去の報告や図面から出土が明らかな鉄刀2本や完形と思われる壺2個体、金環などは所在が不明であり、調査終了から現在に至る40年以上の時間の中で失われてしまったようである。

須恵器は残りの良いものが多く、図によると、その大半は玄室東半から出土している。奥壁付近からは杯身や龜、高杯、台付壺などがまとめて出土しており、中央付近では蓋杯や堤瓶が馬具などとともに検出されている。袖部寄りには杯蓋や台付壺などが認められる。

鉄製品には鉄鎌、馬具、鉄刀などがある。鉄鎌の出土は玄室北半に限られ、奥壁から1.6mの範囲に散在していたようである。馬具は大半が玄室中央からの出土で、西側壁沿いに鞍金具が1点、西側壁より東47cmの場所に座金具が1点、東側壁沿いに轡が2点認められる。鉄刀は、轡17に銛着していた刀13以外に玄室中央と玄門付近から1点ずつ出土していることが図面より知られる。刀13を含め、全部で3本の刀が石室内に副葬されていたのか、刀13が他のどちらかの刀に接合し、副葬本数が計2本となるのかは、資料が現存していないため不明と言わざるを得ない。図面を見る限り、失われた2点の刀はともに残存状況が良好であり、図上の計測値で、玄室中央の個体が残存長79cm、玄門付近の個体が残存長67cmを測る。

また、図面からは、玄室中央の刀の東脇で小さなリング状の遺物が出土していることが確認できる。大変小さく描かれているが、原図には横に遺物の取り上げ番号が注記されており、床の小石の表現などではないことがわかる。確実に断定はできないものの、これは報告〔大阪市博1965〕で出土が伝えられる金環を表したものである可能性が高い。

以上、3号墳の遺物出土状況を残された図面から読み取れる範囲で述べてきた。検討の結果、3号墳の副葬品として、次項で詳述する出土遺物のほかに、少なくとも鉄刀2点、壺2個体、金環1点が存在することが明らかとなった。

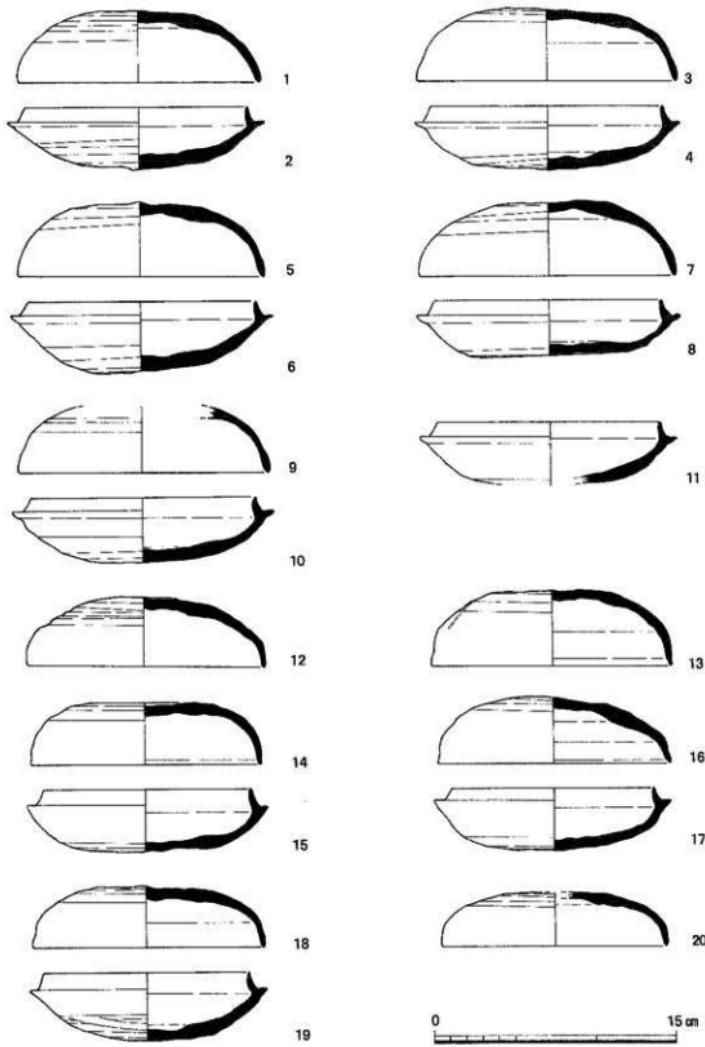
#### (4) 出土遺物

##### a 土器

3号墳から出土した土器は、須恵器の蓋杯が20点(1~20)、無蓋高杯が1点(21)、提瓶が1点(22)、龜が3点(23~25)、台付長頸壺が3点(27・29・30)、台付長頸壺の蓋が2点(26・28)である。土師器は小型丸底壺(31)と短頸壺(32)が各1点出土している。

##### 須恵器(第16~19図1~30、図版13~15)

杯蓋はその形状から、大きく2種類に分けられる。一つは口径が15.0~15.9cmと大きく、天井部と体部の境界をもたず、口縁端部を丸くおさめるもの(1・3・5・7・9)で、もう一つは口径が14.2~14.7cmと小さく、体部がきつく立ち上がり、天井部と体部を弱い凹線で区画するもの(12~14・16・18)である。ここでは前者をI群、後者をII群と呼称する。II群には、口縁端部内面に一条の沈線をもつものがある(13・14・16)。II群のうち、12はやや不整形で、天井部と口縁部の境界付近に段が残る。また、13の天井部には直線状のヘラ記号が認められる。色調は、



第16図 3号墳出土須恵器 1

I群が灰白色を呈するのに対し、II群は灰色を呈する点で大きな違いが見られる。なお、20は暗褐色を呈し、器表面の摩滅が見られ、扁平で全体的にぶい印象を受ける。各部の形状からみてもどちらの群にも属さない。

回転ヘラケズリは、I群のうち1・5・7・9がロクロ左回りである他は、全てロクロ右回りで施されている。将軍山古墳群の蓋杯のヘラケズリ方向は通常ロクロ右回りであるため、ロクロ左回りのヘラケズリはI群の特徴と言える。ヘラケズリの範囲は、I群では、3・5が天井部から全体の1/2程度と最も狭く、7が全体の4/5程度と最も広い。一方、II群では、全てが天井部から全体の1/2程度となり、I群ほど広い範囲に施す個体は見あたらない。内面調整は、両群とも回転ナデを施した後、内面中央に一方向のナデを施している。

杯身は、口径が13.8～14.4cmと大きく、受部が薄く水平に突出する一群（2・4・6・8・10・11）と、口径が12.4～12.7cmと小さく、受部の突出が弱い一群に分けられる（15・17・19）。前者は杯蓋のI群に、後者は杯蓋のII群にそれぞれ対応する。色調のうえでも、前者は灰白色を呈し、後者は灰色を呈しており、各々の杯蓋に対応している。両群とも立ち上がりは低く内傾し、口縁端部は丸くおさめている。

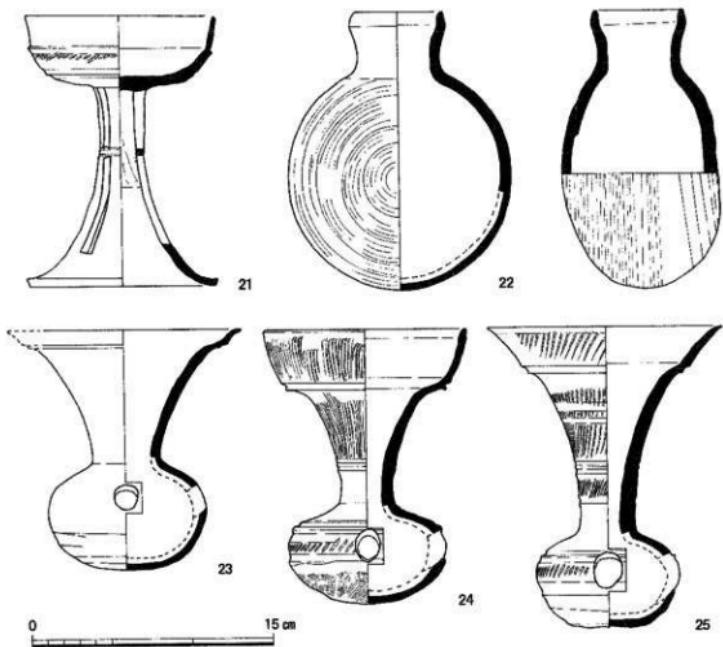
回転ヘラケズリの方向は、I群の6・8・10がロクロ左回りであるが、他は19を除いて、全てロクロ右回りとなっている。19では、ロクロ右回りの回転ヘラケズリをおこなった後、さらにロクロ左回りの回転ヘラケズリを施している。ヘラケズリの範囲は、I群では11が底部外面の1/2程度である他は、底部外面の2/3～3/4程度と広い。II群は、15・19が底部外面の1/2程度で、17が底部外面の2/3程度であり、概してI群より狭くなっている。内面調整は、両群とも回転ナデを施した後、内面中央に一方向のナデを施している。

無蓋高杯（21）は、口縁の一部を欠損する他は、ほぼ完存する。杯部中位に稜をもち、下位には1本の凹線を巡らせ、段をつくる。その間には列点文を施文している。脚部は、杯との接合部から中位までは径が小さく、中位から裾部に向かいラッパ状に広がる。裾部は断面四角形の段をもたせる。脚部中位に2条の凹線を引き、その上下に3方の透孔を穿孔するが、凹線が透孔に切られていることから、その製作順序がわかる。脚部内面には接合時の絞り痕が見られる。

提瓶（22）は、小型で扁平な胴部をもつが、把手を取り付けないものである。体部最大径は13.8cmである。口縁部は緩やかに外反した後、端部付近で内湾し端部を丸くおさめている。体部前面には1cmあたり12～13本ほどのカキメを施す。背面はロクロ右回りの回転ヘラケズリで仕上げている。体部内面には円盤閉塞の痕跡が明瞭に残る。

龜には無文のもの（23）、頸部を2段に分けるもの（24）、頸部を3段に分けるもの（25）がある。23は頸部基部幅4.2cm、体部最大径9.7cmを測る。体部中央には径1.5cmの正円形の孔があく。口縁部高は1.1cmと短く、頸部との境で明瞭に屈曲した後、端部が強く外反する。調整は、底部外面がロクロ右回りのヘラケズリで仕上げられ、他は内外面とも回転ナデが施される。頸部内面には絞り痕が確認できる。

24は頸部基部幅3.4cm、体部最大径9.8cmを測る。体部中央には径約1.5cmの梢円形の孔があく。



第17図 3号墳出土須恵器 2

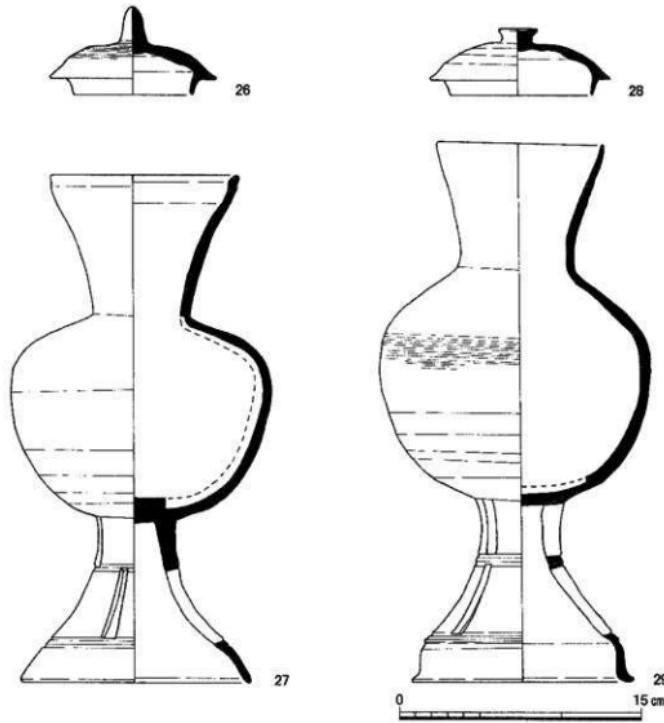
口縁部高は3.7cmと大きく、その外面には直線文が施される。櫛状工具で上から下へ施文されたよう、櫛の単位は5本程度であることが確認できる。頸部中位には2本の凹線を巡らし、その上段にも直線文を施す。口縁部の直線文と同じく、櫛状工具で上から下へ施文されている。この直線文は頸部中位の凹線に切られており、直線文施文後に凹線を巡らしたことがわかる。体部の肩には凹線が巡り、明瞭な段をなす。体部下方にも1本の凹線が巡り、肩部の段との間に櫛描列点文が施されている。調整は、底部外面はクロ右回りの回転ヘラケズリの後、底部中央を中心として放射状にハケが施される。その他は内外面とも回転ナデである。また、頸部内面には絞り痕が認められる。

25は頸部基部幅3.5cm、体部最大径8.9cmを測り、体部中央には径約1.7cmの楕円形の孔があく。口縁部は大きく開き、端部は薄く仕上げている。口縁部外面には櫛描列点文が巡っている。頸部中位には2本の凹線が巡り、下位にも1本の凹線が巡る。凹線により3段に分けられた頸部の上段と中段にも列点文が施文される。体部の肩には凹線が巡り、明瞭な段をなしており、また楕円形孔の下方にも1本の凹線が走る。肩部の段と体部の凹線の間を埋めるように列点文が施されて

いる。梢円形孔は、肩部の段、列点文、下方の凹線の全てを切って穿孔されており、製作の最終段階であけられたことがわかる。調整は、底部外面はロクロ右回りの回転ヘラケズリで、その他は内外面とも回転ナデである。頸部内面には不明瞭ではあるが、絞り痕が確認できる。

台付長頸壺は、脚部に千鳥状に2段の透孔をもつもの(27)、上下に並列する2段の透孔をもつもの(29)、1段の透孔をもつもの(30)がある。

27は体部最大径16.1cm、脚部径14.0cmを測る。体部はやや肩が張り、口頸部は外反しながらのびた後、口縁付近で内彎する。口縁端部は肥厚し、内面に稜をもつ。脚部はスカート状に開いた後、底端部付近で若干内彎する。端部は丸くおさめている。脚部中位には1本の凹線を巡らし、下位にも2本の凹線を巡らす。脚部上段と中段に幅0.4~0.6cmの長方形透孔を千鳥状に3方向に穿っている。脚部凹線や体部底面との切り合い関係から、透孔の穿孔は、凹線施文や、体部と脚部の接合が終了した後におこなわれたことがわかる。調整は、全体が内外面とも回転ナデで仕

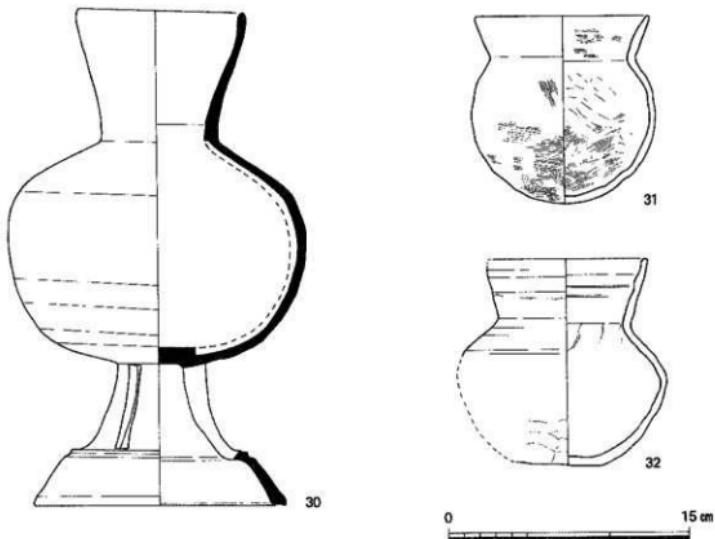


第18図 3号墳出土須恵器 3

上げられている。なお、外面の体部下半から底面にかけてはナデに先行してヘラケズリが施されていたと推測される。また、体部の肩部より上と脚部の下半には自然軸の痕跡が確認できる。口頸部内面には釉の痕跡がみられないため、焼成時には蓋を被せた状態で焼かれたと考えられる。

29は体部最大径16.8 cm、脚部径13.5 cmを測る。体部は肩の張りが弱く、球形に近い。口頸部はやや外反しつつのびた後、口縁付近で内彎する。口縁端部は丸くおさめる。脚部は外反して下方に広がり、底端部より2.6 cm上で、段をなして垂下する。端部は外方につまみ出され、底端面が広くつくられる。脚部中位には2本の凹線が巡らされ、その上下に幅0.7~1.0 cmの長方形透孔が3方向にあけられる。透孔穿孔は、凹線施文、体部と脚部の接合の後になされている。調整は、口頸部および脚部は、内外面とも回転ナデによる。体部は、外面下半が回転ヘラケズリで、外面上半と内面は回転ナデで仕上げられている。なお、外面の肩部直下には1.5 cmほどの幅でカキメが施されている。

30は体部最大径18.4 cm、脚部径15.5 cmを測る。体部は肩の張りが弱く、ほぼ球形をなす。口頸部は若干外反しつつのびた後、内彎して端部に至る。口縁端部は肥厚し、丸くおさめる。脚部は外反して下方に広がり、明瞭な段をなした後、ハの字状に垂下する。端部は面をなすように厚く仕上げられている。脚部上段には幅0.7~1.0 cmの長方形透孔が3方向にあく。透孔穿孔は体部と脚部の接合後になされている。調整は、口頸部・体部・脚部全体が内外面とも回転ナデによ



第19図 3号墳出土須恵器 4

る。ただし、体部下半から底面にかけての外面にはナデに先行してヘラケズリが施されていたことが、器表面の観察から推測できる。

26は、円錐状のつまみを付す蓋で、天井部に1cmあたり10~11本ほどのカキメ調整をおこなっている。内面調整は回転ナデで、内面中央には一方向のナデが施されている。なお、外面全体には自然釉が付着しており、一部は裏面にも回りこんでいる。この蓋と組み合う台付長頸蓋は確定できていない。28は、扁平で中央に凹面をもつつまみを付ける蓋である。外面は、天井部より全体の1/2ほどにヘラケズリが施され、内面は回転ナデで仕上げられる。内面中央には一方向のナデが認められる。外面のほぼ全体に濃青灰色の自然釉がかかっており、一部は裏面にまで回りこむ。なお、この蓋と組み合う台付長頸蓋も確定はできていない。

#### 土師器（第19図31・32、図版15）

小型丸底蓋（31）は復元口径10.8cmで、器高11.5cmを測る。外面では底部から体部下半にナメハケ・ヨコハケを施し、体部上半にはタテハケがみられる。口縁部はヨコナデで仕上げる。内面調整は、底部から体部下半にはハケを施し、体部上半はユビナデである。口縁部はヨコハケの後、ヨコナデで仕上げている。外面の底部から体部下半には赤色顔料が残る。焼成は良好で、褐色へ暗赤褐色を呈し、肩部には小黒斑を有する。胎土には砂粒をほとんど含まない精製品である。

短頸蓋（32）は復元口径9.8cm、器高は12.5cmを測る。外面調整は、底部から体部下半にかけてヘラケズリを施し、体部上半は板ナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面は、底部から体部はナデで、口縁部は板ナデの後、端部のみをさらにヨコナデする。頸部内面には口縁成形時の絞り痕が残る。焼成は良好で褐色を呈し、外面体部中央から底部にかけて黒斑を有する。

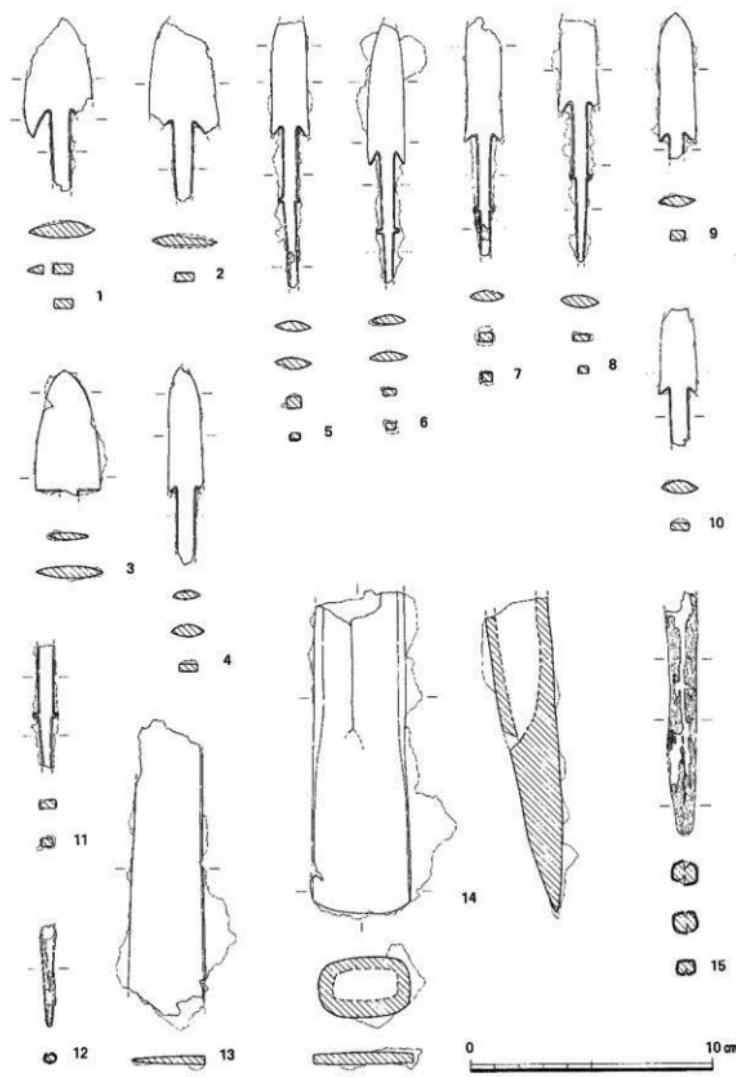
#### b 鉄製品

##### 鉄鎌（第20図1~12、図版16）

3号墳の鉄鎌は総破片数17点であり、そのうち図化できたものは12点である。鎌身形態の判明するものは10点で、平根系有頸腸抉柳葉式2点、平根系有頸柳葉式1点、細根系有頸腸抉柳葉式7点である。平根系有頸腸抉柳葉式（1・2）は残存長7.0~7.3cmで、鎌身残存幅2.4~2.9cmを測る。平造で、刃部の断面形は扁平なレンズ状をなす。1・2とも鎌身上部を欠損する。腸抉の平面形は1では端部に向かい内彎している。2では欠損のため形状は不明である。平根系有頸柳葉式（3）は鎌身長4.9cm、鎌身幅2.7cmを測る。平造で、刃部の断面形は扁平なレンズ状をなす。頸部以下は欠損する。細根系有頸腸抉柳葉式（4~10）は鎌身が完存する9で鎌身長5.2cm、鎌身幅1.5cmを測る。刃部は片丸造で、関は確認できるものはすべて棘状闊を呈する。頸部の長さは2.9~3.1cmを測る。腸抉の平面形は、直線的におさめるもの（6・9）や、端部が外反するもの（7・10）がみられる。

##### 刀（第20図13、図版17）

環状鏡板付櫛（17）に銹着した状態で刀が出土している。刀身の一部で、残存長12.1cm、刃部最大幅3.2cmを測る。刃部最大厚は0.4cmである。平造で断面形は扁平な二等辺三角形状を呈す。



第20図 3号墳出土武器・工具・不明鉄製品

### 斧（第20図14、図版17）

1点が出土している。刃部と袋部が分離しており、さらに袋部が環状鏡板付轡（17）に鈎着しているため、刃部と袋部の接合が困難であった。そのため、この資料については図上で復元をおこなっている。残存長13.1cm、刃部幅4.0cm、復元基部幅3.6cm、復元基部厚2.7cmを測り、袋部の横断面は隅丸方形である。袋部の折り返しはほとんど密着しているが、刃先側の端部で若干開いていることが確認できる。

### 不明鉄製品（第20図15、図版17）

15は断面隅丸方形の棒状鉄製品である。残存長は9.9cmを測る。表面には一面に木質が付着している。鉄製T工具の基部、あるいは鉄釘である可能性も考えられる。

### 轡（第21図16・17、図版17・18）

環状鏡板付轡が2点出土している。16は鏡板・衡・引手からなるが、鏡板は左右とも一部を欠損する。衡と引手を別々に鏡板に絡ませている。

鏡板は梢円形を呈し、横長方形の立闇をつくりつける。鏡板の法量は右側で長径10.0cm、短径7.4cmで、断面は約0.7cm四方の隅丸方形をなす。立闇は、右側の鏡板のほうが残りが良く、基部幅4.2cm、高さ1.6cmの長方形の立闇であることがわかる。立闇孔は、幅1.2cm以上、高さ0.3cmの長方形を呈し、環体から0.6cmほど離れて立闇のほぼ中央にあけられている。

衡は二連式で、長さは左側で7.3cmを測る。断面が径0.9cmの円形の棒材を用いており、右側の金具で端環の向きが90度ねじれている。端環の大きさは外径で、衡先環が2.2cm、卿金が2.1cmを測る。

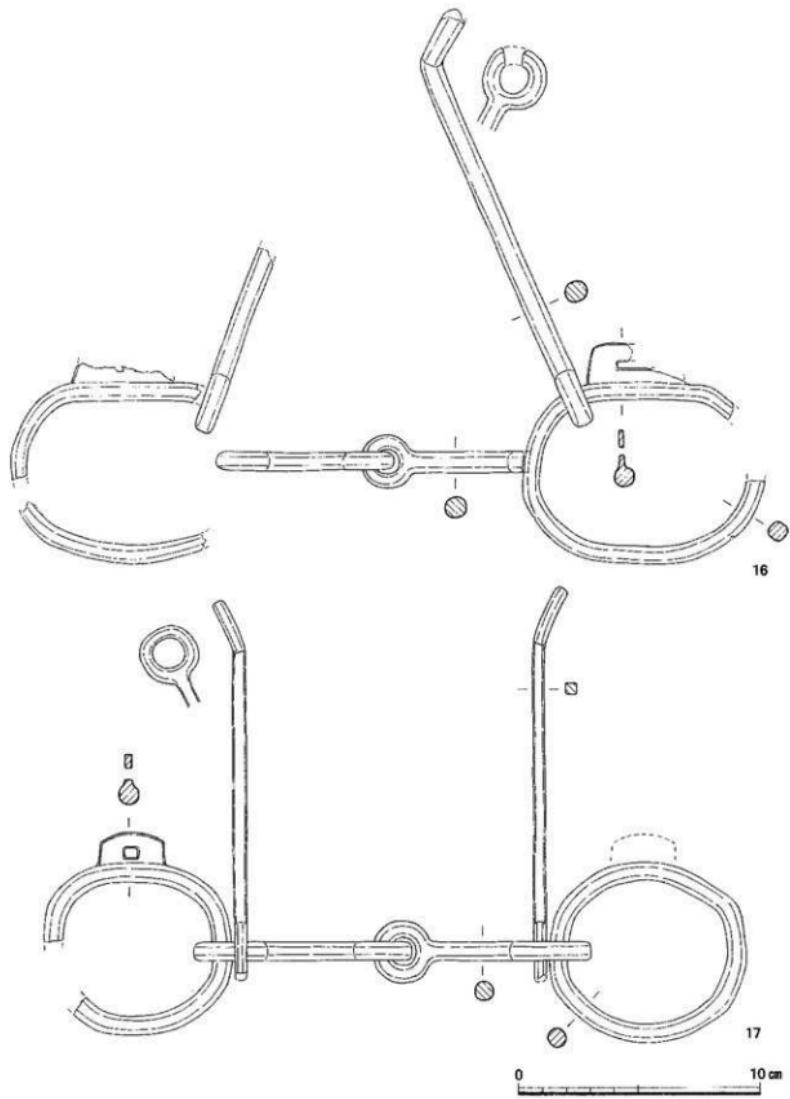
引手は、左側は途中で欠損しているが、右側は引手壺の一部を欠くのみで、ほぼ完存する。長さは、右側の引手で17.7cmを測り、断面は約0.8cm四方の隅丸方形を呈す。引手壺の大きさは、外径で2.6cmを測り、54度の角度で「く」の字に折れ曲がる。鏡板側の端環は外径で2.3cmを測る。

17は鏡板・衡・引手からなるが、左側の鏡板の一部を欠損する。鏡板と引手を衡先環に直接絡ませているが、衡先環内における鏡板と引手の位置関係は左右対称になっていない。

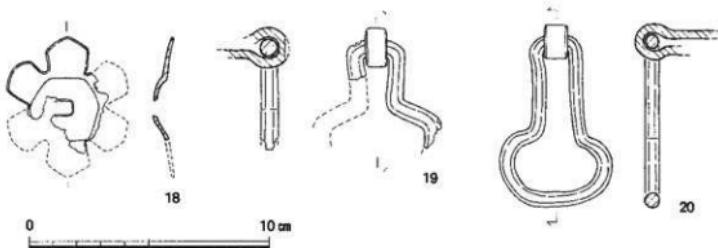
鏡板は、左右とも梢円形を呈し、右側が長径8.1cm、短径7.3cm、左側が長径7.7cm、短径7.0cmである。環体は、径0.7cmの断面円形の棒材を曲げてつくられている。左側の鏡板には、基部幅2.3cm、高さ1.2cmの長方形の立闇がつくりつけられており、その中央には幅0.5cm、高さ0.4cmの長方形の立闇孔が、環体から0.2cmほど離れてあけられている。右側の鏡板には現状では立闇の残存は認められないが、本来は左側と同様の立闇がついていたと考えられる。

衡は二連式で、長さは左右両側とも9.0cmを測り、衡の全長は約16.4cmとなる。径0.8cmの断面円形の棒材を用いており、右側の金具で端環の向きが90度ねじれている。端環の大きさは外径で、衡先環が左は3.1cm、右は3.4cm、卿金が左は2.4cm、右は2.5cmであり、衡先環のほうが人気くつくられている。

引手は、右側が残存長16.0cm、左側が15.5cmを測り、断面は1辺0.5cmのほぼ正方形を呈する。引手壺の大きさは外径で、右側が2.5cm、左側が2.3cmであり、両側とも25度の角度で「く」



第21図 3号墳出土馬具 1



第22図 3号墳出土馬具 2

の字に折れ曲がる。鏡板側の端環は、左右とも一部を欠損するが、大きさは外径で左右両側とも2.4 cmである。

#### 鞍金具（第22図18～20、図版18）

座金具が1点（18）と鞍が2点（19・20）出土している。いずれも鉄製である。18は花弁形座金具で、残存幅4.2 cm、残存高4.8 cmを測る。破損により脚は2脚しか残存していないが、復元すると本来は6脚であったと考えられる。鉢の中央には高さ0.6 cm、幅0.7 cm以上の長方形の孔がある。裏側に木質などの残存はみられない。

19は、凸字形の輪金に別造りの脚がつく鞍であるが、輪金・脚の多くを欠損する。輪金は基部と一体造りであり、輪金の残存長は4.5 cmで、基部幅は2.4 cmを測る。20は凸字形の輪金と別造りの脚からなるが、脚の多くを欠損する。輪金は基部が長く、19とはやや異なった形態を呈している。輪金の長さ7.1 cm、基部幅2.1 cm、環部最大幅4.6 cmを測る。

#### （5）小結

3号墳は径25 mの円墳であり、3～7号墳の後期古墳のうちで唯一墳形および墳丘規模が知られる古墳である。埋葬施設は左片袖式の横穴式石室で、玄室は長さ3.52 m、幅1.43～1.58 mとなる。開口方向は南西方向で、5号墳の横穴式石室の開口方向とほぼ一致する。一方、使用石材についてみると、5号墳では基底石に幅30～45 cmほどの中型の石を用いるのに対し、3号墳では奥壁および基底石に幅60～85 cmほどの大型の石を用いており、5号墳の石室との間に明確な差異が認められる。

横穴式石室は上半が破壊されており、盜掘など後世の攪乱の影響が考えられるものの、床面には比較的多くの副葬品が残存していたことが、実測図や写真からうかがえる。検出された遺物には須恵器、土師器、鐵鏃、鐵斧、馬具、鐵刀、金環などがある。ただし、そのうち、鐵刀、金環など一部の遺物は現存せず、その詳細を知ることはできない。

須恵器には蓋杯、高杯、堤瓶、台付壺、甌がある。蓋杯は、法量の違いから2群に分けること

ができる。1～11は口径の大きい一群（I群）で、杯蓋の径は15.0～16.0 cm、杯身の径は13.8～14.4 cmを測る。12～20は口径の小さい一群（II群）で、杯蓋の径は14.1～14.8 cm、杯身の径は12.4～12.7 cmを測る。口縁端部については、II群に1本の沈線を巡らせるものがみられるものの、強い段を有するということではなく、両群とも概ね丸くおさめることで一致している。また、杯蓋の天井部や杯身の底部のヘラケズリは、前者のほうが後者に比べ広い範囲に施されている。これらの特徴から、I群をII群より古く位置づけることができ、その時期は、I群がTK10型式期新相、II群がTK43型式期に比定できる。また、龜には、口頭部が無文のもの（23）、2段構成の文様をもつもの（24）、3段構成の文様をもつもの（25）が存在する。これらには時期差を読み取ることができ、口頭部や体部の形態、文様構成から23を最も古く、25を最も新しく位置づけることができる。その時間幅はTK10型式期新相～TK43型式期にあてられ〔吉田2007〕、蓋杯の示す時間幅とも整合的である。

馬具には轡、座金具、軸がある。轡は2点が出土しており、いずれも環状鏡板付轡である。これらの轡には連結方法に差異が認められ、轡16が引手と銜を別々に鏡板に絡ませるのに対し、轡17は引手と鏡板を銜先環に直接絡ませており、連結方法の点からみると、前者を後者より古く位置づけることができる。これらの轡の年代は、6世紀中葉～後葉に比定でき〔花谷1986〕、須恵器の示す年代範とも大きく矛盾しない。

以上のように、3号墳の副葬品については、須恵器や轡に年代差を指摘できることから、石室での埋葬行為は少なくとも2度はおこなわれたものと想定できる。その年代はTK10型式期新相からTK43型式期と考えられ、初葬から追葬までの間にそれほど長い時間的間隔は空いていないようである。

また、3号墳からは横穴式石室の他に、周辺埋葬として箱式石棺が一基みつかっている。墳丘の北東部、高さ約53.5 mの位置から検出されたもので、副葬品は検出されなかったようである。石棺石材には結晶片岩が用いられていたようで、2号墳後円部の竪穴式石槨石材と共通している。3号墳の造られた古墳時代後期にも、当地域と吉野川あるいは紀ノ川流域といった結晶片岩産地を結ぶ交流関係があったことを示唆している。

（若杉）

### 3 4号墳

#### (1) 位置と遺構

##### a 墳丘と石室（第23図）

4号墳は、3号墳の南方、丘陵の南端で検出された石室である。2号墳の墳丘調査に先立ち緊急調査がなされたが、検出された遺構は、石列の一部および礫敷きの床面のみであったようで、墳丘の形状や規模、構造については、実測図などの記録がなく不明である。床面礫上から副葬品が検出されている。

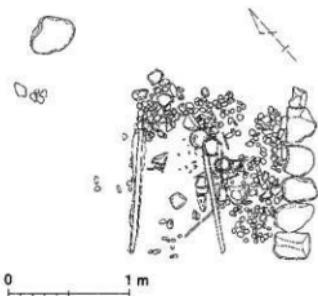
遺構の具体的な状況については、現在残る石室平面図（原図1:10）から知ることができるが、それによると、玄室側壁の1段目と考えられる石材が東側に6つ、西側に1つ残存するのみであり、石室の形態や規模、構築方法などを復元する手がかりはほとんどない。西側に残る石材は一石のみであり、側壁の石材かどうか確定はできないが、仮に玄室側壁のものだとすると、玄室幅は1.74mとなる。床面には大きさ3~7cm程度の敷石が敷かれており、1.25m×1.20mの範囲にL字状に残存していたことが、図から読み取れる。

##### b 遺物出土状況（第24図、図版19）

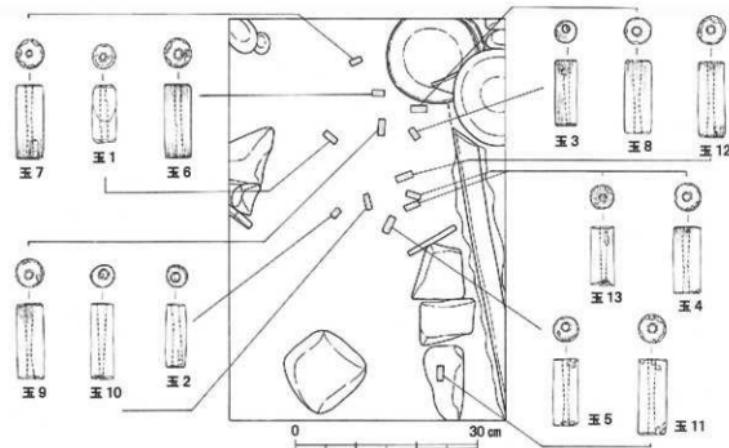
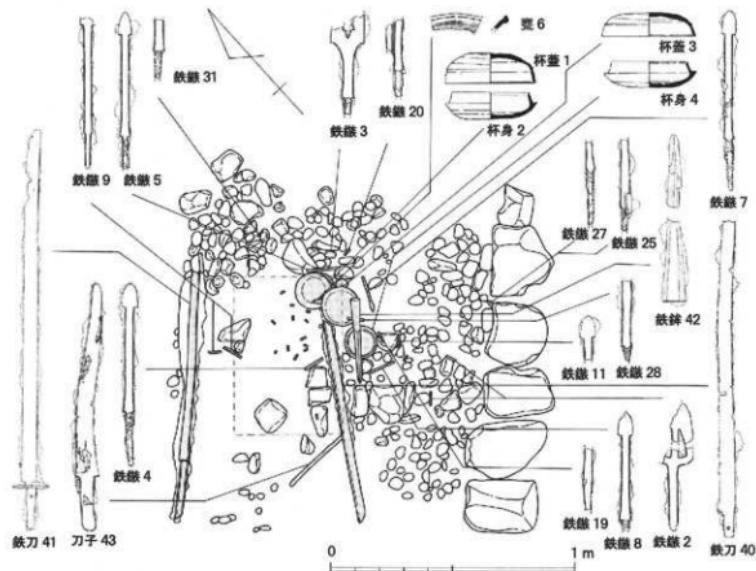
石室平面図には、出土遺物の検出状況が表されているが、4号墳の石室はほぼ完全に破壊を受けていたため、礫床上から検出された遺物が本来の副葬位置を保っているとは考え難い。遺物は東側壁と考えられる石列から約70cm離れた箇所に集中して認められる。刀40を中心として分布しており、北側ではほぼ完形の須恵器蓋杯が2組出土している。そのうち1組（須恵器1・2）は組み合った状態で出土しており、副葬時の組み合わせを反映している可能性がある。それらの須恵器の周りには鉄鏃片が散らばっており、さらに須恵器3・4にのる形で鉄42が検出され

ている。刀40の西60cmでは刀41が出土している。この2刀は向きはほぼ平行であるが、切先の方向は逆向きとなっている。

須恵器蓋杯のすぐ西からは管玉が出土している。管玉は13点が出土しているが、それらのほぼ全てが16×28cmの範囲に集中している。これらの玉は、攪乱の結果、偶然集まった可能性も完全には否定しきれないが、狭い範囲に密集して存在しているため、埋葬時の副葬状況を示している可能性も考えられる。仮にその考えが受け入れられるのであれば、被葬者の埋葬位置の復元の手がかりとなろう。



第23図 4号墳石室実測図



第24図 4号填石室内遺物出土状況

以上、石室実測図から読み取れる範囲で、出土状況を記述してきた。4号墳からは須恵器、玉、鉄製品が出土しているが、それらの遺物の中には、刀40や鉢42のように、図面に描かれた状態と現存する遺物の状態が異なるものがいくつか認められる。しかし、図示された遺物そのものが現存しないという事態は生じていないため、本報告での副葬品の組成と、調査時に把握された4号墳の副葬品の組成とに大きなズレはないものと考える。

(若杉)

## (2) 出土遺物

### a 土器 (第25図1~8、図版20)

4号墳から出土した土器はすべて須恵器で、杯蓋2点(1・3)、杯身2点(2・4)、無蓋高杯1点(5)、壺2点(6・7)、台付壺1点(8)がある。

杯蓋は口径が、1で14.7cm、3で15.3cmを測る。天井部の形状により器高は若干異なるが、両者とも天井部と体部の境にぶい稜をもち、口縁端部は内傾して明瞭な段をもつ。ヘラケズリの範囲は1・3とも天井部外面の4/5程度である。内面調整は、両個体とも回転ナデであり、1では内面中央に一方向のナデが施されている。

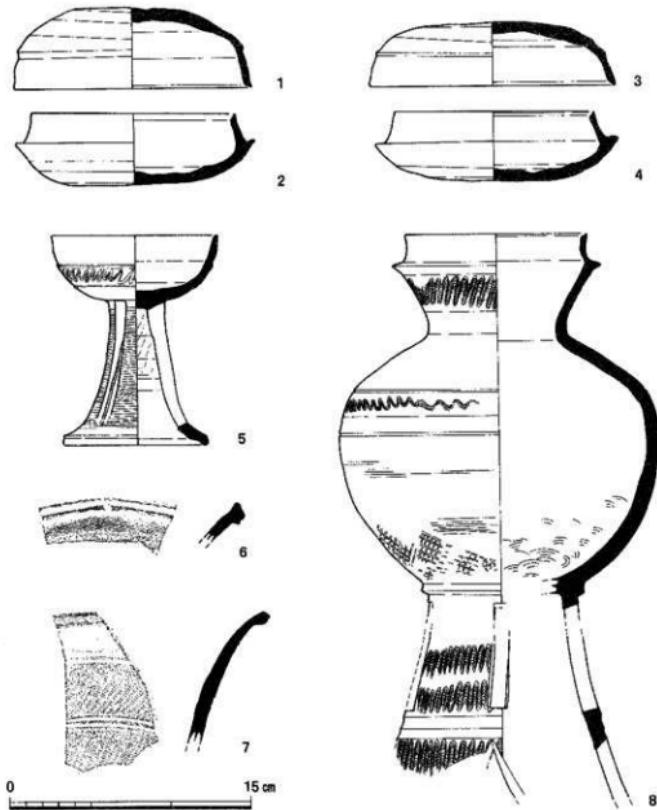
杯身は口径が、2で12.7cm、4で12.4cmを測る。立ち上がりはやや内傾するが、1.8~2.0cmと高く、端部は内傾し明瞭な段をなす。回転ヘラケズリは、2で底部外面の3/4程度、4で底部外面の4/5程度の範囲に施される。内面調整は回転ナデにより、2・4とも内面中央には一方向のナデが認められる。

無蓋高杯(5)は長脚で、1段の透孔を3方に穿つ。透孔の形状は長方形で、幅は0.7~1.5cmである。3方とも長方形の長辺外面の角を薄く削っており、面取りがなされている。杯部は深く、口縁端部は丸くおさめる。体部中位に稜をもち、下位には1本の凹線が巡り、その間に櫛描波状文を施す。調整は内外面とも回転ナデによる。底部外面にはナデに先行するカキメが確認できる。脚部はやや直線的に下方へ広がり、脚部下位で大きく外反する。端部は段をつくり、下方へ突出させ、丸くおさめる。脚部外面のほぼ全域にカキメを施しており、大きく3つの施文単位が視認できる。内面調整は回転ナデで、また、接合時の絞り痕も確認できる。

壺はいずれも口縁部の破片である。6は肥厚させた端部の周辺にまで波状文を施している。7は上下を2条の沈線で区画し、その間に波状文を施している。口縁端部は外方に強く屈曲させる。

8は、外反する頸部に垂直に立ち上がる口縁部を付した有蓋壺で、緩やかに外反する脚部をもつ。口縁端部は丁寧にナデられ、凹面をなし、体部はあまり肩が張らず、ほぼ球形をなす。頸部には精緻な波状文を施しており、体部上位にも上下を沈線で区画した中に波状文を施文する。体部下位には、外面に格子状タタキの痕跡が、内面には同心円状の当て具痕が残っている。脚部は中ほどに2本の凹線を引き、その上下に波状文を施す。波状文施文後、上段に長方形、下段に三角形の透孔を、それぞれ4方向に穿孔している。脚部内面の調整は回転ナデによる。なお、これに対応すると考えられる蓋は出土していない。

(村田陽・若杉)



第25図 4号墳出土須恵器

b 玉 (第26図1~13、図版20)

横穴式石室の床面より、他の副葬品とともに管玉13点が出土している。

管玉は原則として孔径が大きい方の端面を上部に、小さい方の端面を下部に配置して実測図を提示した。また、石材名の判断は肉眼観察によるものである。

13点のうち、1の1点のみが薄青色の軟質緑色凝灰岩製である。非常に脆く、表面や角は著しく摩滅しているが、全体的には完形で遺存している。また、それ以外の2~13の12点が濃緑色の碧玉製であり、そのうち11点は端面から側面にかけて剥離痕のみられるものもあるが、いずれもほぼ完形で、13の1点のみ下部を欠損している。しかし、その破面にも細かく摩滅がおよぶため、製作時あるいは使用時における欠損を示唆させる。管玉の側面形態は、2のみや中腹が凸

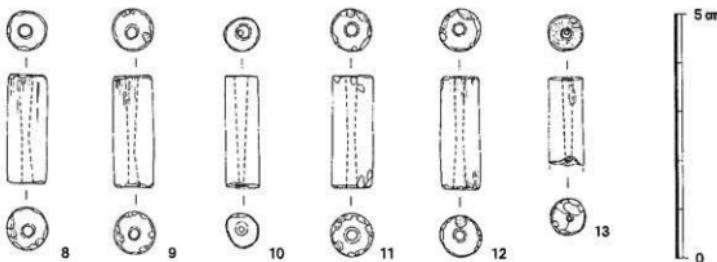
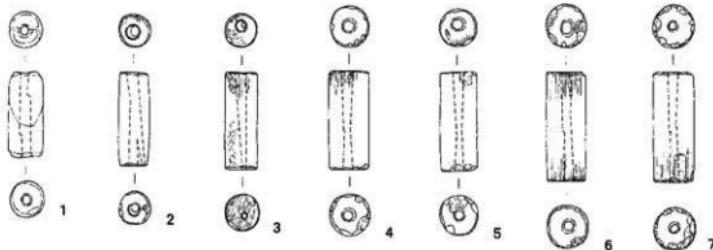
状に膨らむが、そのほかはいずれも端面を含めて直線的である。

穿孔方法は、3と10が片面穿孔であり、13は完存しないために断定はできないが、片面穿孔の可能性が高い。そのほかはすべて両面穿孔である。また、2は上方端面からの穿孔が中心を大きく越えて下方端面の隅に貫通しており、中央位置から穿孔し直した孔を含めて下方端面には2つの穿孔が確認できる。

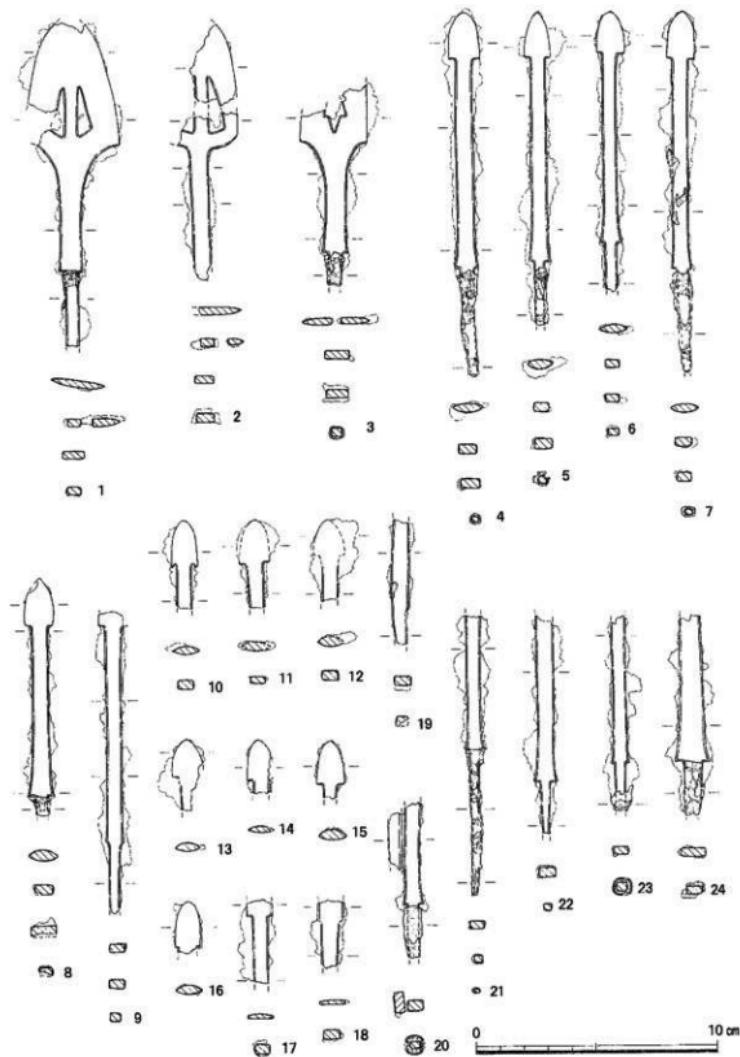
最終的な研磨加工は、摩滅により確認できない1を除いて、側面・端面ともに丁寧に仕上げており、明瞭な研磨痕が観察できないものが多いため、3・4・6～10・12では角部付近のみやや研磨が荒く、縦方向の研磨痕が確認できる。また、3・5・13の端面にも研磨痕が明瞭に残る。

法量は、長さ17.5 mmから23.0 mm、直径6.4 mmから8.7 mmと幅があり、重量も材質の異なる1を除く個体で1.41gから3.19gと大きく差が生じている。しかし、片面穿孔の3・10・13と片面穿孔に失敗している2は、いずれも他と比較して細い傾向が認められ、また穿孔位置のずれや正円とはいいがたい断面形から比較的稚拙なつくりの印象を受ける。これらの個体と、長さが短く材質の異なる1を除くと、その法量は長さが20.1 mmから23.0 mm、直径が8.0 mmから8.7 mmとなり、重量も2.14gから3.19gとその幅は比較的狭くなり、一定の規格性をうかがうことができる。つまり、碧玉製の個体のうち、4～9・11・12といった精巧な両面穿孔を施す一群がこれら管玉の基本規格であったものと考えられる。

(所粹)



第26図 4号墳出土管玉



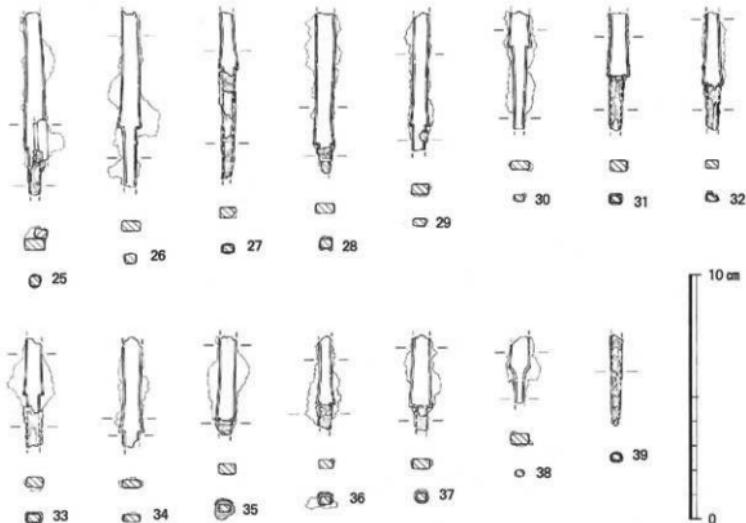
第27図 4号墳出土鐵器 1

c 鉄製品

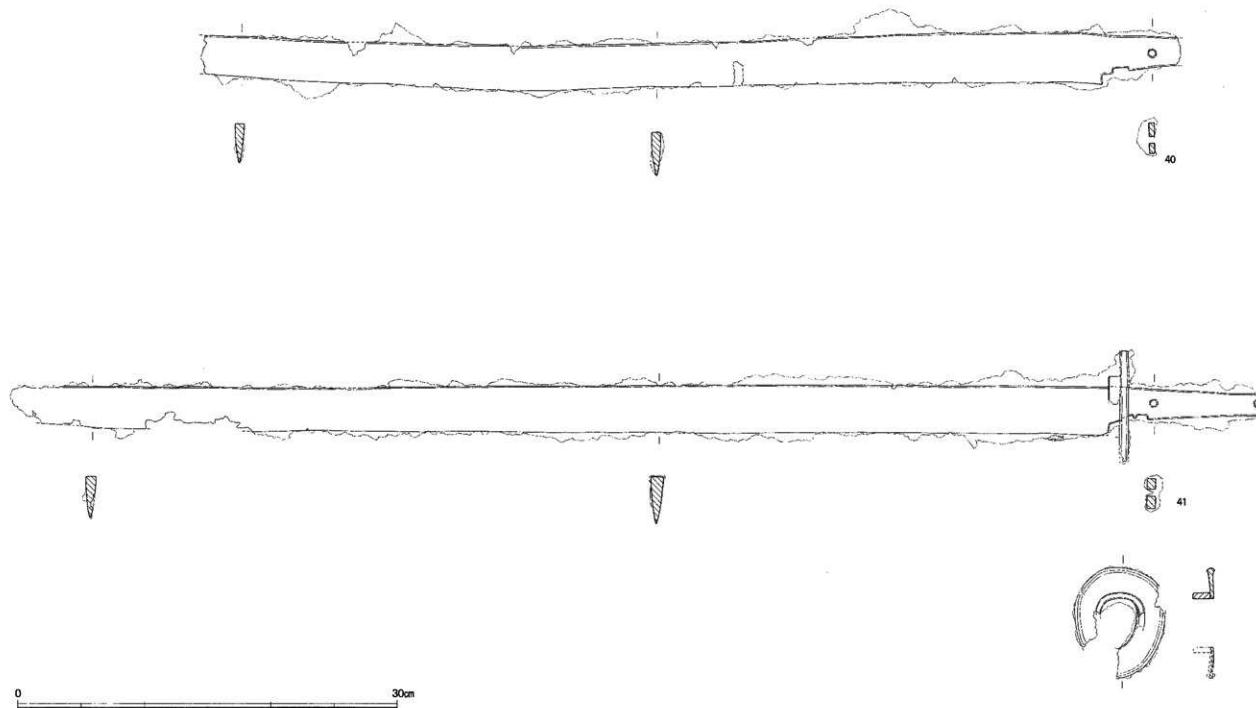
鉄鎌 (第 27・28 図 1 ~ 39、図版 21・22)

4 号墳の鉄鎌は小破片も含め総数 100 点を数え、そのうち図化したものは 39 点である。鎌身形態の確認できるものは 15 点で、有透ナデ関三角式 3 点、長頸三角式 12 点である。

有透ナデ関三角式は、双孔のものが 2 点 (1・2)、単孔のものが 1 点 (3) ある。1 は残存長 13.2 cm、最大幅 3.8 cm を測る。平造で鎌身の断面形は扁平なレンズ状を呈す。鎌身の中央やや下に長三角形の透孔が 2 孔開いており、中軸線に対し対称に配置されている。ナデ関で、刃部下端から強く内彎しながら頸部に至る。頸部関は角関で、頸部の断面形はやや扁平な方形をなす。茎部には部分的に矢柄が遺存しており、頸部関付近には樹皮巻きの痕跡も認められる。2 は 2 つの破片に分かれているが、形態や保管状況から、同一個体と判断した。最大幅 2.5 cm を測る。1 と同じく鎌身の中央やや下に長三角形の透孔を 2 孔開ける。透孔の形状については、1 とは若干異なり、三角形の下辺の角度が 2 では比較的緩やかとなる。これは鎌身の平面形に合わせ透孔を穿ったためと考えられ、透孔下辺が鎌身下辺に沿うような形状を呈している。鎌身関はナデ関で、刃部下端からゆるやかに外彎しながら、頸部に至る。頸部の断面形はやや扁平な方形をなす。3 は鎌身上半が欠損するが、残存長 8.2 cm、鎌身幅 2.7 cm を測る。鎌身中央付近に透孔を 1 孔配す。透孔は上部が欠損しているが、長三角形の下辺に逆三角形状の突起を設けたような形状をなすと考えられる。ナデ関で刃部下端から強く内彎して頸部に至る。頸部関は角関で、頸部の断面形はやや扁平な方形を呈す。茎部には矢柄が遺存しており、一部に矢柄の下の樹皮巻きも確認できる。



第 28 図 4 号墳出土鐵鎌 2



第29圖 4号墳出土鉄刀

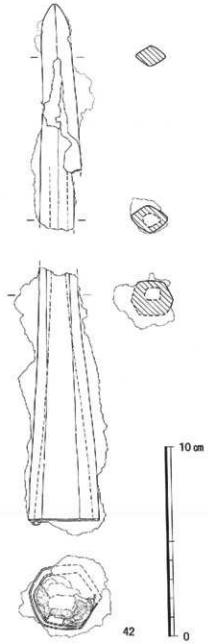
長頸三角式（4～8、10～16）は全長が4で14.9cmを測る。両丸造または片丸造で、鎌身の断面形はレンズ状をなす。4～8は切先から茎部までが残る。鎌身長は1.7～1.9cm、鎌身幅は1.1～1.3cmを測り、頸部長は8が7.0cmで最も短く、4・7が8.6cmで最も長い。茎部長は4で4.4cmを測る。いずれも鎌身闊は角闊で、頸部闊は台形闊である。4・5・7・8では茎部に矢柄が遺存しており、頸部闊付近には矢柄の上に施された樹皮巻きも確認できる。9は頸部長8.8cmを測り、頸部闊はナデ闊となる。10～16は鎌身部の資料である。鎌身長は1.6～1.9cmで、鎌身幅は1.1～1.3cmを測る。鎌身闊は10が浅い扇闊で、他は角闊である。19～39は頸部から茎部にかけての資料である。茎部長は21で6.0cmを測る。頸部闊は38がナデ闊である他は、台形闊をなす。多くの個体に矢柄の遺存が確認でき、20、21、23、25、28、31、35、36では一部に矢柄の上に施された樹皮巻きの遺存も認められる。また、27では矢柄を差し込む前に茎に巻かれたと考えられる樹皮の痕跡がみられる。なお、24は頸部が他の資料に比べ若干大きく、刀子である可能性も考えられる。

#### 刀（第29図40・41、図版23）

2点が出土している。40は残存長77.0cm、刃部最大幅4.0cm、刃部厚0.7cm、茎部幅2.2～3.1cm、茎部厚0.45cmを測る。刃部は平造である。切先の形態は、欠損のため不明である。闊は直角闊で、茎部は茎尻に向かい、やや幅を狭める。茎部は5.9cmから先が欠損しているため、茎尻の形状は不明である。闊から3.7cmのところに目釘孔をもち、径は0.6cmを測る。また、闊から0.9～2.1cmの部分には茎元抉が入る。

41は残存長98.1cm、刃部最大幅3.8cm、刃部厚1.0cm、茎部幅1.8～2.9cm、茎部厚0.7cmを測る。刃部は平造である。切先は欠損しており、形態は不明である。闊は直角闊で、茎部は茎尻に向かい、やや幅を狭める。茎部は11.9cmから先が欠損しているため、茎尻の形状は不明である。闊から3.6cmと11.8cmの2箇所に目釘孔をもち、径は0.55cmを測る。闊から1.0～3.1cmの部分には茎元抉が入り、その中央に台形状を呈する小突起を有することが、X線写真で確認できる（図版23）。

41に伴う刀装具として、鉄製鐔と鉄製鉤がある。鐔は、倒卵形を呈する無襷鐔である。復元総幅8.7cm、横幅7.1cmを測る。端部の形状はT字形をなし、端部の厚さは0.65cmで、中心部に向かい薄くなっている。周縁部側面は丸く仕上げられる。また、側面の一部には布が付着しており、副葬時の状況



第30図 4号墳出土鉄鉢

を示唆している。内孔は縦幅3.9 cm、復元横幅3.1 cmを測り、倒卵形を呈す。

鍔は鉄に銹着して出土している。半周以上を欠損しており、高さ1.4 cm、残存縦幅2.6 cm、残存横幅3.9 cm、厚さ0.45 cmを測る。内面には柄の木質が遺存している。

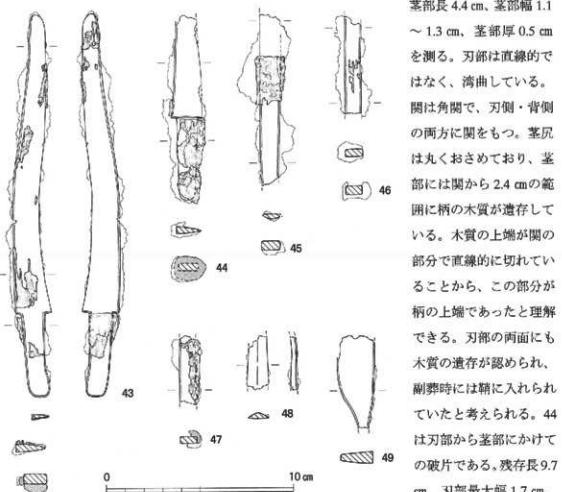
#### 鉢（第30図42、図版22）

鉢身部と鉢袋部が各1点出土している。欠損のため、両者は接合はしないものの、出土状況などから同一個体と考えられる。鉢身部は残存長11.9 cm、残存最大幅1.9 cmを測る。鍛造りで、断面は菱形をなす。下半部を欠損するため、闕の有無は不明である。刃部右辺は鎌彫れにより変形してしまっている。

袋部は残存長13.4 cmで、袋端部幅は3.8 cm、袋端部高は3.3 cmを測る。断面形は六角形を呈し、袋端部の形状は直底である。袋部の繋ぎ目は、肉眼とX線写真の両方で観察したが、はっきりとは確認できなかった。また、目釘の痕跡も確認できない。袋部内面には柄木の木質が若干遺存しているが、柄の長さなどは不明である。

#### 刀子（第31図43・44、図版24）

43は完形の刀子である。全長20.2 cm、刃部長15.7 cm、刃部最大幅1.9 cm、刃部厚0.45 cmで、



茎部長4.4 cm、茎部幅1.1  
～1.3 cm、茎部厚0.5 cm  
を測る。刃部は直線的で  
なく、湾曲している。  
闕は角闕で、刃側・背側  
の両方に闕をもつ。茎尻  
は丸くおさめており、茎  
部には闕から2.4 cmの範  
囲に柄の木質が遺存して  
いる。木質の上端が闕の  
部分で直線的に切れてい  
ることから、この部分が  
柄の上端であったと理解  
できる。刃部の両面にも  
木質の遺存が認められ、  
副葬時には鞘に入れられ  
ていたと考えられる。44  
は刃部から茎部にかけて  
の破片である。残存長9.7  
cm、刃部最大幅1.7 cm、  
刃部厚0.4 cmで、茎部長

第31図 4号墳出土工具・不明鉄製品

4.3 cm、茎部幅 0.8 ~ 1.1 cm、茎部厚 0.4 cm を測る。関は角関で、刃側・背側の両方に関をもつ。茎部には柄の木質が良好に残る。また、刃部にも木質が遺存しており、43 と同様に鞘に入れて副葬されていたと考えられる。

#### 鉈（第 31 図 45 ~ 48、図版 24）

45 は刃部から身部にかけての破片である。残存長 9.0 cm、身部幅 1.1 cm、身部厚 0.25 cm を測る。刃部の幅は、鎌のため明確にはわからない。身部の断面形は長方形を呈し、表面には柄の木質が残る。46・47 は身部の破片である。断面は長方形を呈し、表面には柄の木質が遺存している。48 は刃部の破片である。残存長 2.8 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cm を測る。刃先に向かい、若干反る。裏透きをもたず、断面形は二等辺三角形を呈す。

#### 不明鉄製品（第 31 図 49、図版 24）

残存長 4.9 cm、最大幅 2.0 cm を測り、断面形は台形をなす。刀子の茎部の可能性も考えられる。

### （3）小結

4 号墳は、3 号墳の南に位置しており、石室の一部と考えられる石列および床面の礫敷きが検出されている。実測図によると、検出された石列は、6 石しか残存していないが、その並びは北東 - 南西方向を向いている。これが石室側壁の一部だとすると、南西方向に開口する 3 号墳や 5 号墳の石室と軸を同じくしている可能性が高く、3 古墳の間に石室構築についての親縁性を読み取ることができる。

墳丘に関しては、実測図などの調査時の記録が残っておらず、詳細は不明である。ただし、將軍山古墳群の墳丘調査以前に発行された『茨市の文化財』第 3 号の「將軍山三号墳」の項には、「この古墳（將軍山 3 号墳：筆者註）の南にも、もう一基の径三〇米、高さ四メートルの封土状のものが存する」〔笠川・免山 1964：p.24〕という記述がみられる。3 号墳の南という位置から考えると、4 号墳の墳丘についての言及である可能性が高く、情報の少ない 4 号墳を知る上で貴重なデータである。

床面から出土した遺物には、須恵器、玉、鉄鏃、鉄刀、鉄鉢、刀子などがある。

須恵器の蓋杯は 2 組が出土している。杯蓋は径が約 15 cm で、天井部と体部を分ける稜ははつきりしており、口縁端部も内傾し、段をもつ。ヘラケズリの範囲も広く、天井部外面の 4/5 程度によんてやや直線的に広がっている。杯身では、立ち上がりがやや内傾し、口縁端部には段をもち、底部のヘラケズリは外全体の 3/4 ~ 4/5 程度と広い。また、高杯は、長脚 1 段透孔をもち、脚部は裾部に向かってやや直線的に広がっている。これらの特徴より、4 号墳の須恵器は MT 15 型式期に比定することができる。

以上のような出土遺物の年代観より、4 号墳の築造は MT 15 型式期と考えられ、將軍山古墳群の 4 基の後期古墳のうちでは最も古く位置づけられる。副葬品目としては、刀や鉢など武具が多いことが特徴として挙げられる。

（若杉）

## 4 5号墳

### (1) 位置と遺構

#### a 位置と石室

5号墳は3号墳の南東の丘陵先端に位置する。過去の報告〔大阪市博1965〕によると、調査期間中、土取工事により偶然発見されたもので、墳丘は既に消滅していたようである。石室もブルドーザーにより半壊の状態であったが、幸うじて東側壁と床面の一部が残存しており、その状態で調査・記録化がおこなわれたようである。床面上からは須恵器、鉄製品が出土している。

#### b 石室の構造（第32図、図版25・26）

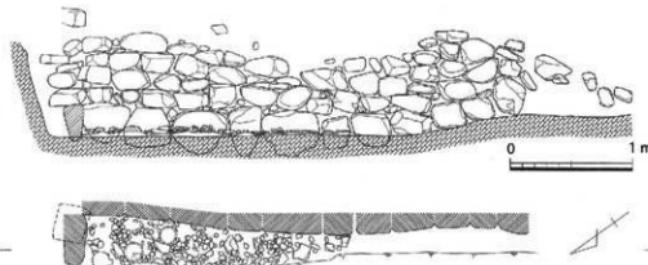
石室実測図（原図1:10）が残るが、石室が半壊した状況で記録化がおこなわれているため、石室の全体像は不明である。以下、図面より読み取れる範囲で記述をおこなう。

南西方向に開口する横穴式石室で、石室形態は右片袖式、あるいは無袖式である。石室の残存長は3.61mで、側壁の最大残存高は0.83mを測る。

側壁は、東側壁のみが最大で5段残る。基礎には幅30～45cmほどの中型の石が据えられ、その上に一回り小さな小型の石が積み上げられている。基底石は奥壁から5石目（奥壁より1.94m）までが他に比べて特に大きく、この辺りに玄門が存在した可能性も考えられる。基底石と2段目では水平方向に目地が通るが、それより上ではラインが描わなくなる。また、垂直方向に目地が通るところは認められない。奥壁は2石のみが残る。基底には幅40cm、高さ30cmの石を用い、その上に幅30cm、高さ15cm、奥行き25cmの石が積まれている。床面には、奥壁から2.1mの範囲に、大きさ3～7cmほどの敷石が確認できる。

#### c 遺物出土状況（第33図）

遺物の検出状況は、石室平面図に記録されているが、5号墳は床面の残存範囲が幅16～45cm



第32図 5号墳横穴式石室実測図

と狭く、検出された遺物は須恵器と鉄鏃のみで、数もそれほど多くはない。第33図によると、奥壁より75cmの範囲から須恵器が4点出土しており、最も奥壁に近い場所で堤瓶が1点、その南側で破損した杯蓋が1点、完形の蓋杯が2点みつかっている。ただし、この完形の蓋杯2点は現存していない。鉄鏃は床面全体に散っており、その範囲は敷石の確認できる範囲とほぼ一致している。

## (2) 出土遺物

### a 土器 (第34図1~4、図版26)

5号墳から出土した須恵器は、杯蓋1点(1)、蓋2点(2・3)、堤瓶1点(4)である。

1は口径14.2cmを測る。やや不整形であるが、天井部と体部を明確に区別せず、口縁部はハの字状に広がる。口縁端部は丸くおさめており、天井部から全体の約1/2に回転ヘラケズリを施す。内面調整は回転ナデで、内面中央には一方向のナデが認められる。2は天井部を欠損しているが、天井部から垂直に下がる口縁部をもつもので、端部に段をもつ。杯蓋の可能性も考えられるが、体部の立ち上がりの角度や口縁端部の特徴が3に近いため、3と似た形状をなす蓋と推定する。3は、扁平で中央に凹面をもつまみを付すもので、有蓋高杯の蓋と考えられる。天井部から垂直に下がる口縁部をもち、端部には段をもつ。天井部外面の3/4程度に回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデで仕上げられ、内面中央には一方向のナデがみられる。

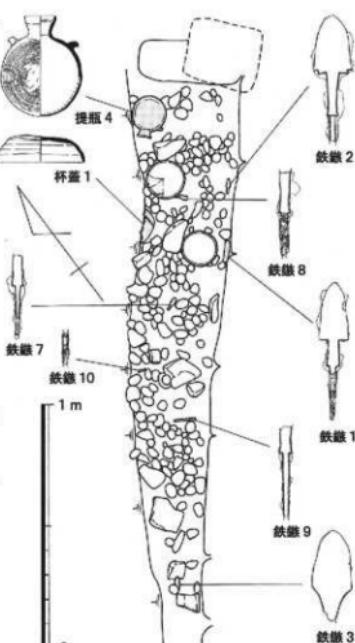
4はほぼ完形で、体部最大径は13.2cmを測る。鉤状の把手をもち、口頭部はやや広がった後、端部付近を内彎させる。口縁端部は薄く仕上げられる。体部の前面・背面ともに1cmあたり約11~12本のカキメを施す。口頭部は内外面とも回転ナデで、体部内面には円盤閉塞時の接合痕が明瞭に残る。また、外面では口頭部接合時の粘土が、体部のカキメの上にかぶっている状況が確認でき、口頭部の接合が体部の調整終了後におこなわれたことがわかる。

(村田・若杉)

### b 鉄製品

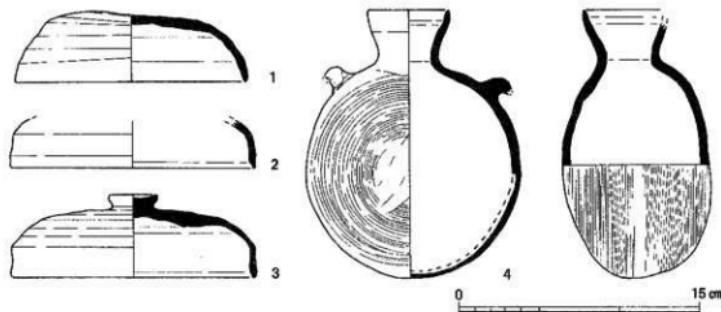
#### 鉄鏃 (第35図1~10、図版27)

5号墳の鉄鏃は全部で10点である。鏃身形態の判明するものは5点で、平根系有頭三角式2点、

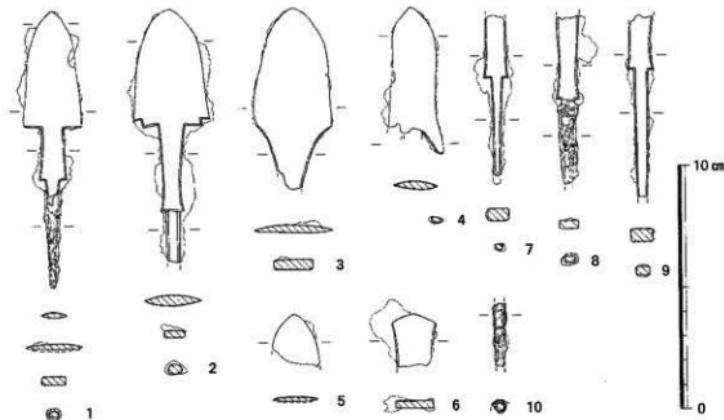


第33図 5号墳石室内遺物出土状況

平根系ナデ閑三角式 1 点、平根系腸抉柳葉式 1 点、主頭式 1 点である。平根系有頭三角式（1）は全長 11.2 cm、鐵身幅 2.4 cm を測る。平造で刃部の断面形は扁平なレンズ状をなす。鐵身閑は角閑である。頭部長は 2.1 cm を測り、茎部に向かい若干開く。頭部閑は角閑をなす。莖部には矢柄が遺存しており、一部では矢柄の下の糸巻きも観察できる。平根系有頭三角式（2）は残存長 10.3 cm、鐵身幅 3.2 cm を測る。平造で刃部の断面形は扁平なレンズ状をなす。鐵身閑は二段閑である。頭部閑は台形閑となり、X線写真によると莖部との間に段差が存在するようである。平根系ナデ閑三角式（3）は残存長 7.4 cm、復元鐵身幅 3.2 cm を測る。平造で刃部断面形は扁平なレンズ状をなす。鐵身閑はナデ閑で、刃部下端より内彎しながら莖部に統いている。平根系腸抉柳葉式（4）は残存長 6.0 cm、残存幅 2.3 cm を測る。平造で、刃部の断面形は扁平なレンズ状をなす。



第 34 図 5 号墳出土須恵器



第 35 図 5 号墳出土鐵器

脇抉は端部が尖らず、短い面をもつ形状をなす。頸部以下は欠損のため形状は不明である。5は平根系三角式の刃部上半部と考えられる。残存長2.1cm、残存幅2.0cmを測る。圭頭式（6）は刃部上半しか残存していない。残存長2.1cm、刃部幅1.8cmを測る。鐵身部の断面形は扁平な長方形をなす。鐵身の平面形は、刃部が低い二等辺三角形状をなし、刃部下端から若干内彎しながら下方に続いている。

7～9は頸部開付近の資料である。残存長は6.6～7.5cmで、茎部長は7で4.0cmを測る。いずれも台形開である。8の基部には矢柄が残り、一部には樹皮巻きも遺存している。

### （3）小結

5号墳は、3号墳の南東の丘陵上で検出された横穴式石室である。工事により偶然発見されたものであるため、残存状態は良好ではない。墳丘は調査時にはすでにかたったようで、その形態や大きさ、構造などは不明である。実測図によると、発見された石室も半壟の状態であり、検出されたのは奥壁と東側壁および床面の一部のみである。石室の平面形態については西側壁が存在しないため不明であるが、開口方向は南西を向いており、3号墳の石室と同じ開口方向を示している。

礎敷きの床面からは須恵器、鐵鐵が出土している。

須恵器には杯蓋、蓋、堤瓶がある。杯蓋は、径約14.5cmを測る。口縁端部は段をもたず丸くおさめており、天井部と体部を分ける稜もみられない。ヘラケズリの範囲は外面全体の1/2程度で、4号墳の杯蓋のヘラケズリより範囲は狭くなっている。ただし、体部は丸みをもちながらも大きく立ち上がっており、3号墳の杯蓋よりは高さをもつ。5号墳の須恵器は数が少なく、これらの資料のみで年代的位置づけを決するのはやや難しいものの、上記の特徴から、TK10型式期の範囲内で捉えることは可能であると考える。さらに絞り込むならば、3号墳の1群の須恵器に若干先行する時期を考えたい。

以上の年代的位置づけから、5号墳はTK10型式期に比定でき、4号墳に統いて築造された古墳であると考えられる。なお、5号墳の石室に使用されている石材は3号墳のものより概して小さく、この点からも、5号墳は3号墳に先行して築造された可能性が高いと言える。（若杉）

## 5 7号墳

### (1) 位置

7号墳は、2号墳後円部の北西にある造出状の張り出し部から検出された石室で、床面の一部が残存していたとされている。しかし、7号墳に関しては、墳丘および石室の実測図等が残されておらず、そのため遺構の残存状況が実際どのようなものだったのかを現状で確認することはできない。

このような状況ではあるが、副葬品については半いにも「7号墳No.□(数字)」という注記をともなった遺物がまとめて保管されていたため、複数古墳の出土遺物が混在するコンテナの中から、7号墳の遺物を選別することが可能となった。それらを整理した結果、7号墳の副葬品としては、須恵器、玉、鉄製品が存在することが明らかとなった。  
(若杉)

### (2) 出土遺物

#### a 土器 (第36・37図1~24、図版28)

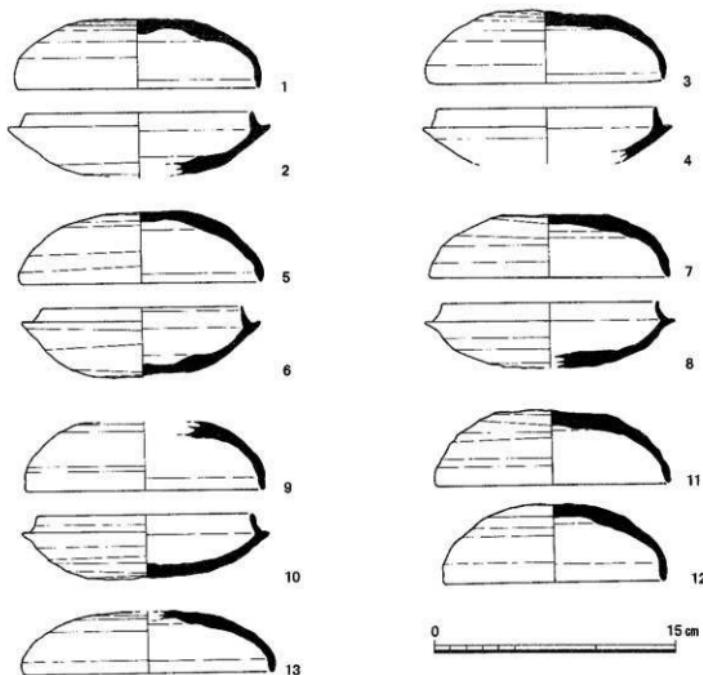
7号墳から出土した土器はすべて須恵器で、蓋杯13点(1~13)のほか、蓋(14)、龜(15・16)、壺(17)、挺瓶(18)、甕(19~24)の破片が出土している。

杯蓋(1・3・5・7・9・11・12・13)は口径14.6~15.3cmを測る。天井部と口縁部の間に明瞭な境界はもたず、口縁端部は丸くおさめる。1・3には口縁端部内面に1本の沈線が走る。また、胎土に黒色粒を含むもの(9・11・12)が一部にみられる。

回転ヘラケズリの範囲は、1・3が天井部から全体の約1/3と最も狭く、7が全体の約2/3で最も広い。内面調整は回転ナデにより、内面中央には一方向のナデが施される。天井部や口縁端部の形態、ヘラケズリの範囲などに若干の個体差が認められるが、それほど大きな差異ではなく、全体としては類似性が強い。

杯身(2・4・6・8・10)は口径12.4~14.0cmを測り、杯蓋と同じく胎土に黒色粒を含むものの(10)がみられる。立ち上がりは内傾し、低く、口縁端部は丸くおさめる。受部は、8が若干薄く、水平に突出するが、他は底部から斜め上方にのびる形状で一致する。回転ヘラケズリの範囲は、欠損により認識できない4・8を除くと、6が底部外側の1/3程度で最も狭く、10が底部外側の2/3程度で最も広くなっている。内面調整は回転ナデで、内面中央には一方向のナデが認められる。

蓋(14)は天井部がヘラ切り不調整であり、上述の蓋杯からは時代が下るもので、古墳築造以後の遺物と思われる。龜は2点とも口縁部の破片で、15は口縁部を肥厚させ断面三角形を呈する。16は頸部に波状文を巡らせ、口縁部には板状工具による連続する刺突文が施される。並(17)はハの字を開く口縁部の破片である。挺瓶(18)は胴部の破片で、外面にはカキメがみられる。



第36図 7号墳出土須恵器 1

壺には口頸部片（19～21）、胴部片（22～24）がある。20は沈線で区画した文様帯の中に波状文を施す。22～24は外面に平行叩きの痕跡が、内面には同心円状の當て具痕が残る。

（村田・若杉）

### b 玉

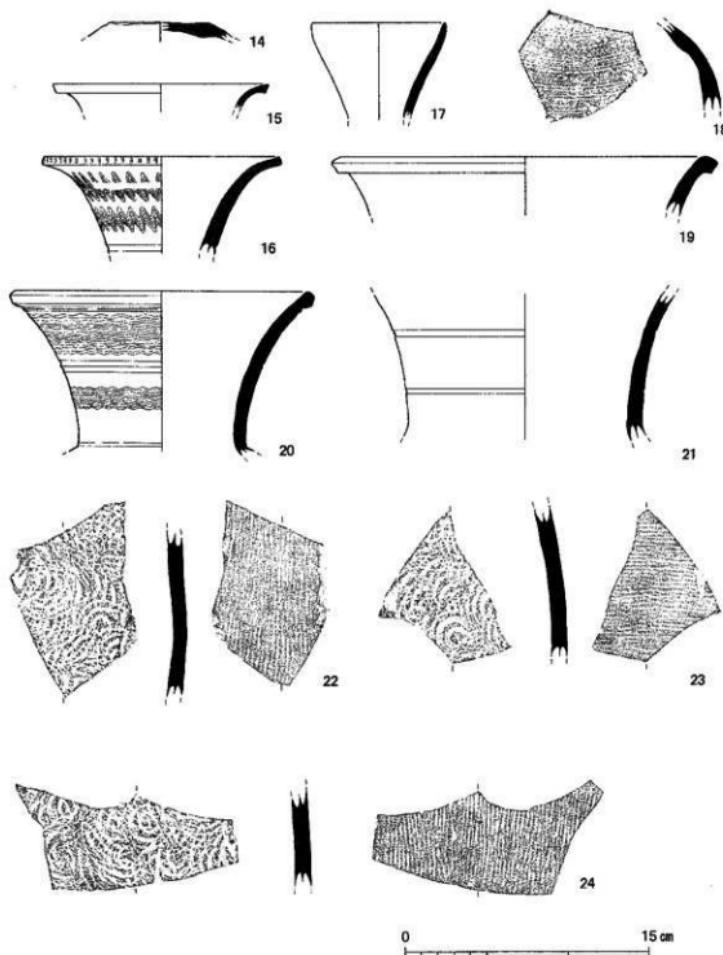
東玉8点、丸玉1点が出土している。玉はいずれも原則として孔径が大きい方の端面を上部に、小さい方の端面を下部に配置して実測図を提示した。

#### 東玉（第38図1～8、図版28）

8点はいずれもガラス製であり、1～5の5点は不透明な緑色、6～8の3点は不透明な黄色を呈す。すべて光形で風化も認められない。側面の中腹に微弱な稜をもち、横断面を六角形ないし多角形に作り出すように、側面縱方向にも微弱な稜が認められる。また、側面から孔の間には明確な稜を形成せず、端面は不明瞭である。厚さと直徑がほぼ等しく、側面中腹に稜をもつために、側面形状は丸みを帯びた六角形を呈している。

法量は、厚さ 8.6 mmから 9.1 mm、直徑 8.2 mmから 9.7 mmであり、重量は 0.76g から 0.99g を量る。2 の直徑がやや大きく重量も重いが、全体的な数値幅は狭く、色調の差異には関係なく法量がかなりそろっていたことを指摘できる。

孔内はやや荒れており、不明瞭だが孔の軸に直交する短い気泡筋や色むらがみられる。

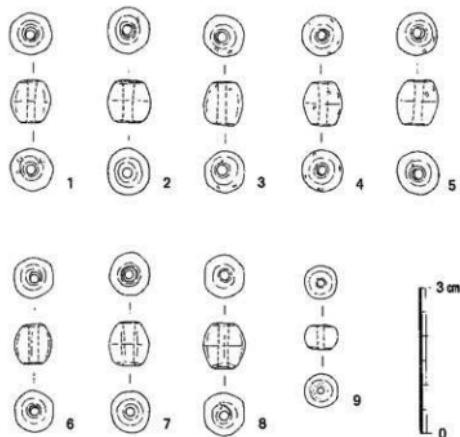


第 37 図 7 号墳出土須恵器 2

成形技法には、芯棒に巻き付けた技法を用いたと考えられ、1・3・5・8の下方端面の孔付近には巻き付け単位の限界と思われる瘤みが遺存しており、研磨による調整は一切確認できない。おそらく、ガラス素材を芯棒に巻き付けた後、硬化前に板あるいは平坦な台に押し当てて側面の棱を形成したものと推測できる。

#### 丸玉（第38図9、図版28）

1点のみで、透明な青色のガラス製である。完形で風化は認められない。ガラス内部には細かな気泡が散在している。法量は、厚さ



第38図 7号墳出土棗玉・丸玉

5.1 mm、直径7.0 mmを測り、重量は0.30 gである。側面は丸みを帯びるが、上下とも端面は明瞭に形成されている。また、孔径は1.3 mmと細く、孔内は荒れている。上方端面は平滑で、やや丸みを帯びており、孔の横には、孔を形成するための軸を抜き取った際にできたとみられる突起が確認できる。対して、下方端面は、平坦ではあるが滑らかではなく、細かい凹凸がみられる。これらの特徴から、この個体は鉢型を用いて製作されたものと推測できる。

(所)

#### c 鉄製品

##### 鉄鎌（第39図1～27、図版29）

7号墳の鉄鎌は小破片を含め29点あり、27点を図化した。鎌身體態の確認できるものは9点で、長頸三角式が8点、段違い逆刺反刃式1点である。長頸三角式（1～8）は鎌身長1.7～2.3 cm、鎌身幅1.0～1.3 cmで、頭部長は1で7.2 cmを測る。刃部は片丸造で、鎌身闊は確認できるものはすべて角闊である。頭部闊には棘状闊のもの（1・21・22）と山形闊のもの（23・24）がみられる。また、茎部に装着された矢柄の痕跡が確認できるものがいくつか存在する。1では茎部に矢柄を差し込む前に施された樹皮巻きの痕跡が認められる。22では矢柄の上に巻かれた樹皮の痕跡が一部に遺存しており、また、矢柄の下にも樹皮巻きの痕跡が確認できる。23では、頭部闊付近に樹皮巻きの痕跡が認められる。茎部の断面形には大きな違いはみられず、いずれも方形をなす。頭部片のうち最長のものは26で、残存長9.9 cmを測る。

段違い逆刺反刃式（25）は残存長9.8 cm、最大幅1.0 cmを測る。片平造で刃部の断面形は扁平な半円状を呈す。先端1.0 cmほどが大きく右側へ反る。逆刺は右側が刃先から6.1 cm、左側が3.5 cmに位置するが、両側とも先端が欠損する。頭部の断面形は方形をなす。

#### 刀子（第40図28～30、図版30）

3点出土している。28は、刃部の一部が欠損しており2片となっているが、保管状況などから、同一個体と考えられる。刃部長14.4cm以上、刃部最大幅2.0cm、刃部厚0.5cmで、茎部の残存長6.3cm、茎部幅0.9～1.3cm、茎部厚0.4cmを測る。関は角関で、刃側・背側の両方に関をもつ。茎部の断面形は長方形を呈す。茎部には柄の木質が遺存しているが、刃部には木質の付着は認められない。29は刃部の破片である。残存長16.5cm、最大幅2.6cm、厚さ0.8cmを測る。表面に木質の遺存する箇所が一部認められる。木目が刀身に対して平行に走っていることから、鞘の木質の可能性がある。30は茎部の破片である。残存長11.0cm、幅0.6～2.1cm、厚さ0.4～0.7cmを測る。茎尻の形状は、一方の隅を斜めにカットしている隅切尻である。茎尻から3.2cmの箇所に目釘孔が1孔開き、孔径は0.4cmである。表面の一部には柄の木質の遺存が認められる。

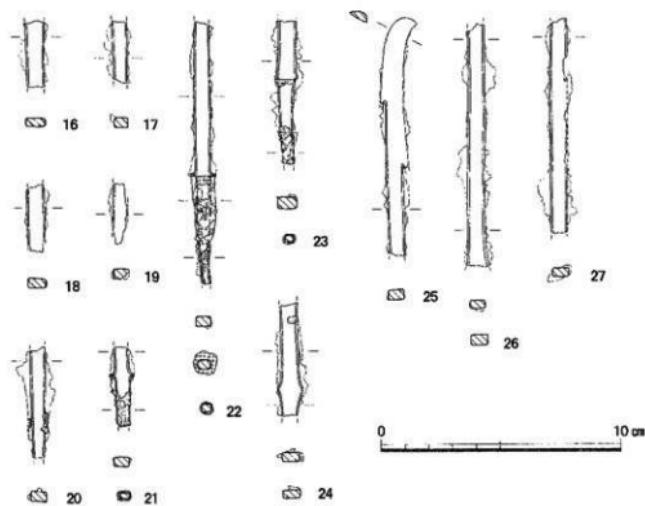
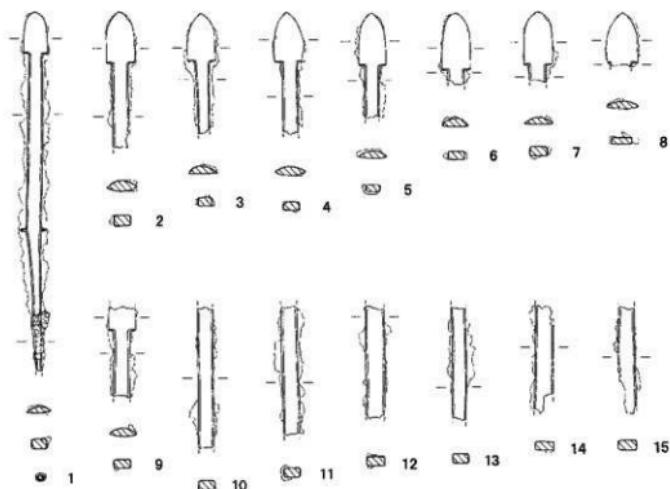
#### 鉢（第40図31～34、図版30）

4点が出土している。31は刃部の破片である。残存長4.4cm、最大幅1.3cm、刃部厚0.5cmを測り、刃先に向かって反る。刃部裏面に裏透きをもたず、断面形状は二等辺三角形を呈す。32は刃部から身部にかけての破片である。残存長8.3cm、刃部最大幅1.6cm、刃部厚0.5cm、身部幅1.3～1.4cm、身部厚0.6cmを測る。刃部裏面には裏透きをもたない。裏面では関より下1.6cmから5.1cmの範囲に柄の木質が確認できる。木質は刃部側の端部が直線的に終わっていることから、この部分が柄の上端であったと考えられる。巻きつけの痕跡は確認できない。33は全長11.6cm、刃部長2.4cm、刃部最大幅1.6cm、刃部厚0.6cmで、身部長9.2cm、身部幅0.8～1.5cm、身部厚0.5cmを測る。刃部表面に鉢は認められず、また、刃部裏面には裏透きをもたない。刃部側面に反りは認められず、直線的である。身部断面形は長方形で、関より下0.8cmからは全体的にではないが、柄の木質が遺存している。34は棒状の鉄製品で、残存長7.4cm、幅0.7～1.0cm、厚さ0.5cmを測る。断面は長方形を呈し、表面には部分的に木質が遺存している。欠損部より下0.4cmほどから、上に向かい若干外に広がっていくような形状をなしている。確定的ではないが、鉢の身部と考えられる。

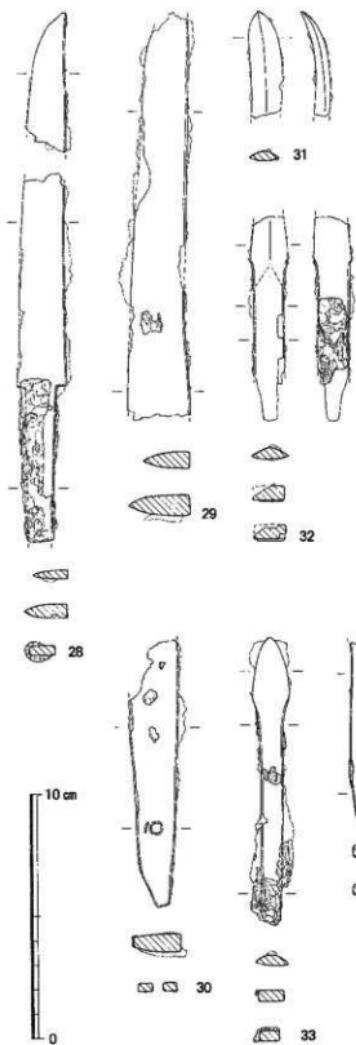
#### 轡（第41図35、図版31）

環状鏡板付轡が1点出土している。鏡板・銜・引手からなるが、それぞれ一部を欠損する。銜と引手はそれぞれ別々に鏡板に絡ませている。

鏡板はいずれも椭円形を呈し、右側が長辺7.5cm、短辺6.7cmで、左側が長辺7.6cm、短辺6.6cmを測る。1.0×0.8cmほどの断面隅丸方形の棒材を用い、環体をつくっている。左右の環体とも鍛接された立闇の痕跡は認められないが、この轡が保管されていた遺物袋の中に兵庫鎖の破片が存在しており、また、右側の環体に兵庫鎖の一部と考えられる破片が銹着していることから、立闇として兵庫鎖が用いられていたと考えられる。兵庫鎖は2破片が残っているが、いずれも環体には接合しない。一方は五連、他方は二連が現状で確認でき、残存長はそれぞれ7.8cm、2.6cmである。一連の長さは2.3～3.4cmを測る。二連が残る破片には、長さ1.9cmほどの鉄棒が銹着しており、兵庫鎖がこの鉄棒に絡まっていく様相を呈していることから、この鉄棒は鏡板の環体の一部



第39図 7号墳出土鐵器



第40図 7号墳出土工具

であると考えられる。左側の鏡板の欠損部にあたる破片である可能性が高い。

衡は二連式である。長さは右側が8.9cmで、左側は半分ほどが欠損しており、残存長4.5cmとなっている。断面方形の棒材を用いており、端環の向きは左側の金具で90度ずれている。衡先環の大きさは外径で、右側が2.5cm、左側が2.1cmで、脚金の大きさは外径で右側が2.4cmを測る。

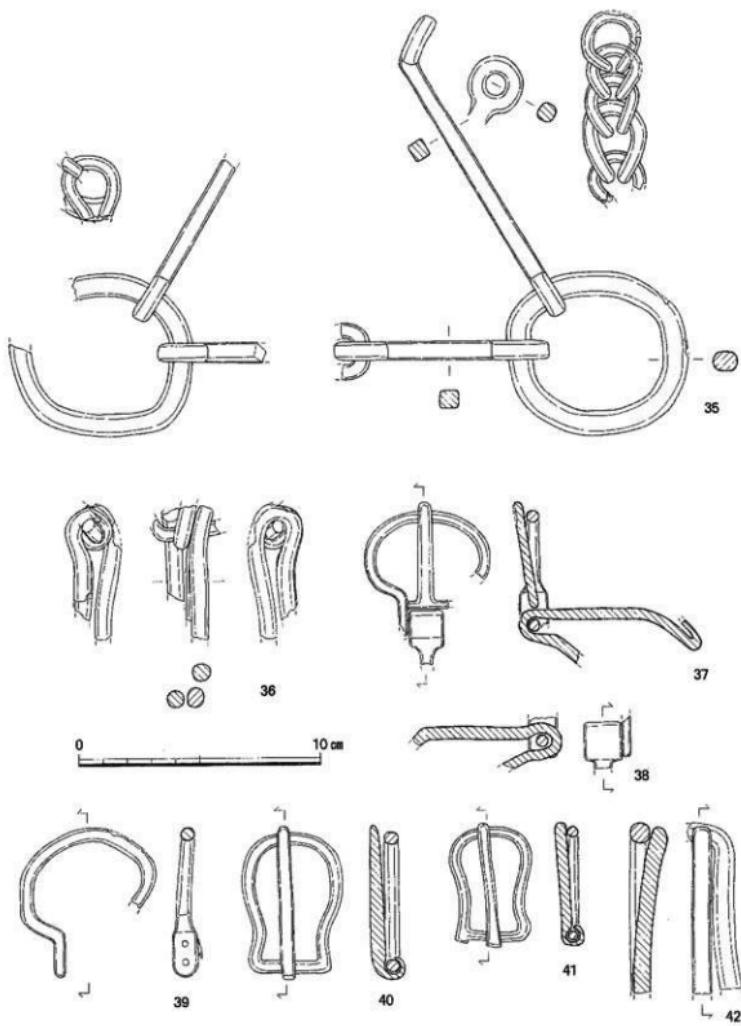
引手は、右側は完存するが、左側は上半を欠損する。長さは右側が13.3cm、左側は残存長で7.5cmを測り、約0.7cm四方の断面方形の棒材でつくられている。引手壺の円環は右側の引手で、外径2.2cmを測り、59度の角度で「く」の字に折れ曲がる。鏡板側の端環は、外径で、左右両側とも2.0cmを測る。

#### 兵庫鎖（第41図36、図版32）

36は兵庫鎖と鉸具である。U字形に曲がった兵庫鎖の2本の鉄棒が、鉸具の基部に絡んでおり、その中央からは刺金が上方にのびている。残存長5.4cmを測る。兵庫鎖・鉸具とともに断面円形の棒材を用いてつくられている。35に伴う兵庫鎖とは明らかに大きさが異なるため、36は躰に伴う兵庫鎖である可能性が考えられる。

#### 鉸金（第41図37～39、図版32）

鉸が3点出土している。37は鉸具と別造りの脚からなる。鉸具の輪金は、環部が「C」字形を呈し、脚を取り付けるための軸と「T」字形の刺金を基部に付ける。輪金の残存長5.1cm、環部最大幅5.2cm、復元基部幅1.6cm、脚の長さは7.6cmで、脚の最大幅は1.4cmを測る。脚は断面長方形の棒材を折り曲げ、環状にして軸にかける二脚式である。軸から4.5cmほどの部分を下方に曲げたあと、さら



第41図 7号墳出土馬具 1

にその先端を上方に折り返している。脚には木質が遺存しており、木目は脚の長軸と平行方向に走る。38は鉸具および脚であるが、鉸具は基部のみが残る。脚を取り付けるための軸を、鉸具の基部に付ける。脚は軸から4.7 cmほどのところで下方へ曲がっていくことが観察できる。また、脚には木質が付着しており、木目は脚の長軸と平行に走る。39は鉸具の輪金以外を欠損する。輪金の長さは6.1 cm、環部最大幅は5.6 cmを測る。肉眼およびX線写真の観察によると、輪金の基部に2箇所の孔が確認でき、それらは刺金および軸を取り付けるための孔と考えられる。

#### 鉸具（第41図40～42、図版32）

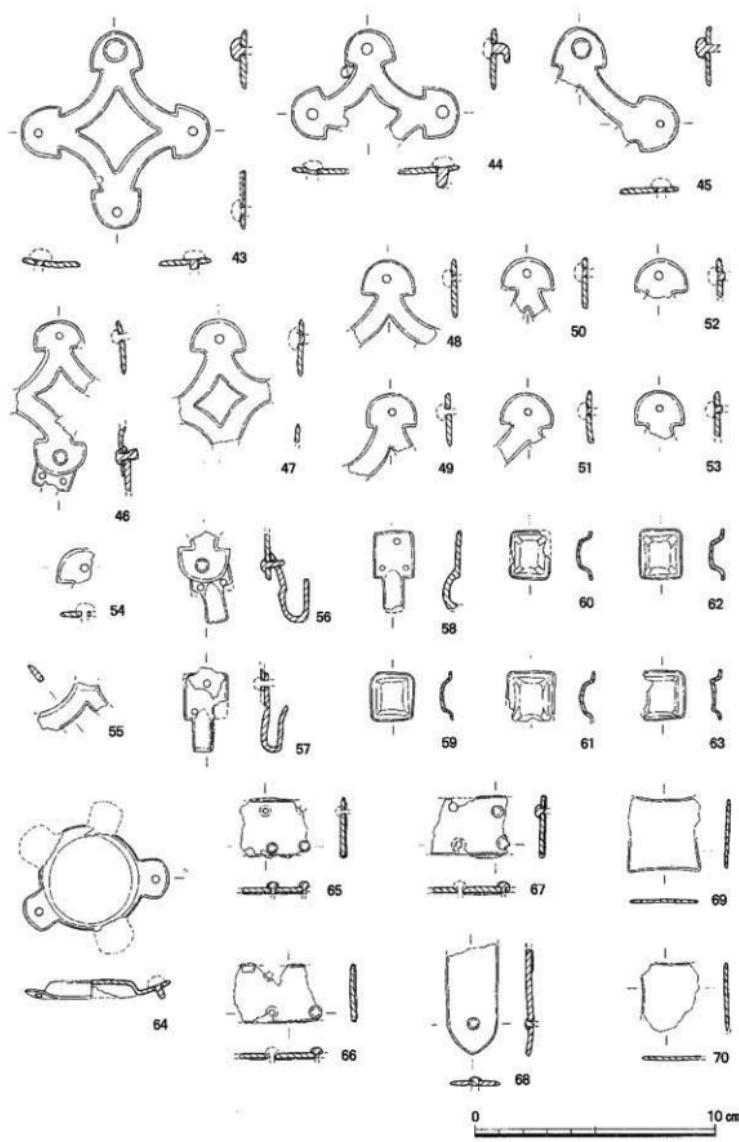
3点が出土している。40は長さ5.7 cm、環部最大幅4.2 cm、基部幅3.4 cmを測る。径約0.5 cmの棒材を曲げて輪金をつくり、その基部下辺に長さ6.3 cmの刺金の下端をまきつける。X線写真の観察からは、基部右隅角で鍛接していると考えられる。41は長さ4.7 cm、環部最大幅3.4 cm、基部幅3.0 cmを測る。形態は40とはほぼ同様で、輪金は径0.4 cmの棒材でつくり、刺金の長さは5.1 cmである。X線写真によると基部左隅角が若干ずれており、この部分で鍛接していることがわかる。42は残存長6.8 cmを測る。輪金および刺金に用いられている棒材の径は、それぞれ0.8 cm、0.7 cmで、40・41で使用されている部材よりも太い。

#### 辻金具・鈎金具（第42図43～58、図版33）

いずれも鉄地金銅張である。辻金具は4辺が内彎する菱形の各頂点に、半円形の脚がついた形態を呈する。脚の中央には鉢が打たれており、また、いずれの破片にも裏面全面に有機質が付着している。各個体とも、脚部幅は2.0～2.3 cm、各脚をつなぐ環状部の幅は0.8～1.0 cmで、法量は非常によくまとまっている。46・56・57では、脚の一つに鈎金具が鉢留めされており、鈎金具には鉢の痕跡が3箇所に認められる。このような形状をなす辻金具は、香川県さぬき市尾崎西遺跡ST03の横穴式石室から出土した副葬品中にも認められる〔森下2008〕。しかし、それ以外では類例が知られておらず、非常に特異な形態の辻金具といえる。

43～47は比較的残りの良い破片である。43は全形のわかる唯一の資料である。幅7.8 cm、高さ8.1 cm、厚さ0.2 cmを測る。脚の1つに円形の鉢頭が残り、鉢頭の径は0.9 cmである。44は幅6.9 cmを測る。鉢頭は欠損するが、鉢の脚が2箇所で残る。脚の長さは0.7～0.9 cmで、辻金具裏面から0.3 cmほどで直角に折れ曲がる。また、脚と環状部の付け根の1箇所に、断面「L」字形の鉢片が鍛着しており、貴金属の脚部の破片である可能性が考えられる。45では、脚の1箇所で鉢頭が残り、径は0.8 cmを測る。46は、一方の脚の裏面に鈎金具が鉢留めされている。鈎金具は鉤部を欠損しており、1.6×1.8 cmの板状部のみが残る。板状部の表面には、全面に金銅装が施されている。鈎金具の裏面には有機質の付着が認められることから、革帯は鈎金具の下に通され、鉢留めされていたと推定できる。板状部の下方にみられる2箇所の鉢は、鈎金具と革帯の固定のためのものと理解できる。脚中央の鉢頭は、円形で、径は0.6 cmを測り、脚の長さは0.7 cmである。

56～58は鈎金具である。幅1.6～1.8 cm、高さ1.8～1.9 cmの板状部の下辺から、幅0.8 cmの鉤部のがびる。金具全体の長さは約3.2 cmであり、板状部表面には、金銅装が施されている。56では板状部と辻金具の脚とが鉢留めされている。鉢頭は円形で、径は0.5 cmを測る。脚の長さは0.8



第42図 7号墳出土馬具2・不明鉄製品

cmで、鉤金具裏面から約0.3 cmのところではほぼ直角に曲げられる。この破片は、錆のため辻金具と鉤金具の間に隙間が空いた状態で接着してしまっているが、本来は46や57のように密着して錆留めされていたと考えられる。56・57では鉤部が完存しているにもかかわらず、鉄部材の接着が全く認められないことから、吊り下げられた杏葉は有機質製のものであった可能性が高い。

48～55は辻金具の破片である。51では、脚部の表面に布の付着が認められる。

全体の破片数から計算すると、7号墳におさめられていた辻金具は少なくとも6個体は存在したと判断できる。また、鉢頭の大きさにも径0.8～0.9 cmほどのもの(43・45)と、径0.5～0.6 cmほどのもの(46・56)の大小2種類が確認できる。

#### 飾金具(第42図59～63、図版34)

5点が出土しており、いずれも鉄地金銅張である。平面形は横約1.8 cm、縦2.0 cmの方形を呈し、断面形は縁のある台形状をなす。高さは0.4～0.6 cmを測り、縁金部分の裏面には有機質が付着している。

#### 雲珠(第42図64、図版34)

鉄地金銅張の五脚扁平鉢形雲珠である。鉢の平面形は円形で、頂部はふくらみをもたず、平坦である。鉢は径4.2 cm、高さ0.7 cmを測る。脚は現状では2脚が残るのみであるが、欠損状況を観察すると本来は5箇所についていたようである。脚は半円形を呈し、長さ1.1 cm、幅1.5～1.6 cmである。脚のほぼ中央には鉢が1つ打たれる。鉢頭の形状は欠損しているため不明であるが、鉢の脚は尖測圓右側のもので、長さ0.6 cmで、雲珠裏面よりおよそ0.3 cmのところで直角に曲がっている。

#### 鏡(第42図65～68、図版34)

木心鉄板張壺蓋を構成していたと考えられる破片が4点出土している。いずれも鉄製である。65～67はU字形金具の一部と考えられ、幅は2.3 cm、厚さ0.2 cmを測る。縁辺に沿って鉢が2列打たれている。鉢頭には銀装が施されており、鉢頭の径は0.4～0.5 cmを測る。鉢の打たれる間隔は、65で1.4～1.6 cm、66と67では1.9 cmとなっている。3点とも裏面には木質の付着が認められ、木日は遺物の長軸に対してほぼ垂直に走る。木質は側邊にも認められる。68はU字形金具の下端部と考えられる破片で、残存長4.5 cmで、幅2.1 cm、厚さ0.2 cmを測る。先端部は三角形状を呈し、先端から1.3 cmの箇所に鉢を打つ。鉢頭は円形で、径は0.5 cmを測る。裏面には有機質の付着が認められる。

これらの破片はいずれも細片であるため、金具の全形を把握することができず、器種の同定が確実であるとは断言できない。あるいは、胡簾金具の破片である可能性も想定できる。

#### 板状鉄製品(第42図69・70、図版34)

4辺がやや内彎する方形を呈した板状鉄製品で、2点とも鉄地金銅張である。厚さは約0.1 cmと薄く、大きさは69で幅3.0 cm、残存高3.0 cmを測る。いずれも裏面には有機質が付着している。

尾崎西遺跡ST03出土辻金具を参考にすると、菱形辻金具の中窓部分に組み合わせて使用されたと考えられる〔森下2008〕。

### (3) 小結

7号墳は、2号墳の後円部北西の張り出し部で検出された石室である。玄室の床面が確認されたようであるが、実測図などの記録がないため、墳丘・石室など遺構の詳細な状況を知ることはできない。

だが、遺物に関しては、幸いにも残されていた注記から7号墳出土の資料が抽出でき、須恵器、玉、鉄鏃、馬具、工具などが存在することが明らかとなった。特に馬具には金銅装が施され、辻金具は他にほとんど類例をみない珍しいものであることが判明した。この辻金具の唯一知られる類例が、香川県尾崎西遺跡で認められるが、このことは、古墳時代後期だけでなく、前期から後期を通した古墳時代全体での、当古墳群をはじめとする安威地域と東四国地域との交流関係を考える上でも、非常に興味深い事実である。

須恵器には蓋杯のほか、甌、壺、提瓶、甕が出土している。しかし、蓋杯以外はいずれも破片資料で、年代的位置づけを検討する基準とするのは難しい。

杯蓋は径が14.6～15.3cmを測り、天井部と体部を分ける稜はみられない。口縁端部は丸くおさめているが、8個体のうち2個体には、口縁端部内面に1本の沈線が巡っている。外面のヘラケズリの範囲は全体の約1/3～2/3である。杯身は口径が12.4～14.0cmで、立ち上がりが低く、ヘラケズリは底部外面の1/3～2/3程度に施される。これらの須恵器は、その特徴から、TK 10型式期新相～TK 43型式期に比定できる。蓋杯のみからさらに時期を限定するのは困難であるが、敢えて言えば、3号墳のⅡ群の蓋杯に法量が近いことから、想定された年代幅の中でもTK 43型式期に近い時期に位置づけられよう。

以上のような出土遺物の年代観から、7号墳の築造は3号墳の築造より遅く、将軍山古墳群の4基の後期古墳の中では一番最後に造られたものと考えられる。石室の情報が皆無であるため、埋葬施設の規模などを他の古墳と比較することはできないが、出土遺物の中に類例の僅少な辻金具を含む金銅装馬具や、反刃鏃などの鉄鏃を有しており、4基の中では最も豊かな副葬品をもつ古墳であると言える。

(若杉)

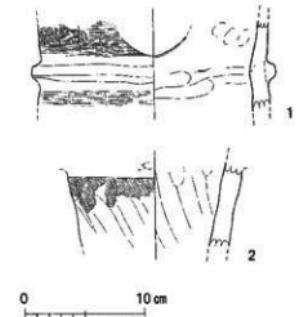
## 6. その他の出土遺物

### a 塙輪 (第43図1・2、図版35)

將軍山古墳群出土とされる2点の埴輪がある。2点とも詳しい出土位置は不明である。これらの中には、器面の調整などから時期差が読み取れ、古相のものを1、新相のものを2とした。

1は残存高7.5cmで、復元胴部径は19.2cmを測る。突帯を挟んで上下に2段分が残存しており、上段には透孔をもち、下段は器壁が極端に肥厚するため最下段と考えられる。外面調整は突帯貼り付け後のヨコハケが明瞭で、先行するタテハケなどの調整は確認できない。ヨコハケは上下2段ともに施されており、上段は2~3cm間隔で静止痕を残しながら高さを進めて二重にめぐっている。内面調整は突帯裏のヨコナデのほかはユビオサエが確認できる。黒斑はもたない。古墳時代中期のものと考えられる。

2は、器壁が厚いことや外面調整の様相から最下段の破片と考えられる。残存高7.0cm、復元胴部径14.8cmを測る。破片上部にはヨコナデがめぐり、一部に突帯を成形する際の断続的なユビナデの単位が遺存している。外面調整はナメ方向のナデと破片上部にのみナナメハケを施しており、部分的に板で押されたような痕跡も確認できる。内面はタテ方向のナデ上げにより調整をおこなっている。硬質な焼き上がりで須恵質に近い。古墳時代後期のものと考えられる。(所)

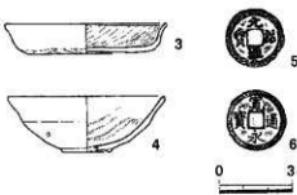


### b 土器 (第43図3・4)

土師器杯(3)と瓦器碗(4)が各1点出土している。

3は後円部北側から出土したもので、器高2.4cm、口径13.4cmを測る。内外面は黒色化している。内面は、全体に1段放射状暗文、底部には螺旋状暗文が施される。8世紀中頃のものと考えられる。

4は器高4.6cm、復元口径13.0cmを測る。淡灰白色を呈し、見込みには粗い暗文が入れられる。外面の口縁付近には色調の暗い部分があり、重ね焼きの痕跡と考えられる。14世紀前半のものと考えられる。



### c 古銭 (第43図5・6)

銅錢が2枚出土している。5は前方部東側から出土した北宋の元祐通宝であるが、残存状況は良好でない。6は後円部北側から出土した寛永通宝である。

背面には「文」の一字が鋳込まれており、寛文年間(1661~73年)のものであることがわかる。(若杉)

第43図 將軍山古墳群出土遺物

## 第4章 考察

### 墳丘構造からみた將軍山古墳

#### はじめに

『將軍山古墳群 I』の刊行以降、継続してきた整理・検討作業によって、昭和 39（1964）年におこなわれた墳丘調査の実測図などの資料を公表することができた。残された資料によると、將軍山古墳（2号墳）の墳丘調査はかなり広範囲にわたっておこなわれたようで、特に前方部からくびれ部にかけては、そのほぼ全域を調査・記録化している。遺構の状態は非常に良好で、葺石の基底石は一部を除きほぼ全体が遺存しており、また、上段・中段の各テラスには埴輪列も確認された。

この調査により、將軍山古墳は後円部・前方部とも 3段に築成された前方後円墳であることが明らかとなり、墳丘形態の復元も可能となった。本章では、將軍山古墳の墳丘形態やその構造を検討し、古墳時代前期における本墳の位置づけを考察する。

#### 將軍山古墳の墳丘形態

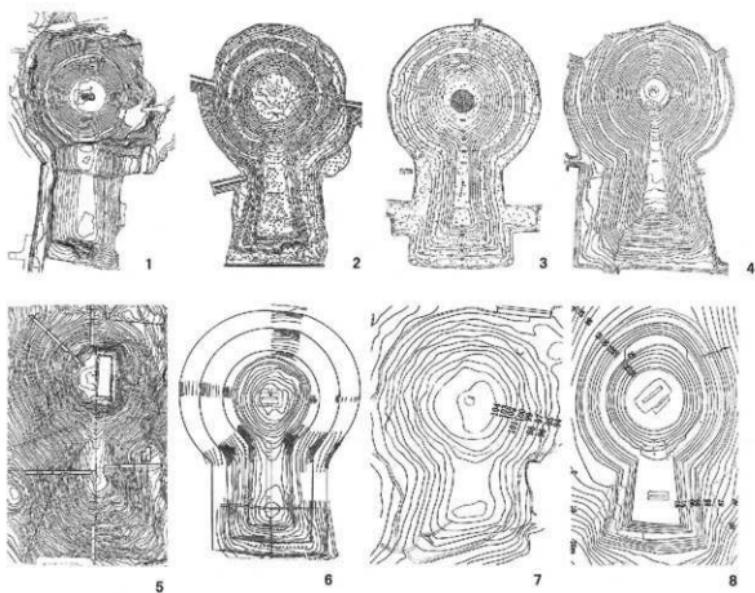
今回の整理作業の結果、將軍山古墳は、墳長約 107 m、最大後円部径が約 77.5 m、前方部長が約 40.5 m に復元できる 3段築成の前方後円墳であることが判明した。古墳の墳形は、第 1 図の墳丘復元図をみると、墳丘長に占める後円部の比率が高く、前方部が短くつまつた印象を受ける。前方部側面は外へは開かず直線的にのびており、そのためくびれ部の幅も広い。また、くびれ部の形状も、前方部と後円部がきつい角度で交わるものではなく、緩やかにカーブを描くような形で接続している。

將軍山古墳の墳丘には以上のような特徴が看取できるが、近年の墳丘研究においては、平面・断面の形態や段構成の比較などから畿内中枢部と各地の首長との政治的動向が論じられている〔岸本 2005 など〕。そこで、今回提示した將軍山古墳の墳丘形態を当時の中枢域である大和の古墳と比較することで、將軍山古墳の性格や築造の背景を明らかにしたい。

將軍山古墳は、副葬品や埴輪の特徴から、その築造年代を前期中葉ごろに比定できる〔廣瀬編 2005〕。第 44 図では、上段に前期中葉前後の築造と考えられる大和の大型古墳、下段に將軍山古墳周辺の前期古墳の墳丘測量図を並べた。

この図をみると、段築構造や断面形状をみるとまでもなく、上段の大和の巨大古墳の中に、上述のような將軍山古墳の特徴と似た要素をもつ古墳はみつけることはできない。

一方、將軍山古墳周辺の古墳としては、佐保川の対岸、西へ約 1 km に位置する紫金山古墳と、東約 3.5 km に位置する弁天山古墳群中の B 1 号墳および C 1 号墳を挙げた。近年おこなわれた紫



第44図 前期中葉前後の古墳の墳形（縮尺不同）

- |          |         |           |           |
|----------|---------|-----------|-----------|
| 1 メスリ山古墳 | 2 行燈山古墳 | 3 佐紀陵山古墳  | 4 五社神古墳   |
| 5 紫金山古墳  | 6 将軍山古墳 | 7 弁天山B1号墳 | 8 弁天山C1号墳 |

金山古墳の調査では、北側くびれ部において前方部が外にひらいていく形状をなすことが明らかとなっている〔阪口編 2005〕。紫金山古墳に関しては、詳しい墳丘形態が判明しておらず、段構成などを含めた詳細な比較をおこなうことは難しいが、少なくとも將軍山古墳のような直線的な前方部を有してはいなかったと判断できる。

また、弁天山C1号墳では、墳丘調査の成果から後円部3段、前方部2段に墳丘復元がなされている〔原口・西谷 1967〕。未調査であるB1号墳については測量図での比較になるが、前方部の開き方やくびれ部の屈曲角度などをみると、將軍山古墳の墳丘形態と一致する特徴は認めることができない。墳丘を全面的に調査している弁天山C1号墳では、前方部やくびれ部の形状のみでなく、段構成までが異なっており、直接的な比較は困難であると言えよう。

以上のように、將軍山古墳周辺の3古墳には、將軍山古墳と墳丘形態の一一致するものはみられなかった。しかし、大和の大型古墳とは異なり、將軍山古墳を含めた三島の4古墳では、細部の形状に異なる点はあるものの、いずれも墳丘に対して前方部が短いという特徴が読み取れる。ただ、このような特徴の一一致が偶然によるものであるのか、あるいは何らかの要因が古墳築造の背

景に存在するのかは、にわかに判断することは難しい。そこで、次項では將軍山古墳を例にとり、そのような墳形を創出せしめている墳丘構築方法に焦点を当て、さらに詳細な検討をおこないたい。

### 將軍山古墳の墳丘構造

將軍山古墳の墳形で最も目を引く特徴は、前方部の短さである。故に、將軍山古墳の墳丘形態を理解するためには、この短小な前方部が如何に形づくられているのかを明らかにする必要がある。

第2表には、前方部前面および東側面における、各段の傾斜角度・斜面長・比高差を示した。これらの数値は、残された実測図、測量図、土層断面図などから墳丘断面を復元し、導き出したものである<sup>11)</sup>。

この表をみると、中段では、東側面と前面で各項目の数値はほぼ同じであり、中段斜面はその形状を大きく変化させることなく、側面から前面へとまわっていっていることがわかる。一方、下段については、傾斜角度は東側面、前面でほぼ同じ値を示すが、斜面長では両者の差が2m以上にもなっている。その要因として考えられるのが基底石の比高差の違いであり、東側面では中段基底石と下段基底石との差が2.7mであるのに対し、前面ではその差が1.8mと東側面に比べ1m近くも小さい。同じ傾斜角度をもつ斜面の場合、高さが低ければ、斜面の長さも短くなり、その場合、斜面の水平距離も当然短くなる。このような理由により、前方部前面では下段の水平距離が短くなっている、平面形態でみると前方部がつまつたような形状を呈しているものと判断できる。

では、この前方部前面での比高差の縮小を生みだしている要因は一体何であろうか。第12図の前方部前端の墳丘土層断面図によると、前方部前面の墳裾は地山を削り出すことで造られていることがわかる。仮に、現状よりも長い前方部長を獲得するために、前方部前面の下段斜面をのばそうとした場合、その方法は現在の墳裾からさらに地山を掘り下げることで斜面長を長くする以外にはないであろう。しかし、前方部前面の東西幅は復元長で約50mあり、地山を前面全体にわたって掘り下げるには、相当の労働力が必要となる。実際の墳形をみると、將軍山古墳の墳丘構築においては、前方部前面の成形に際しそのような労働力は投下されなかつたようであり、最小限の加工で墳丘成形が済ませられたものと想定できる。そのために、前方部前面の下段斜面は

第2表 前方部における各斜面の大きさ

斜面	中 段			下 段		
	傾斜角度	斜面長(m)	比高差(m)	傾斜角度	斜面長(m)	比高差(m)
東側面	31°	6.4	3.3	25°	6.3	2.7
前面	30°	6.4	3.2	26°	4.1	1.8

(比高差は、1つの段の基底石とその段の基底石との高さの差を表す。)

現状のように比高差が小さく、斜面長が短い形状を呈していると理解できる。このことは、前方部前面下段東側の基底石が 52.2 m 前後の高さで、東側面の下段基底石より約 80 cm 高い状態で成形されていることからも確認できる。前方部前端については、基底石列の高さを側面と水平に揃えることなく、無理なく葺石を巡らせることができる高さまで掘削したところで構築作業を終えていると理解できる。

また、第 4 図の土層断面図からもわかるように、將軍山古墳では、地山に若干の盛土を施すこととで墳丘の多くの部分を構築している。前期古墳については、自然の地形を効率よく利用し築造されることが一般的であり、將軍山古墳もその例に漏れず、地山を最大限に利用して造られていることがわかる。上で検討した前方部前端の状況を考え合わせても、墳丘の成形に関しては、旧地形を最大限に利用し、加工を最小限に抑えるという一貫したスタンスが読み取れる。

また、近隣の紫金山古墳や弁天山 C 1 号墳でも、自然の地形を利用した墳丘構築がなされている。紫金山古墳では、近年の調査により墳丘の多くの部分が地山削り出しで造られていたことが明らかとなっており、また、後円部西側の丘尾切削部分では、地山が深く削られず、下段斜面が非常に短く終わり、墳壠の外側ですぐに丘陵が立ち上がりしていく状況が確認されている。弁天山 C 1 号墳でも、調査で盛土の認められたのは後円部墳頂と前方部前面のみであり、墳丘の大半が地山削り出しで成形されている。後円部が楕円形を呈しているのも、丘陵本来の地形に影響を受けているためであろう。

このように、丘陵上に築かれることの多い前期古墳では、自然の地形を巧みに利用し、最小限の加工で墳丘構築をおこなっている場合が一般的であり、將軍山古墳のやや特異な墳丘形態も、構築前の旧地形が反映した結果であると結論づけることができる。

## まとめ

以上、將軍山古墳の墳丘形態について、構築方法や立面形態から詳細に検討を加えた。その結果、將軍山古墳をはじめとする三島地域の前期古墳では、自然地形を最大限に利用しながら墳丘の築造がおこなわれていたことが確認できた。第 2 章でも述べているように、このような自然地形の影響を受けた墳丘形態が、他の古墳の墳形との比較にどれほど耐えられるかは定かではないが、第 44 図に掲げた短い前方部をもつ一群が三島地域に認められることもまた事実である。地形に左右されることの多い前期古墳において、これらの特徴の類似を偶然の一致と切り捨てることは些か難しいであろう。大和の大型古墳には類似した墳形が認められなかつたことも考慮に入れると、地域内で墳丘築造について何らかの情報共有がなされていた可能性も考えられよう。多数の前期古墳が存在する乙訓地域においても、竪穴式石室に占墳を越えた共通性が認められることが指摘されており [藤井 1999]、特定の地域内で墳形や埋葬施設に一定の規格性が共有されていたことが明らかとなっている。また、讃岐地方でも埋葬頭位や墳形に共通性が指摘されており [玉城 1985、北條 1999 など]、地域内での規格の共有は畿内を離れた地域でも看取できる。これらの事実から考えると、三島地域においても、緩やかながら一定の墳丘規格が存在した可能性

は十分考えられる。

地域内での情報共有が認められる一方、將軍山古墳については、竪穴式石槨に使用された結晶片岩や、東西傾位を示す埋葬施設などから、從来より東四国地域との関係が指摘されてきている〔都山 1986 など〕。また、墳丘に使用された壺形埴輪にも東四国の影響をみることができ、古墳構築において当地域との密接な交流関係が想定できる。さらに、將軍山古墳では葺石の葺き方にも特徴がみられ、基底石を立てるようにして用いる特徴的な葺き方は、向日市五塚原古墳〔和田ほか 2003〕や元同稻荷古墳〔京大 1971〕、神戸市西求女古墳〔安田編 2004〕でも確認されており、淀川流域内や大阪湾北岸地域との技術交流も想定できよう。

もちろん墳長 107 m を誇る当地域屈指の前期古墳である將軍山古墳が築造された背景には、当時の中枢地域である大和との繋がりも当然あったであろう。後円部竪穴式石槨の出土品である方形板革綴短甲はそのことを示唆するものであり、また、紫金山古墳をはじめとする近隣の古墳にも、大和の有力集団との関連をうかがわせる資料は数多い。しかし一方、古墳築造を通じた地域間交流も、実に活発におこなわれていたことが、本考察を通じて明らかとなった。このような大和も含んだ多様な地域間交流の中で築造された將軍山古墳は、まさに古墳時代前期の地域間關係を示す縮図と言えよう。墳丘形態という外面の情報だけでなく、こうした古墳構築にかかる技術体系全体を総括的に考察することで初めて、大型墳墓築造に最も価値を見出した古墳時代の社会状況を具体的に復元することが可能になると考える。

(若杉)

## 註

(1) 上段については、現状では前方部墳頂の正確な高さを復元することが不可能であるため、各数値を示すことはできなかった。

## 【挿図出典】

- 第 44 図 1 : 岸本直文 2005『前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究』2001～2004 年度  
科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書 大阪市立大学大学院文学研究科  
2・3 : 宮永雅雄 1975『古墳の航空大観 陵墓図』学生社  
4 : 陵墓調査室 2005『平成 15 年度 陵墓関係調査報告』『書院部紀要』第 56 号 宮内庁書院部  
5 : 阪口英毅（編）2005『紫金山古墳の研究』平成 14～16 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））  
研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科  
6 : 本書第 1 図  
7・8 : 原口正三・西谷 正 1967『弁天山 C 1 号墳』『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第  
17 輯 大阪府教育委員会

## 第5章 総括

平成14年（2002）4月から開始した將軍山古墳群の整理・検討作業は、本報告書をもってひとまず終了する。本書では、平成17（2005）年刊行の『將軍山古墳群1』に収録できなかった將軍山古墳（2号墳）の墳丘調査の成果および周辺の後期古墳の調査成果を公表することができ、これにより昭和39（1964）年に実施された將軍山古墳群の調査の全容が明らかとなった。

將軍山古墳は、残された図面などから墳頂約107m、後円部最大径約77.5m、前方部長約40.5mに復元でき、いざれも過去の報告【大阪市博1965】の数値を改める結果となった。墳丘形態は後円部が大きく前方部が短小で、くびれ部の屈曲が甘いといった特徴をもつが、測量図や土層断面図などの検討から、墳丘の大部分を地山で構築していることが明らかとなり、そのやや歪な墳丘形状は丘陵の旧地形が大きく影響した結果であると理解できた。その墳形は大和の大型古墳とは類似性を指摘できず、むしろ三島地域で短い前方部を有する古墳が散見されることから、地域内での情報共有があった可能性も考えられる。また、墳丘の各所でみられる扁平な石を縦使いした基底石は、淀川北岸や大阪湾北岸の古墳にも採用されており、墳丘構築技術を通じた交流関係が示唆される。

埋葬施設の頭位や石櫛石材から、從来より東四國地域との密接な関係が指摘されていた將軍山古墳であるが、整理作業の結果明らかとなった墳丘の諸特徴からは、より多様でより広範な地域間交流を背景に読み取ることができた。当時の地域社会の繋がりを解明する上で、將軍山古墳のもつ意義は非常に大きい。

將軍山古墳のように、副葬品・埋葬施設・墳丘形態・埴輪といった諸要素がこれほど詳細に判明している前期古墳は、全国的にも稀である。昭和31（1956）年におこなわれた後円部竪穴式石櫛の調査資料の公表が待たれるが、今後これらの資料を含めさらに検討を重ねることで、茨木の地域史の解明のみならず、古墳時代前期の社会構造を紐解く上でも重要な役割を担う古墳であると言える。

將軍山古墳の周りには、5基の後期古墳が存在していた。早くに盜掘がなされ、副葬品などの内容がわからぬ将軍塚古墳（1号墳）を除くと、4号墳が最も早くに築かれ、続いて5号墳、3号墳、7号墳の順に築造がなされたと考えられ、副葬品の示す時期から、6世紀全般を通じて古墳群が形成されていったことが明らかとなった。副葬品については、品目に若干の違いがみられるものの、その内容に大きな差ではなく、安定した勢力を有した小地域の有力者一族という被葬者像を描くことができる。金銅装の馬具や反刃鐵などの鉄鎌の存在を考慮すると、7号墳の時期に最も力をもった可能性が考えられよう。ただ、4基のうちで墳丘や石室規模が判明するのは3号墳だけで、それらの観点から古墳群の変遷や性格を検討できないことが残念でならない。

しかし、古墳群中唯一現存する將軍塚古墳は盜掘により副葬品などの情報が知られておらず、

今回本書において、その他の4基の後期古墳の内容を報告できた意味は大きいと考える。佐保川対岸に位置する紫金山古墳の近隣には、南塚古墳〔川端・金闇 1955〕、青松塚古墳〔小林 1962〕、海北塚古墳〔梅原 1937〕といった後期の有力な単独墳が6世紀を通じて築かれており、また将軍山古墳の北には前期と後期に約20基の古墳が造営される安威古墳群が存在している。今後それらの古墳・古墳群を加えた総括的な検討によって、佐保川流域並びに三島の地域社会の動向をより鮮明に描き出せるものと信じている。

また、今回の整理検討作業によって、従来より将軍山古墳前方部外側に築かれていることが知られていた箱式石棺が、3号墳の墳丘上に位置していたことが明らかとなった。石棺石材には結晶片岩が使用されていたようであり、古墳時代前期にあった結晶片岩を重用する文化が、約200年後の後期古墳の築造にも看取できる。結晶片岩は紫金山古墳の竪穴式石槨や、海北塚古墳の箱式石棺にも用いられており、将軍山古墳を含めた安威地域と、東四国地域をはじめとする結晶片岩産出地との親密で長期的な交流を想定できよう。

以上のように、将軍山古墳群の検討からは、古墳構築を通じた多様な地域間交流が看取できた。現在その姿をみるとことはできない将軍山古墳群であるが、この古墳群の発する情報は、今なお茨木、三島の地域史の理解にとって重要な位置を占める。将軍山古墳群の基本報告は本書をもって終わりとなるが、今後さらに多角的な視点から検討を重ねることで、より具体的で豊かな古墳時代像を描くことが可能となろう。本報告がその基盤となれば、幸いである。

(若杉)

### 【引用・参考文献】

- 石部正志 1975 「前期古墳における特殊な多葬について」『権原考古学研究所論集』創立三十周年記念 吉川弘文館
- 臼杵 熊 1984 「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX - 古墳文化研究会 -
- 臼杵 熊 1985 「古墳出土の鉢の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 PHALANX - 古墳文化研究会 -
- 梅原木治 1937 「摺津塙井の海北塚古墳」『近畿地方古墳墓の調査』二 日本古文化研究所
- 大阪市立博物館 1965 「将軍山古墳調査概報」『大阪市立博物館報』No.4
- 太田宏明 2001 「畿内地域の後期古墳」『第8回東海考古学フォーラム三河大会 東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム三河大会実行委員会・三河古墳研究会
- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の櫛」について—環状鏡板付櫛の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX - 古墳文化研究会 -
- 奥村清一郎 (編) 1983 「湯舟坂2号墳」京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会
- 小野山 節ほか 1995 「琵琶湖周辺の6世紀を探る」平成6年度科学研究費補助金一般研究B 調査研究成果報告書  
京都大学文学部考古学研究室
- 堅田 直 1968 「茨木市将軍山古墳石室移築報告」考古学シリーズ3 帝塚山大学考古学研究室

- 堅田 直 1993 「古墳 1,700 YEARS AGO」 グラフィティ・日本誕生典③ 光文社
- 金田善敬 1995 「有袋鉄斧の製作技法の検討」『古代古墳』第 17 集 古代吉備研究会
- 川端真治・金闇 惣 1955 「摂津豊川村南塚古墳調査概報」『史林』第 38 卷第 5 号 史学研究会
- 岸本直文 2005 「前方後円墳の築造規格からみた古墳時代の政治的変動の研究」2001-2004 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書 大阪市立大学大学院文学研究科
- 岸本直文 2006 「三島の前方後円墳」「三島古墳群の成立－初期ヤマト政権と淀川一」高槻市立しろあと歴史館秋季特別展 高槻市立しろあと歴史館
- 京都大学考古学研究室向日丘陵古墳群調査団 1971 「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第 54 卷第 6 号 史学研究会
- 小林行雄 1956 「茨木市将軍山古墳調査概報」『日本考古学協会彙報』別編 6 第 17 回総会研究発表要旨 日本考古学協会
- 小林行雄 1962 「青松塚古墳の調査」「大阪府の文化財」文化財保護法施行十周年記念 大阪府教育委員会
- 近藤憲一・都出比呂志 2004 「向日丘陵の前期古墳」開館 20 周年記念特別展示図録 向日市文化資料館
- 斎藤 弘 1986 「古墳時代の盜難の分類と編年」『日本古代文化研究』第 3 号 PHALANX - 古墳文化研究会 -
- 阪口美穂（編）2005 「紫金山古墳の研究」平成 14 ~ 16 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科
- 坂本美夫 1985 「辻金具・鍛具考」「研究紀要」2 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 坂本美夫 1988 「鍛具考」「考古学叢考」中巻 斎藤忠先生頌寿記念論文集 吉川弘文館
- 桂川隆平・免山 篤 1964 「茨木市の文化財」第 3 号 茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会
- 史学研究会 1965 「学界消息 最近の古墳調査」『史林』第 48 卷第 4 号
- 鈴木 有 2003 「後期古墳に副葬される特殊鉄鏡の系譜」「研究紀要」第 10 号 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 清家 章 2001 「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」「古代学研究」第 152 号 古代学研究会 -
- 関義則 1986 「古墳時代後期鉄鏡の分類と編年」「日本古代文化研究」第 3 号 PHALANX - 古墳文化研究会 -
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群」I 研究論集第 10 号 平安学園
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 玉城一枝 1985 「讃岐地方の前期古墳をめぐる二、三の問題」「末永先生米寿記念論文集」乾 泰良明新社
- 都出比呂志 1986 「竪穴式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史研究室
- 寺前直人・高橋照彦（編）2005 「井ノ内稻荷塚古墳の研究」大阪大学文学研究科考古学研究報告第 3 冊 大阪大学学術出版会
- 寺前直人・福永伸哉（編）2007 「勝福寺古墳の研究」大阪大学文学研究科考古学研究報告第 4 冊 大阪大学文学研究科考古学研究室
- 富山直人 2007 「大阪北部の横穴式石室」「考古学論究一小笠原好彦先生退官記念論集-」真陽社
- 豊島直博 2001 「古墳時代後期における直刀の生産と流通－近畿地方を中心にして－」「考古学研究」第 48 卷第 2 号 考古学研究会
- 鍋島敏也・藤原 学 1974 「千里古窯跡群」藤原童心社

- 新納泉・光木順（編）2001『足東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室
- 野上丈助 1969『浜津の古墳』古美術鑑賞社
- 野島 水 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号 考古学研究会
- 橋本清一 2005「紫金山古墳の葺石の石材」板口（編）2005所収
- 花谷 浩 1986「素環鏡板付鉢の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 原口正三・西谷 正 1967「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯 大阪府教育委員会
- 岸瀬 党 2003「葺石」和田ほか 2003所収
- 廣瀬 党 2005「壺形埴輪の大型化とその背景」『符塚山古墳群』I－考古学資料調査報告集I－ 新修茨木市史史料集8 茨木市
- 福永伸哉 1992「近畿地方の小凹穴式石室－長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学文学部考古学研究報告第2号 大阪大学南原古墳調査団
- 藤井章徳 2007「古墳時代鉄鋤の袋部について」『元興寺文化財研究所創立40周年記念論文集』（株）クバプロ
- 藤井康隆 1999「向日丘陵前期古墳群の凹穴式石棺について」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第49集 向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター
- 藤原 学 2002「群集墳と群集窓 一八十塚古墳群出土須恵器と周辺の生産地の関連から」『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究室
- 北條芳隆 1999「旗岐塚前方後円墳の撻唱」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学考古学研究室
- 北條芳隆 2003「東四国地域における前方後円墳成立過程の解明」平成12～14年度科学研究費補助金基礎研究（C）（2）研究成果報告書
- 二木文雄 1957「古墳出土の鏡について」『考古学雑誌』第42巻第3号 日本考古学会
- 水野敬典 2003a「鐵鏟にみる古墳時代後期の諸段階」第8回東北・関東前方後円墳研究会大会 後期古墳の諸段階発表要旨資料 東北・関東前方後円墳研究会
- 水野敬典 2003b「古墳時代中期における鐵鏟の分類と編年」『櫛原考古学研究所論集』第十四 八木書店
- 森 哲一 1951「安威古墳群の問題」『古代学研究』第5号 古代学研究会
- 森下英治（編）2008『尾崎西遺跡 県道高松長尾人内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』香川県教育委員会
- 森下浩行 1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜－畿内型と九州型－」『古代学研究』第111号 古代学研究会
- 安田 澄（編）2004「西求女塚古墳発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 吉山知史 2007「又様と形態からみた後期古墳出土鏡の編年」寺前・福永（編）2007所収
- 和田勝吾ほか 2003「五塚原古墳第1・2次発掘調査報告」立命館大学学芸員課程研究報告第10冊 立命館大学文学部

## 遺物観察表

- ここでは、本書において報告している将軍山古墳群の土器、玉、鐵鏃、埴輪についての観察表を掲げる。
- 土器の器高・玉の長さ、鐵鏃の各部計測値において( )をついているものは残存数値を示す。
- 土器の口径、普通円筒埴輪の口径および底径において( )をついているものは推定値を示す。
- 土器および普通円筒埴輪の残存率は、径の推定値をもとに5%ごとに残存している割合を示した。
- 鐵鏃の型式名称・部分名称・測定部位については、水野敏典「古墳時代中期における鉄鏃の分類と編年」(櫻原考古学研究所論集 第十四、2003年)におおよそ準じている。
- 備考欄にはそれぞれの項目以外に注意される特徴について記した。
- 観察表中において、とくに単位を示さない場合、数値はcmを用いて表示している。

土器観察表1 (3号墳)

番号	標団 番号	種類	器種	口径	器高	口縁 形状	胎 土	焼 成	外表面色	内表面色	ヘラケズリ	備 考
1	16	復原器	杯盤	15.0	4.4	90%	青(約1mm程度の白芯 部分を残す場合)	やや下火	灰～灰白	灰～灰白	ロクロ左	
2	16	復原器	杯身	13.85	3.85	100%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰白	ロクロ左	内面中央にニビオヤニ の痕跡がある	
3	16	復原器	杯盤	15.9	4.35	100%	やや青	やや下火	灰白～白	ロクロ右		
4	16	復原器	杯身	14.4	3.9	100%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	やや不良	灰白	灰白	ロクロ右	
5	16	復原器	46枚	15.2	4.6	60%	やや青	やや小火	灰白	ロクロ左		
6	16	復原器	杯身	13.9	4.3	100%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰白	灰黄白	ロクロ右	
7	16	復原器	杯盤	15.8	4.55	60%	やや青(約1mm程度の白 色部分を少し残す場合)	やや不良	灰白	灰白	ロクロ左	
8	16	復原器	杯身	13.8	3.5	100%	やや青(約1mm程度の白 色部分を少し残す場合)	良好	灰	灰	ロクロ左	
9	16	復原器	杯身	15.5	4.1	60%	やや青(約1mm程度の白 色部分を少し残す場合)	やや下火	灰白	灰白～白	ロクロ左	
10	16	復原器	杯身	13.95	4.0	90%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	やや不良	黄灰	黄灰	ロクロ右	
11	16	復原器	杯身	13.8	3.75	60%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰	ロクロ右		
12	16	復原器	杯盤	14.7	4.3	80%	青(約2～3mmの白色) (約1mm程度の白色部分 を残す場合)	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
13	16	復原器	杯身	14.7	4.8	100%	やや青	良好	青灰	青灰	ロクロ右	ヘア形跡あり
14	16	復原器	杯盤	14.2	3.8	100%	青(約1mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰	灰	ロクロ右	
15	16	復原器	杯身	12.7	3.8	90%	青(約1～2mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰～黄灰	灰	ロクロ右	内面中央に同心円状の 筋で具模様がある
16	16	復原器	杯盤	14.3	4.05	100%	青(約1～2mm程度の白色 部分を残す場合)	良好	灰～青灰	灰～青灰	ロクロ右	天井部や不整形
17	16	復原器	杯身	12.4	3.8	100%	青(約2～3mmの白色) (約1mm程度の白色部分 を残す場合)	良好	灰～青灰	灰	ロクロ右	白柄輪(桜柄輪)が内 方にかかる
18	16	復原器	杯盤	14.3	3.75	90%	青(約2～3mmの白色) (約1mm程度の白色部分 を残す場合)	良好	灰～青灰	灰	ロクロ右	脱ぶくれあり
19	16	復原器	杯身	12.6	4.2	100%	青(約1～2mmの白色) 青(約1mm程度の白色部分 を残す場合)	良好	灰～青灰	灰	ロクロ右の後 ロクロ左	
20	16	復原器	作柵	(14.0)	(3.3)	40%	灰	青灰	青灰	ロクロ右	2段3方透かし 杯身に網目文	
21	17	復原器	無底盤	11.7	16.6	90%	灰(石灰、良石などを 含む)	支脚	墨青灰	墨青灰		
22	17	復原器	杯身	5.5	17.0	90%	青(約1mm程度の黒芯を 含む)	良好	青灰	青灰		カキ口にロクロ右
23	17	復原器	足	(14.6)	18.4	10%	青(約1～2mmの白色花 紋を含む)	良好	淡灰	淡灰	ロクロ右	
24	17	復原器	足	(12.6)	16.8	20%	青(約1mm程度の黒芯を 含む)	良好	淡灰	淡灰	ロクロ左	
25	17	復原器	足	(15.5)	14.5	40%	青(約1mmの白色花紋を 含む)	良好	淡灰	淡灰	ロクロ左	内面に沿部縫合跡の絞 り跡がある
26	18	復原器	青	10.35	5.4	100%	青(約1mmの白色花紋を 含む)	良好	淡灰	淡灰	ロクロ左	表面にカキ口を有す
27	18	復原器	右村良継款	11.5	31.0	85%	青(約1mmの長石を含 む)	良好	青灰～淡灰	淡灰		2段3方透かし D軸輪(無底輪)が表面 上部にかかる
28	18	復原器	青	11.15	4.1	100%	青(約1mmの花園紋を 含む)	良好	淡青白	ロクロ右	青白輪(淡青灰)が かかる	
29	18	復原器	右村良継款	10.2	31.0	90%	青(約1mmの長石を含 む)	良好	青灰	青灰	ロクロ右	2段3方透かし
30	19	復原器	右村良継款	10.2	30.4	70%	青(約1mmの長石を含 む)	良好	青灰	青灰	ロクロ左	1段3方透かし
31	19	山口綱	小島丸底款	(10.0)	11.5	90%	青(約1mmの長石を含 む)	良好	青	青	ロクロ左	押出部小皿底
32	19	土器器	堅鍛器	(9.8)	12.5	40%	チャート・青石・青白 岩・白灰・青白(含む)	良好	青	青	ロクロ左	外側面部中央へ弧 形線

土器観察表2（4号墳）

番号	種類	器種	口径	器高	口縁 基盤	胎 土	焼 成	外面色調	内面色調	ヘラケズリ	備 考
1 25	深窓器	杯型	14.7	4.9	100% 石を含む	灰（アーモンド色、無 鉄を含む）	良好	淡青灰	碧青灰	ロクロ右	
2 25	円窓器	平底	12.7	4.6	100% 黒母貝を含む、少しあ 熱鉄を含むにむし	灰（一定量の灰石、 黒母貝を含む、少しあ 熱鉄を含むにむし）	良好	青灰	青青灰	ロクロ左	
3 25	深窓器	平底	15.3	3.9	100% 灰（1mm以上後灰石 を含む）	灰（1mm以上後灰石 を含む）	良好	淡青灰	碧青灰	ロクロ右	
4 25	深窓器	平底	12.4	4.3	95% 灰（アーモンド色、無 鉄を含む）	灰（アーモンド色、無 鉄を含む）	良好	淡青灰	碧青灰	ロクロ左	
5 25	圓窓器	無蓋杯	(19.4)	12.8	35% 石を含む	灰（1~2mmの長石を 少數含む、0.2~0.4mmの 石英を多量含む）	良好	淡青灰	碧青灰	1段3方窓なし	
6 25	深窓器	縦	(21.0)	(2.4)	13% 灰（アーモンド色、無 鉄を含む）	灰（1~2mmの長石を 少數含む、0.2~0.4mmの 石英を多量含む）	良好	灰~黒灰	灰~黒白		
7 25	圓窓器	縦	(18.1)	(8.0)	5% 灰（2mm以上後灰石 を含む）	灰（1mm以上後灰石 を含む）	良好	青灰	灰~黄灰		
8 25	深窓器	古朴型	(15.0)	(22.5)	30% 灰（2mm以上後灰石 を含む、少しあの色を 含む）	灰（2mm以上後灰石 を含む、少しあの色を 含む）	良好	淡青灰	碧青灰		2段4方窓なし（上：先 方形、下：二角形）

土器観察表3（5号墳）

番号	種類	器種	口径	器高	口縁 基盤	胎 土	焼 成	外面色調	内面色調	ヘラケズリ	備 考
1 34	深窓器	杯型	14.3	4.3	65% 灰（4.3~5mm灰石等 を含む）	灰（4.3~5mm灰石等 を含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
2 34	圓窓器	縦	(15.2)	(2.8)	40% 灰（4mm以上後灰石 を含む）	灰（4mm以上後灰石 を含む）	良好	淡青灰	碧青灰		
3 34	圓窓器	杯型	15.0	5.1	40% 灰（4mm以上後灰石 を含む）	灰（4mm以上後灰石 を含む）	良好	淡灰白	淡灰白	ロクロ右	
4 34	深窓器	浅灰	5.1	16.4	65% 灰（4mm以上後灰石 を含む）	灰（4mm以上後灰石 を含む）	良好	青灰	青灰		

土器観察表4（7号墳）

番号	種類	器種	口径	器高	口縁 基盤	胎 土	焼 成	外面色調	内面色調	ヘラケズリ	備 考
1 36	深窓器	杯型	(15.3)	4.2	15% 灰（2~3mmの花崗岩 を含む）	灰（2~3mmの花崗岩 を含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
2 36	深窓器	平底	14.0	(3.8)	55% 灰（1~2mmの長石を 含む）	灰（1~2mmの長石を 含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
3 36	深窓器	杯型	14.8	4.2	70% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
4 36	深窓器	杯型	(13.6)	(3.6)	30% 灰（1mmの長石を含む）	灰（1mmの長石を含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
5 36	深窓器	杯型	15.0	4.4	90% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	淡青灰	碧青灰	ロクロ右	
6 36	深窓器	杯型	12.8	4.3	35% 灰（2~3mmの花崗岩 を含む）	灰（2~3mmの花崗岩 を含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
7 36	圓窓器	杯型	14.9	4.2	45% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
8 36	深窓器	平底	(13.4)	(4.0)	10% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	淡灰	淡灰	ロクロ右	
9 36	深窓器	杯型	(15.0)	(4.2)	30% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
10 36	深窓器	平底	13.4	4.0	65% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	青灰	青灰	ロクロ右	
11 36	深窓器	杯型	14.6	4.5	70% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
12 36	深窓器	平底	(14.0)	4.8	20% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
13 36	深窓器	杯型	(15.3)	(3.8)	20% 灰（1mmの長石を 含む）	灰（1mmの長石を 含む）	良好	灰	青灰	ロクロ右	
14 37	圓窓器	縦	—	(1.85)	0% 灰（1mmの長石を 含む、長石を数粒含む）	灰（1mmの長石を 含む、長石を数粒含む）	良好	灰~黒灰	灰~青灰		ヘジ刷毛不適用
15 37	深窓器	縦	(13.2)	(3.2)	10% 灰（1mm以下灰石を 含む）	灰（1mm以下灰石を 含む）	良好	灰	灰		
16 37	圓窓器	縦	(14.4)	(6.0)	5% 灰（1mm以下灰石を 含む）	灰（1mm以下灰石を 含む）	良好	青灰	青灰		

番号	博団 番号	種類	器種	口径	器高	口縁 残存率	胎土	焼成	外面色調	内面色調	ヘラケズリ	備考
17	37	灰窓器	甕	(22)	(5.9)	15%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む	良好	青灰	淡灰	=クロ古	
18	37	灰窓器	灰灰	-	(5.2)	0%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む	良好	青灰	灰		
19	37	灰窓器	甕	(22.2)	(3.6)	5%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む	良好	青	灰		
20	37	灰窓器	甕	(19.8)	(9.8)	15%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む、黒色斑を含む	良好	青灰	淡灰		
21	37	灰窓器	甕	-	(9.2)	0%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む、内面に 黒色斑を含む	良好	灰	青灰	淡灰(或褐色)が外側 でかかる	
22	37	灰窓器	甕	-	(12.2)	0%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む、灰灰を含む	良好	青灰	淡灰		
23	37	灰窓器	甕	-	(9.2)	0%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む、黒色斑を少含む	良好	青灰	淡灰		
24	37	灰窓器	甕	-	(6.6)	0%	泥(0.1mm以下)の塊石 を少含む、黒色斑を 少含む	良好	青灰	淡灰		

玉類観察表1 (4号墳)

番号	博団 番号	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	材質	色調
				上	下			
1	26	7.4	17.5	2.0	2.2	0.72	玻璃繊維	薄青色
2	26	6.4	19.0	2.8	2.3	1.41	碧玉	濃緑色
3	26	6.9	19.9	2.2	1.2	1.74	碧玉	濃緑色
4	26	8.6	20.1	2.3	2.0	2.67	碧玉	濃緑色
5	26	8.0	20.1	2.6	1.9	2.14	碧玉	濃緑色
6	26	8.0	22.3	2.8	2.4	3.11	碧玉	濃緑色
7	26	8.4	22.3	2.0	2.0	3.00	碧玉	濃緑色
8	26	8.2	22.4	2.6	2.2	3.00	碧玉	濃緑色
9	26	8.6	22.7	2.6	2.2	3.13	碧玉	濃緑色
10	26	7.1	22.9	2.9	1.1	1.93	碧玉	濃緑色(白むらあり)
11	26	8.7	23.0	2.6	2.4	3.19	碧玉	濃緑色
12	26	8.2	23.0	2.3	2.3	3.09	碧玉	濃緑色
13	25	7.4	(18.0)	2.3	1.3	1.80	碧玉	濃緑色

玉類観察表2 (7号墳)

番号	博団 番号	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	材質	色調
				上	下			
1	38	8.6	8.7	2.2	1.9	0.89	ガラス	不透明な青色
2	38	9.7	8.9	2.4	1.9	0.99	ガラス	不透明な緑色
3	38	8.2	8.9	2.3	2.1	0.78	ガラス	不透明な緑色
4	38	8.6	9.0	2.4	2.0	0.78	ガラス	不透明な緑色
5	38	8.0	9.1	2.4	2.1	0.86	ガラス	不透明な黄色
6	38	8.7	8.6	2.2	1.9	0.83	ガラス	不透明な黄色
7	38	8.2	8.9	2.6	1.9	0.76	ガラス	不透明な黄色
8	38	7.0	8.9	2.3	2.1	0.88	ガラス	不透明な黄色
9	38	8.6	5.1	1.3	1.3	0.30	ガラス	透明な青色

鉄錠観察表1 (3号壙)

番号	播因 番号	型式	全長	錐身部長	錐身部幅	頭部長	頭部幅	茎部長	備考
1	20	半盤系有頭輪扶輪式	(7.0)	(4.9)	(2.9)	(3.3)	0.8	—	
2	20	半盤系有頭輪扶輪式	(7.3)	(4.6)	(2.9)	(3.2)	0.9	—	
3	20	半盤系有頭輪扶輪式	(5.1)	4.9	2.7	(0.2)	0.8	—	
4	20	半盤系有頭輪扶輪式	(8.1)	(5.1)	(1.5)	(3.2)	0.8	—	
5	20	半盤系有頭輪扶輪式	(11.0)	(4.8)	1.5	3.1	0.6	(3.5)	
6	20	半盤系有頭輪扶輪式	(10.6)	(5.8)	1.5	3.3	0.6	(2.0)	
7	20	半盤系有頭輪扶輪式	(9.8)	(5.1)	(1.7)	3.1	0.6	(1.8)	
8	20	半盤系有頭輪扶輪式	(9.9)	(3.8)	(1.7)	3.1	0.6	(3.4)	
9	20	半盤系有頭輪扶輪式	(6.0)	5.2	1.5	(1.0)	0.6	—	
10	20	半盤系有頭輪扶輪式	(5.6)	(3.5)	(1.6)	(2.4)	0.8	—	
11	20	不明	(5.0)	—	—	(2.9)	0.7	(2.1)	
12	20	不明	(4.1)	—	—	—	—	(4.1)	

鉄錠観察表2 (4号壙)

番号	播因 番号	型式	全長	錐身部長	錐身部幅	頭部長	頭部幅	茎部長	備考
1	27	有透ナガ開二角式	(13.2)	(5.0)	(3.8)	5.2	0.9	(3.1)	
2	27	有透ナガ開二角式	(3.4+6.9)	(3.4+1.5)	(2.5)	(5.4)	0.8	—	
3	27	有透ナガ開三角式	(8.2)	(2.4)	2.7	4.5	0.9	(1.3)	
4	27	長頭三角式	(14.9)	1.9	1.3	8.6	0.7	4.4	
5	27	長頭三角式	(12.0)	1.9	1.1	8.4	0.7	(2.6)	
6	27	長頭三角式	(11.5)	1.7	1.2	7.8	0.6	(2.0)	
7	27	長頭三角式	(14.8)	1.9	1.2	8.6	0.7	(4.3)	
8	27	長頭三角式	(9.8)	2.0	1.2	7.0	0.7	0.8	
9	27	不明	(12.4)	(0.6)	(1.1)	8.8	0.6	(2.9)	
10	27	長頭三角式	(3.6)	1.9	1.2	(1.9)	0.7	—	
11	27	長頭三角式	(3.6)	1.8	1.2	(1.8)	0.6	—	
12	27	長頭三角式	(3.4)	1.6	1.3	(1.9)	0.6	—	
13	27	長頭三角式	(2.9)	1.6	(1.2)	(1.4)	(0.6)	—	
14	27	長頭三角式	(2.2)	1.6	(1.0)	(0.6)	0.7	—	
15	27	長頭三角式	(2.4)	1.9	1.2	(0.5)	0.5	—	
16	27	長頭三角式	(2.2)	1.9	1.1	(0.3)	(0.7)	—	
17	27	不明	(3.4)	(0.7)	1.1	(2.7)	0.6	—	
18	27	不明	(2.8)	0.9	1.1	(1.0)	0.7	—	
19	27	不明	(5.1)	—	—	(5.1)	0.7	—	
20	27	不明	(6.3)	—	—	(4.1)	0.7	(2.2)	別個体の直頭部
		不明	(2.3)	—	—	(2.3)	0.8	—	
21	27	不明	(11.5)	—	—	(5.5)	0.6	6.0	
22	27	不明	(9.0)	—	—	(6.8)	0.7	(2.2)	
23	27	不明	(8.0)	—	—	(6.0)	0.6	(2.0)	
24	27	不明	(8.2)	—	—	(6.0)	1.0	(2.2)	
25	27	不明	(7.5)	—	—	(5.6)	0.8	(1.9)	別個体の直頭部
		不明	(1.7)	—	—	—	—	(1.7)	
26	27	不明	(7.2)	—	—	(4.8)	0.8	(2.4)	
27	27	不明	(5.8)	—	—	(2.3)	0.6	(4.5)	
28	27	不明	(6.7)	—	—	(5.4)	0.8	(1.3)	
29	28	不明	(5.6)	—	—	(4.6)	0.7	(1.0)	
30	28	不明	(4.8)	—	—	(1.5)	0.8	(3.3)	
31	28	不明	(4.8)	—	—	(2.6)	0.7	(2.2)	
32	28	不明	(4.8)	—	—	(3.0)	0.6	(1.8)	
33	28	不明	(4.5)	—	—	(2.4)	0.6	(2.1)	
34	28	不明	(4.5)	—	—	(3.9)	0.7	(0.6)	
35	28	不明	(4.1)	—	—	(3.4)	0.7	(0.7)	
36	28	不明	(3.9)	—	—	(2.8)	0.6	(1.1)	
37	28	不明	(3.0)	—	—	(2.9)	0.7	(1.0)	
38	28	不明	(2.7)	—	—	(1.2)	0.7	(1.5)	
39	28	不明	(3.8)	—	—	—	—	(3.8)	

鉄鎌観察表3（5号墳）

番号	掃面番号	型式	全長	鎌身部長	鎌身部幅	頭部長	頭部幅	茎部長	備考
1	35	平根系三角式	11.2	4.8	2.4	2.1	1.0	4.4	
2	35	平根系三角三角式	(10.3)	4.8	3.2	3.5	1.0	(2.1)	
3	35	中根系三刀削三角式	(7.4)	4.9	(3.2)	(2.5)	—	—	
4	35	中根系腰枝削三角式	(6.0)	(6.0)	(2.3)	—	—	—	
5	35	平根系三角式？	(2.1)	(2.2)	(2.0)	—	—	—	
6	35	主頭式	(2.1)	(2.1)	(1.8)	—	—	—	
7	35	不明	(6.6)	—	—	(2.1)	0.8	4.0	
8	35	不明	(6.9)	—	—	(3.4)	0.9	(3.5)	
9	35	不明	(7.5)	—	—	(2.3)	0.9	(5.2)	
10	35	不明	(2.6)	—	—	—	—	(2.6)	

鉄鎌観察表4（7号墳）

番号	掃面番号	型式	全長	鎌身部長	鎌身部幅	頭部長	頭部幅	茎部長	備考
1	39	長頭三角式	(14.7)	1.7	1.0	7.2	0.6	(5.7)	
2	39	長頭二角式	(5.5)	2.1	1.2	(3.4)	0.7	—	
3	39	長頭二尖式	(5.6)	2.0	1.2	(3.6)	0.5	—	
4	39	長頭二角式	(5.0)	2.0	(1.2)	(3.0)	0.7	—	
5	39	長頭二角式	(4.2)	2.1	1.2	(2.1)	0.6	—	
6	39	長頭三角式	(2.9)	2.3	1.3	(0.6)	0.7	—	
7	39	長頭二尖式	(2.9)	2.2	1.2	(0.7)	0.7	—	
8	39	長頭二角式	(2.2)	2.1	1.3	(0.1)	0.8	—	
9	39	不明	(3.7)	(1.0)	1.1	(2.7)	0.7	—	
10	39	不明	(5.8)	—	—	(5.8)	0.7	—	
11	39	不明	(5.2)	—	—	(5.2)	0.7	—	
12	39	不秀	(4.6)	—	—	(4.6)	0.8	—	
13	39	不明	(4.6)	—	—	(4.6)	0.6	—	
14	39	不明	(4.5)	—	—	(4.5)	0.8	—	
15	39	不明	(4.4)	—	—	(4.4)	0.7	—	
16	39	不明	(2.8)	—	—	(2.8)	0.8	—	
17	39	不明	(2.6)	—	—	(2.6)	0.6	—	
18	39	不明	(2.8)	—	—	(2.8)	0.8	—	
19	39	不明	(2.5)	—	—	(2.5)	0.7	—	
20	39	不明	(4.5)	—	—	(4.5)	0.6	—	
21	39	不明	(3.3)	—	—	(1.2)	0.6	(2.1)	
22	39	不明	(10.7)	—	—	(6.3)	0.7	(4.4)	
23	39	不明	(5.9)	—	—	(2.4)	0.7	(3.5)	
24	39	不明	(4.6)	—	—	(3.5)	0.7	(1.1)	鉄物片付
25	39	段違い逆利刃式	(9.8)	(6.0)	1.0	(3.8)	0.7	—	
26	39	不明	(9.9)	—	—	(9.9)	0.8	—	
27	39	不明	(8.8)	—	—	(8.8)	0.7	—	

円筒埴輪観察表

番号	掃面番号	部位	器高	残存率	頭部径	外面調整	内面調整	備考
1	43	胴部	(7.5)	25%	(19.2)	ヨコハケ	ヨコナダ、ユビオサエ	円形透孔。下段の肥厚から低部の可塑性あり
2	43	底部付近	(7.0)	20%	(14.8)	タメハケ、底部タナダ	タナダ	突堤は断続的なナダ調査

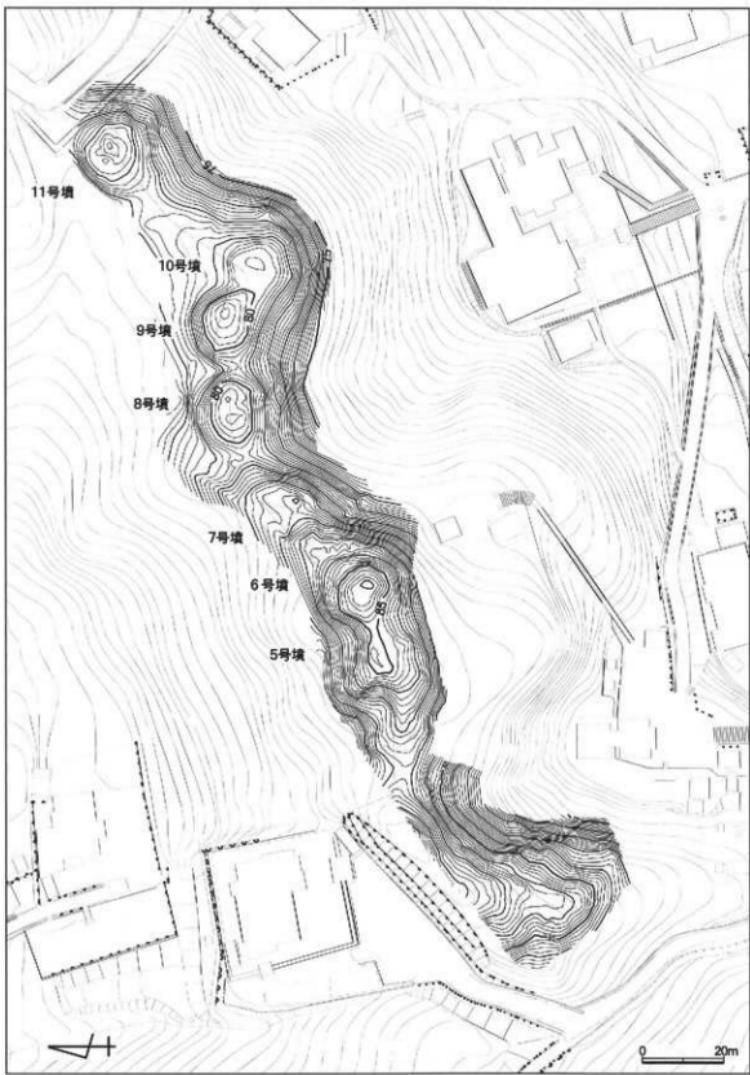
## 附篇1 安威古墳群測量調査報告

はじめに 安威古墳群は、茨木市安威・安威4丁目に所在する古墳群で、安威川西岸の丘陵上に、東西700mにわたって古墳が点在している。この古墳群は戦後間もなく森浩一氏によって報告され、古墳群の一つのモデルとして考えられてきた。とくに、1966年に刊行された『日本の考古学IV』では、「前期から後期まで数世代にわたって規模の小さなおなじような円墳をつくりつけた特異な古墳群」と記述され、連綿と古墳が営まれた例として注目されている。また、西端の0号墳と1号墳では、発掘調査の結果、古墳時代前期の粘土櫛が発見されており、この古墳群の重要性が改めて知られることとなった。

しかしながら、この古墳群の状況を示すための地形測量等がおこなわれていなかつたので、古墳群を構成する各古墳の正確な位置や形状については明らかではない。そのため、現在0号墳から19号墳までの古墳が挙げられているが、著名な0号墳、1号墳を除くと、個々の古墳を改めて同定することが困難になっている。たとえば、『茨木市の文化財』第3号と『わがまち茨木 古墳編』のあいだで、6号墳から11号墳の記述に違いがあり、直径20mの円墳で横穴式石室がわかるものが前者では6号墳と7号墳、後者では8号墳と9号墳になっている。これまで見取り図など、分布を示す図が作られてこなかつたため、このような異同が生じたものと考えられる。

そこで、今回の調査は阿為神社および大念寺の裏山に所在する古墳群について測量し、それぞれの位置関係を確かめ、改めて古墳の分布を把握することを目的とした。6号墳から11号墳の名称は、『わがまち茨木 古墳編』の記述をもとに決定した。測量にあたっては、地権者の大念寺、阿為神社、森川正啓氏、および免山篤氏、茨木市教育委員会奥井哲秀、宮脇薫氏のご協力を賜つた。調査は、市史編さん室が主体となって平成14(2002)年7月および平成16(2004)年12月におこない、京都府立大学大学院生の丹羽恵二、井谷朋子、森島一貴、河野文英・所桝、同大学生の金森悠紀子、高田潤一朗、中津桜、木下久美子、仲林篤史、平田義大、松山美紀、岩塚祐治、田中奈津子、藤野好博、鷲山紀子、河合由実子、土橋夏美、的場明日香、鶯渕麻奈、葛本隆将、庭主洋輔、野田真弘、長谷川裕美、真壁弥子、松森みゆき、長谷川智史、および滋賀大学生の寺田理恵が参加した。

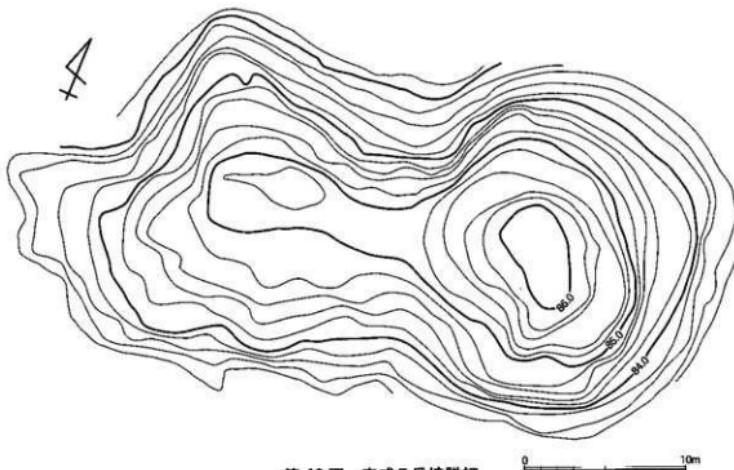
**調査成果** 安威古墳群のうち西端の0号墳と1号墳は前期に属し、2号墳は埴輪が採取されていることから前期あるいは中期古墳と考えられている。これらは、阿為神社より西側の北陵中学校の周囲にあり、大字安威に属している。一方、今回の調査対象となった大念寺および阿為神社北方の丘陵にある古墳は横穴式石室が露出しているものもあり、大半が後期に属するものと推測されている。大念寺の周囲から出土した須恵器が同寺に保存されており、丘陵の南斜面にも古墳が分布していたことがうかがわれる。今回の調査では、尾根上の古墳については十分に墳丘を確認することができたが、南斜面の古墳については明確な墳丘を確認することができなかつた。斜面一帯は雑木が繁茂しており、墳丘を見落としている可能性も大きい。なお、測量の範囲も尾根筋



第45図 安威古墳群（5～11号墳）の地形

を中心とする範囲にとどまっている。

今回の測量では、尾根筋に古墳がならぶ状況を改めて確認することができた（第45図）。これらについては、最高所に位置する古墳が5号墳であることが知られており、そこから東にかけて6号墳、7号墳、8号墳、9号墳、10号墳、11号墳とすることができる。そして、8号墳では横穴式石室が明瞭に観察でき、幅1.5m程度をはかる玄室が露出している。7号墳、9号墳、11号墳でも横穴式石室を構成すると思われる石材が露出している。8号墳、9号墳、11号墳はいずれも直径20mほどの円墳であり、後期古墳としては大きい方に属するといってよい。なお、6号墳は不整形のテラス状を呈しており、古墳ではない可能性も残される。



第46図 安威5号墳詳細

0 10m

今回測量した古墳の中で、最高所に位置する5号墳が注目される。この古墳からは須恵器壺の破片がかつて採取されており、後期古墳と目されているが、測量の結果からは前方部を西に向ける前方後円墳に復原できることが明らかになった。前方部の西端は直線的ではなく、裾の位置を想定することが難しいが、南北双方のくびれ部の状況が比較的対照的であり、前方部北側のラインも自然地形とは明らかに異なる点などが、前方後円墳の根拠になると考える。標高83.8mのラインを墳丘裾として想定すると、全長約34m、後円部径、前方部幅とともに約10m、後円部高2.2mの数値を得る。前方後円墳としては規模が小さいけれども、後期における前方後円墳の実例として重視できよう。横穴式石室を内包することが想定されているが、現状では石材などは確認できない。ただし、詳細測量図を見ると、後円部墳丘の南側が張り出すような形状になっており、石室開口部を示している可能性もある。

この5号墳から西に尾根筋を20mほど行ったところに前方後円形に復原できる高まりがある。

1/2500の地形図に表れているが、現状では崖の浸食が進み、かろうじて墳丘の南裾にあたる部分を測量できたにすぎない。標高83mのラインを墳丘裾と仮定すると、全長32mに復原できる。ただし、高さが2m足らずであり、後円部と推定される高まりが円形を描かず、全体として5号墳と比べて不整形と言える。ここでは、古墳の可能性のある高まりとして把握しておくことにしたい。なお、この周辺では石材などは一切みられなかった。

まとめ　測量した範囲からは東に離れた安威古墳群東端の12号墳は、横穴式石室を主体とし、鉄刀や鉄鎌、馬具、須恵器などの副葬品が出土したほか、墳丘に埴輪を並べていたことが知られている。本書での検討にあるように6世紀中葉以前に位置づけられる。今回測量をおこなった5号墳から11号墳については、年代を示す資料は得られていないが、8号墳の横穴式石室は6世紀後半に位置づけることができ、一応、6世紀を通して造営がおこなわれた古墳群とすることはできる。安威古墳群の西部にある0号墳や1号墳からは100年以上の隔たりがあり、2号墳の位置づけに問題が残るもの、前期から後期にかけての連続性を想定することは難しいと考える。むしろ、6世紀になって改めて造墓活動が始まったとみられ、前方後円墳を含み、円墳もやや規模の大きいことから、その被葬者も比較的優位の階層であったと考えることができる。本書が取りあげた将軍山古墳群においても、前期の前方後円墳から空白を経て、再び後期の古墳が展開する状況が確認されている。安威古墳群の場合、前期の前方後円墳である1号墳は全長45mと比較的小ぶりであったが、将軍山古墳群の消長とよく似た様相であることは指摘できよう。後期の墓域の設定の際に、前期の前方後円墳がある種のランドマークになったものと推測できる。

安威古墳群の北には、初田1号墳、同2号墳、桑原古墳群など、7世紀の有力者の古墳が営まれており、さらに対岸の山頂近くには阿武山古墳も存在している。安威地域における6世紀から7世紀にいたる造墓活動の連続性を重視する必要があろう。これらに加え、対岸の塚原古墳群も含め、安威川の両岸では多くの後期古墳が営まれるようになっている。安威古墳群の丘陵と塚原古墳群の位置する阿武山の丘陵との間に形成される狭隘部を抜けて、安威川は三島の平野部に流れ出る。まさにその位置には、一ノ井堰、五社井堰といった重要な取水口があり、灌漑の起点にもなっている。これらの井堰がどこまで溯るかは明らかにできないが、安威遺跡をはじめとする古墳時代中後期の遺跡から判断して、安威古墳群の時期には存在していた可能性が高い。おそらく古墳群の展開の背景として、灌漑の進展による平野の開発があり、古墳群の位置もそれと密接な関係があると考えられる。

(菱田哲郎)

### 【参考文献】

- 茨木市教育委員会 1994『わがまち茨木 古墳編』  
篠川隆平・免山篤 1964「安威古墳群」『茨木市の文化財』第3号 茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会  
森浩一 1951「安威古墳群の問題」『古代学研究』第5号 古代学研究会  
森浩一 1952「古墳と古墳群（上）」『古代学研究』第6号 古代学研究会  
森浩一・右部正志 1966「畿内およびその周辺」『日本の考古学』IV 古墳時代上 河出書房

## 附篇2 安威12号墳採集の埴輪・須恵器

### 1 安威12号墳について

安威12号墳は、天神山の城跡近く、古墳群中で最も東に位置する古墳である。径約20m、高さ約2mの円墳であり、主体部は南に開口する横穴式石室であったとされている。しかし、早くに採石がおこなわれて石室は破壊を受けており、現在は確認できない。墳丘上には埴輪片が散在しており、石も多く見られることから、外部施設として埴輪の樹立と墓石の存在が示唆される。また、墳丘斜面の中ほどに普通円筒埴輪1個体が原位置で樹立していたことが確認されており、埴輪は墳丘を巡っていた可能性が高い。

破壊された石室からは様々な遺物が出土しており、それらは古墳群に隣接する大念寺他、数箇所に分散保管されているという。そのなかには、装飾付器台を含む各種須恵器や土師器をはじめ、耳環、鏡、刀子、金銅装太刀の残欠、馬具等が確認されている。太刀の装具は、幅7mmの銅板に金の薄板をかぶせたもので、タガネによる刻目や打ち出しで文様を施している。また、馬具には六花弁の笠鉢を伴う径約8cmの辻金具などがある。

今回公表する埴輪および須恵器はいずれも免山篠氏より借用した資料である。これらは昭和26年から昭和34年にかけて安威12号墳の墳丘上より採集されたもので、いずれも小片であるが、当古墳群の中でも不明な点が多い古墳時代後期の様相を知るために重要な意味をもつ資料であると考える。

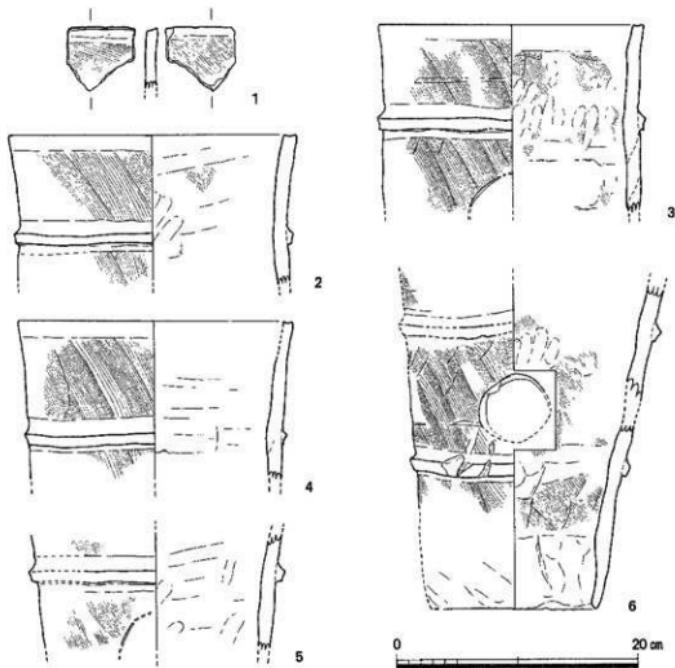
### 2 普通円筒埴輪（第47図1～6、図版35）

安威12号墳から採集された円筒埴輪の破片資料がある。すべて普通円筒埴輪であり、最も遺存状態の良好な6は底部から3段目までを復元できる。

**形態（法量・透孔・突帯・口縁部）** 6を観察するかぎり、3段目は透孔を配さない可能性が高く、また3段目の最大径が約22cmと、他の破片の口縁部径と近似することから、この3段目は口縁部段と考えられ、これらの円筒埴輪を2条突帯3段構成につくられていると復元できる。底部からやや傾きをもって立ち上がり、口縁部も強く外反することはない。法量は、6が26.5cmの残存高を測り、底部径は13.8cm、底部高は約12cmで、2段目突帯間隔は約11.5cmである。口縁部は2・3・1で計測でき、その径は22.2～23.8cmと比較的まとまりがみられるが、口縁部高は7.5～9.5cmとやや不統一である。

透孔は、6の2段目、3の口縁部直下の段、そして4で確認でき、円形のものが対面2方向に配されていることがわかる。透孔の径は約5.5cmで、6では段間のやや下寄りに穿たれている。

突帯は、いずれも高さが低く、上稜が突出した断面台形を呈するが、4は下稜を形成しないために断面形は三角形となっている。突帯の設定については、上下に大きな歪みがみられないこと



第47図 安威12号墳採集埴輪 1

から、事前に何らかの位置決めをおこなったものと推測する。

口縁部は、端部に面をつくる断面コ字形の単純な形態で、仕上げの際に端部にも丁寧に強いヨコナデを施しているため、端部の面はやや凹状にくぼむ。

**調整** 外面調整は、粘土紐積み上げ後のナナメハケのみである。ハケは左上がりで右回りに均一に施されている。内面調整は、1～3・6で外面と同様の左上がりのナナメハケが確認でき、突帯裏にあたる位置には明瞭な指オサエがみられる。また、2はハケの後に口縁端部付近を中心としてヨコナデも施している。一方、4・5は残存面全体に丁寧なヨコナデ調整が施され、それに先行するハケなどは確認できない。

底部調整は唯一底部が残存する6も、その外面は摩滅により不明瞭になっているが、部分的にナデや板オサエと考えられる痕跡が確認できる。ナデはタテハケに先行するもので、全形を成形する際の調整である。底部調整は、内面に指または無文工具を当て、外面に板オサエを施したと考えられ、底端部付近の器壁は比較的薄くなり、端部も丸みを帯びて底端面は狭い。

**色調・焼成** 色調は、1・2・4・5が明褐色であり、3・6は暗赤褐色である。いずれも黒斑

はみられず、5はやや軟質な焼き上がりだが、3・6は硬質で、そのほかも焼成は良好である。

### 3 形象埴輪

安威12号墳採集の形象埴輪の破片がある。しかし、いずれも小片のため全形を復元するには至らない。7～21は石見型埴輪の可能性が高く、23は馬形埴輪の尻尾部分である。22は器種不明である。

#### 石見型埴輪（第48・49図7～21、図版36）

器形は、9・13・21などの様相から、円筒形基部の前面から側面にかけての位置に板状の部材を接合し、形象部をなしたものと推測できる。また、10・17のように円筒形基部との接合部のすぐ近くに形象部外形の生き面が認められることから、その器種を括れや段構成をもつ石見型埴輪と考えた。しかし、石見型埴輪の特徴の一つとしてあげられる形象部の小穿孔については、いずれの破片にも確認することができないために、器種の断定には至らず、個体によっては馬形埴輪などに属する可能性も残す。

9で観察できる円筒形基部と板状形象部との接合面には箇状の工具で深い刻みが施され、円筒形基部から剥離した形象部の破片1にも刻みの痕跡が凸状に転写されている。また、同様に円筒形基部から剥離した形象部の破片である19の接合面には直接刻みを施した痕跡がうかがえ、刻みを基部側に施すものと、形象部側に施すものとがあり、さらに10・19のように接合面に刻みを施さないものもあり、その様相は多様である。また、13・21は形象部の裏面と円筒形基部との狭間に補強のための粘土塊を詰めており、対して7・9・10にはそれがみられない。これは器厚の違いなどから部位の相違を考えることもできるが、刻みの有無などを含め、多様な製作方法があったものと推測できる。

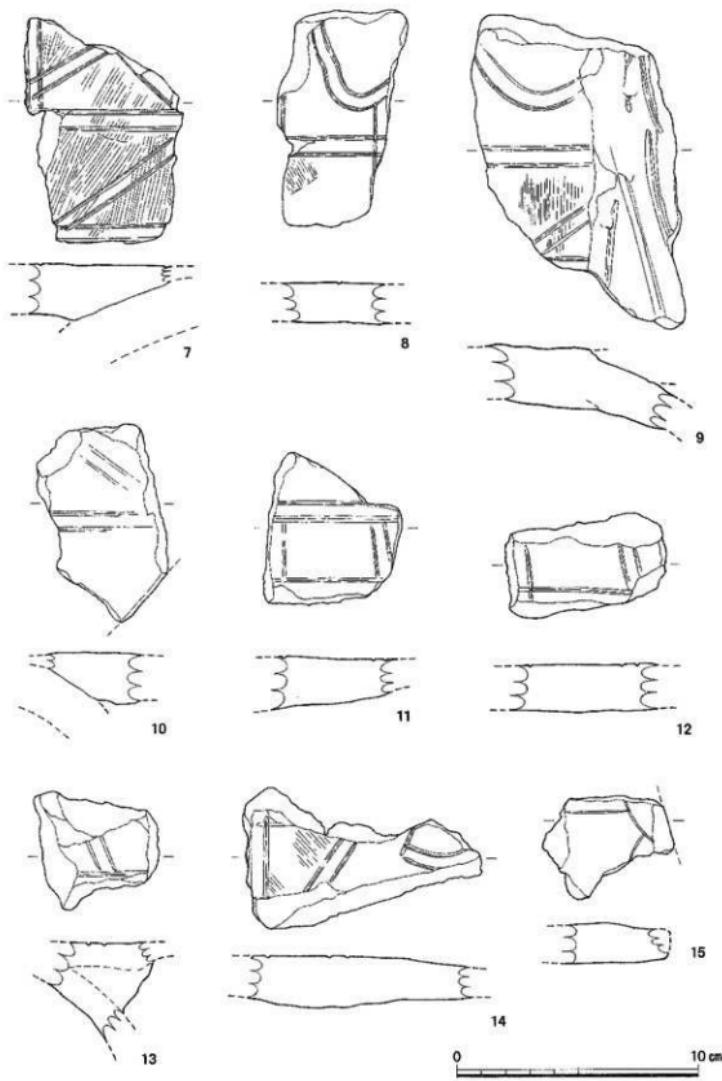
器面の調整は摩滅により不明瞭なものが多いが、確認できるものはクテハケまたはナナメハケで仕上げられている。器面の線刻はいずれの破片にも施されており、17と19では向面に及んでいる。線刻は直線または弧線で、二条の複線で構成されるが、15のみが単線の線刻であり、他と比較して刻線も細く異なる様相を呈する。また、16は端辺に沿って複線の線刻を施しており、それに対して10・17は端辺に沿った線刻は施されていない。このように、製作方法や線刻の構成などには、少なからず多様性がうかがえ、これらの破片がすべて同一個体ではなく、複数個体の石見型埴輪であることがわかる。

色調はいずれも明褐色で、13はやや赤みが強い。土師質の良好な焼成で黒斑をもたらす、7は比較的硬質に焼きあがっている。

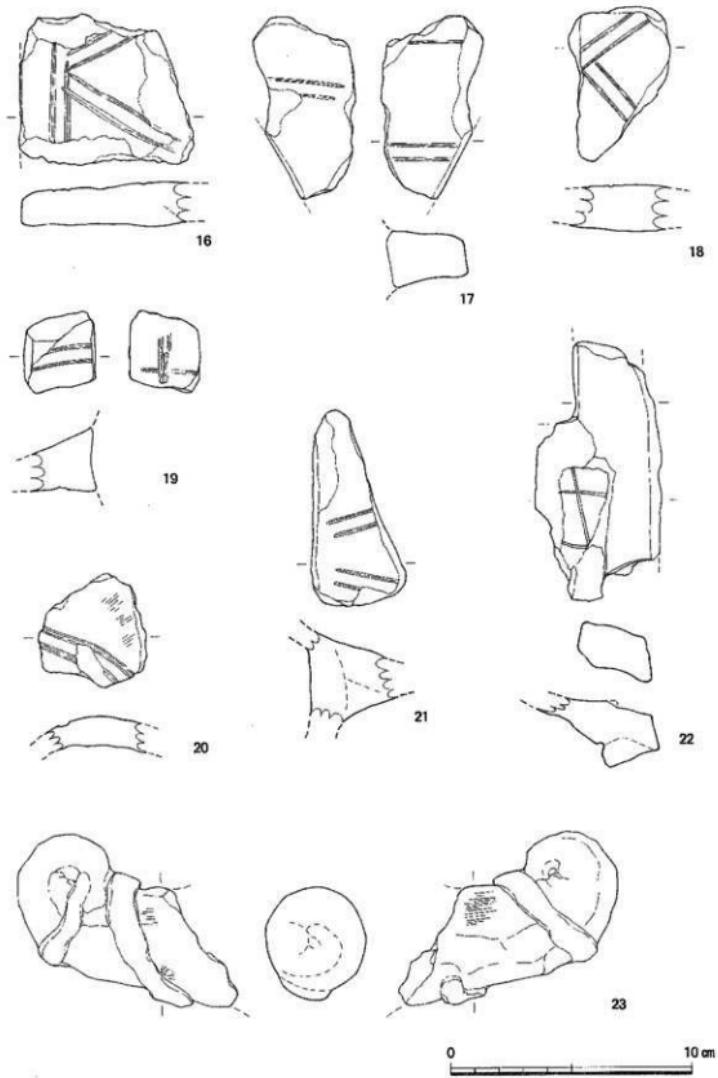
#### 馬形埴輪（第49図23、図版36）

尻尾部分の破片である。長さ7.2cmが残存しているが、尻部との接合面は遺存せず、全長や接合方法は不明である。

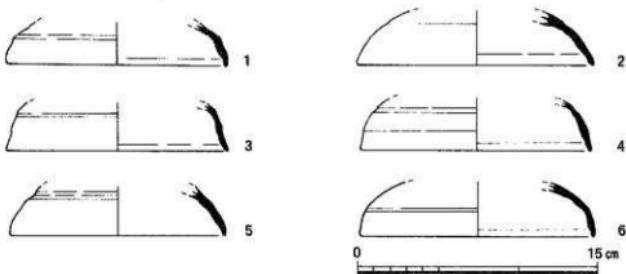
破面中央に直径5mm程度の窪みがあり、棒状工具を引き抜いた痕跡と考えられる。その痕跡に粘土の巻きはじめが接することから、細い棒状工具に右回りに粘土を巻きつけて成形をおこ



第48図 安威12号墳採集埴輪 2



第49図 安威12号墳採集埴輪 3



第50図 安威12号墳採集須恵器

なったことが推測できる。また、尻尾の先端は細く伸ばして上へ巻き上げ、藤手状に作り、さらにその先に別の粘土紐を尻部方向へ螺旋状に巻きつけている。調整は荒いケズリが確認でき、部分的にハケを用いて仕上げている。焼成は良好で、色調は明褐色である。

#### 不明形象埴輪（第49図22、図版36）

形状がやや複雑で、破片の上下の判断も困難であるが、提示した実測図を正位置と仮定して記述をおこなう。

板状の粘土部材の表面左下部分に薄く粘土を足し、裏面の下半にも縦方向に支柱のような粘土紐を貼り付けている。また、左上部を逆L字形に切り取っており、右辺は稜をもって角を形成している。表面左下部にのみ、やや傾いた格子状の細い線刻が確認できる。

調整は表面にハケがみられるが、線刻部分は施文前に丁寧なナデをおこなっている。また、裏面はオサエのみで荒く仕上げられており、左半分は器壁が薄くなることから、剥離面の可能性もある。焼成は良好で、上部質に焼き上がっており、色調は明褐色である。

#### 4 須恵器（第50図1～6）

免山氏により安威12号墳から採集された須恵器はいずれも小片で、確認できる器種は蓋杯のみである。図化し得たのは6点で、全て杯蓋口縁の破片である。復元口径は13.6～15.6cmを測る。口縁端部は基本的には丸くおさめているが、1では端部内面に1本の沈線が巡り、6には弱い段が認められる。天井部の破片をみると、ロクロの回転方向には右回り、左回りの両者がある。断片的な資料のため年代的位置づけは困難であるが、概ねTK10型式期の範囲内で捉えることができよう。

#### 5 安威12号墳採集埴輪の評価

以上のようにほとんどが小片のため不明な点も多いが、ここで当古墳採集の遺物について簡単

に総括しておく。

まず、普通円筒埴輪は、その特徴として突帯の位置や口縁部の形態に崩れが少なく底部調整も施していることから比較的丁寧に成形されていることがわかる。また、2条突帯3段構成の可能性が高く、このような小型の構成の普通円筒埴輪はすでに5世紀からみられるが、6世紀に入って量産されている。当古墳の普通円筒埴輪は突帯が低く、なかには断面三角形を呈する個体もあるなど、比較的新しい様相もみてとることができるために、その製作年代は6世紀中葉を下限としておきたい。

また、形象埴輪も、器種がわかるものは石見型埴輪と馬形埴輪のみであり、いずれも全形を復元することができず、詳細な検討は困難である。しかし、石見型埴輪は定型化する時期が5世紀後葉であることから、典型的な型式の存続期間はそれ以降に限定される。当古墳の資料には年代の検討材料となる特徴的な部位は残存していないが、複線による直線と弧線で主要な文様が構成されること、そこに複線による無齒文や格子文状の文様が加わっていることから、それらの文様構成が共通する資料として近隣の高槻市新池埴輪製作遺跡8号溝出土の個体をあげることができる。この新池遺跡の資料は須恵器のTK10型式期に相当するものとされており、年代は6世紀中葉に比定できよう。したがって、当古墳の破片資料もその年代を基準とし、比較的近い時期に製作された可能性があると考える。

馬形埴輪については尻尾部分のみの残存であり、製作年代を特定するような資料とはなり難い。しかし、その特徴として尻尾の先を上方に巻き上げ、さらに革紐のようなもので螺旋状に巻いて整えた表現がみられる。この表現は、畿内を中心とした西日本の飾り馬に比較的多く、また6世紀後葉に至る頃にはほぼ確認できなくなる要素である。

以上の点を勘案すると現状では、安威12号墳の築造時期は古墳時代後期前半、6世紀中葉を下らないものと考えられる。また、当古墳採集の須恵器の時期はTK10型式期に相当し、これほん埴輪の検討結果とも矛盾するものではない。

安威古墳群では古墳時代前期と後期に約20基の古墳が形成されたが、横穴式石室をもつ新しい段階の古墳においては、主体部はもとより埴輪の有無などの外部施設についても未だ不明な点が多い。そのため、今回紹介した埴輪や須恵器はそのような古墳時代後期の当古墳群の様相を知るための重要な資料となるだろう。また、すでに主体部の横穴式石室を失っているために、今後の調査においても他の古墳との比較材料が限られる12号墳に関して、今回の資料を提示できた意味は大きいものと考える。

(所)

### 【参考文献】

佐川隆平・免山篤 1964 「安威古墳群」『茨木市の文化財』第3分 茨木市教育委員会・茨木市文化財研究調査会  
野上丈助 1969 『摂津の古墳』古美術叢書社

森田克行(編) 1993 「新池」高槻市文化財調査報告書第17番 高槻市教育委員会

## 遺物観察表

- ここでは、本書において報告している安威12号墳の埴輪と須恵器についての観察表を掲げる。
- 須恵器の器高において( )をついているものは残存高を示す。
- 須恵器の口径、円筒埴輪の口径および底径において( )をついているものは復元値を示す。また、円筒埴輪の口径欄において数値の後に＊のつくものは山縫部が残存せず、削除径を示したものである。
- 須恵器及び円筒埴輪の残存率は、径の復元値をもとに5%ごとに残存している割合を示した。
- 形象埴輪における残存法量は、実測図の状態を正位置とした対横の最大値を示す。
- 形象埴輪において、破片の裏裏面が形象部の生き面と判断できる個体のみ、線刻欄に線刻の位置を「内山」または「片面」で示している。
- 備考欄にはそれぞれの項目以外に注意される特徴について記した。
- 観察表中において、とくに単位を示さない場合、数値はcmを用いて表示している。

## 円筒埴輪観察表

番号	横図 番号	部 位	器 高	残存率	口 径	底 径	外 面 調 整	内 面 調 整	備 考
1	47	口輪部	(5.3)	—	—	—	ナナメハケ	ナナメハケ	口輪部はヨコナマ側壁で凹をもつ。
2	47	口輪部	(12.3)	15%	(23.8)	—	ナナメハケ	ナナメハケ	口輪部はヨコナマ側壁で凸をもつ。
3	47	口輪部	(15.3)	15%	(22.2)	—	ナナメハケ	ナナメハケ、ビオサエ	口輪部はヨコナマ側壁で薄肉が剥落している。
4	47	口輪部	(13.0)	20%	(22.8)	—	ナナメハケ	ヨコナマ	口輪部はヨコナマ側壁で始点が坂状に瘤む。突起部く、断面三角形を呈す。
5	47	胸部	(10.2)	15%	(20.8) *	—	ナナメハケ	ヨコナマ、エビオサエ	円形透孔をもつ。
6	47	底部	(26.5)	55%	—	13.8	ナナメハケ、エビオサエ	ナナメハケ、エビオサエ	内面底部付近に手または工具の刃痕あり。突起部は低く、上端部のみ突出する。円形透孔をもつ。

## 形象埴輪観察表

番号	横図 番号	器 種	部 位	残存法量	調 整	線 刻	備 考
7	48	石見型	形象部	9.0×6.4	ナナメハケ	片面	基部から倒壊。基部剥離面に接合部のキズミが写る。
8	48	石見型	形金部	8.8×4.7	—	片面	—
9	48	石見型	基部・形象部	11.6×8.2	タケハケ	—	二条一対の直線文と弧線文
10	48	石見型	形象部	8.0×4.8	—	片面	二条一対の直線文
11	48	石見型	形金部	6.2×5.5	—	片面	二条一対の直線文
12	48	石見型	形金部	3.7×6.7	—	片面	二条一対の直線文
13	48	石見型	基部・形象部	4.6×4.8	—	—	二条一対の直線文と弧線文
14	48	石見型	形金部	5.5×9.7	ナナメハケ	片面	基部と形金部の間に複数の支持孔土を充填。
15	48	石見型	形象部	4.1×5.4	—	片面	半周の直線文と弧線文
16	49	石見型	形金部	6.2×7.3	—	片面	二条一対の直線文
17	49	石見型	形象部	7.2×3.9	—	内面	二条一対の直線文
18	49	石見型	形金部	6.1×4.2	—	片面	二条一対の直線文
19	49	石見型	形金部	3.0×2.9	—	内面	二条一対の直線文
20	49	石見型	形象部	4.6×4.5	ナナメハケ	片面	二条一対の直線文？
21	49	石見型	形象部	7.9×3.9	—	片面	二条一対の直線文
22	49	不明	形象部	10.5×5.2	ナナメハケ	格子状の直線文	基部全体が剥離の可能性あり。機械面は半状に剥離する。形象部剥離(外形)が残る。
—	—	—	—	—	—	—	機械工具で削りに削りを重ね付け成形。底面山尖に工具底が残る。

## 須恵器観察表

番号	横図 番号	種類	器種	口径	器高	口縫 残存率	胎 土	焼 成	内面色調	内面色調	備 考
1	50	須恵器	杯蓋	(13.6)	(13.6)	10%	泥(±1mmの褐色粘土を少量含む)	良好	青灰	青灰	
2	50	須恵器	杯蓋	(14.4)	(14.4)	10%	泥	灰	灰～灰白	灰～灰白	
3	50	須恵器	杯蓋	(13.8)	(13.8)	10%	泥(±1～3mmの灰白色粘土を含む)	良好	青灰	青灰	
4	50	須恵器	杯蓋	(14.6)	(14.6)	10%	泥	良好	灰～灰白	灰～灰白	内面に水色斜材付着
5	50	須恵器	杯蓋	(13.4)	(13.4)	10%	泥	良好	灰～灰白	灰～灰白	
6	50	須恵器	杯蓋	(14.6)	(14.6)	10%	泥	良好	青灰	青灰	

## 附篇3 溝昨神社蔵駒氏作神人龍虎画象鏡

神武妃伝説にゆかりの深い古社である溝昨神社に、一面の銅鏡が社宝として伝えられている。箱書きにある曉御鏡の名は、天平年間に旱天があり、聖武帝より下賜された鏡に祈雨したところ、効験あらたかにして、人民の心晴れること嘆のごとくであったとの伝承に由来する。

本鏡は、いくつかの文献【樋口 1979など】に写真が掲載されているものの、あまり世に知られていない鏡である。そこで本論では、本鏡の紹介をおこない、その位置づけについて略述する。

**現状** 本鏡は画象鏡であり、一般的な呼び方にしたがえば、神人龍虎画象鏡ということになる。鏡背径 19.05 ~ 19.1 cm、鏡面径 18.3 cm をはかる。反りは 0.25 ~ 0.3 cm、縁部外斜面長・外区厚・内区厚はそれぞれ 0.7 cm・0.2 cm・0.1 cm で、薄手のつくりである。内区外周を四分の一ほど欠損しているが、ほぼ完形である。にぶい黒色を呈し、緑青がところどころに吹いている。出土後に、鏡面のガマ状の鏽をとりさったらしく、縁部などに小さなくぼみがみとめられる。布帛類の付着はみられないが、内区を中心に鏡背面に土がうっすら付着する。

**縁部・外区** 縁部はわずかに反りながらゆるく斜縁状に立ちあがる形状で、上野洋史の縁部分類【上野2001】によれば三角縁となる。外区の文様帶は、外側から複線波文帯と鰐齒文帯が配され、あいだに細い突線がめぐる。一段落ちた内区外周文様帶は、櫛齒文帯と鎧帶で構成される。

鎧帶は右行する。欠損や鉢彫れなどによって読みとれない部分もあるが、字体は単純であり、「駒氏作竟四夷服 多賀國家人民息 胡ロロロロロロロロ時節五穀孰 長保ニ親得天力 傳告兮」と仄読できる。不明箇所は、スペースから 8 字分あり、類銘から考えて「剪殄滅天下復風雨」であろう。盤龍鏡に頻用される定型的な銘文である。駒氏なる作鏡者銘は「數例と比較的珍しく、画象鏡が最多を占め、次に盤龍鏡が多い。「胡」は左字である。七言句の銘であり、各句末字の「服」「息」「履」「孰」「力」が押韻する。王力によれば、「服」「息」「力」は職部、「履」「孰」は覚部になる。「氏」から「國」までの 9 字の部分は、隣接する櫛齒文帯とともに鉢出がはなはだ悪く、ひどく不鮮明である。

**内区** 内区は 4 乳で区画し、鈕をはさんで東王父と西王母、龍像と虎(?)像を 1 体ずつ対称させる構成をとる。神像は平面的な造型である。玉勝をいただく神像と三山冠をかぶる神像の脇に、それぞれ榜題「西王母」「東」とあることから、神像が西王母と東王父であることが傍証される。

西王母は立像で斜めの方を向き、左衽の上衣をまとう。足元両脇には房状の文様を 3 つずつ配す。頭部は、頭頂が平坦な半截帽円形を呈する。顔面は摩滅し、頭頂の髪と冠を玉勝がつらぬく。両脇には、ほぼ左右対称の形姿をとる脇侍が 1 体ずつ侍している。挙手して正坐する。その頭部は矮小で、横平行線の眼が配される。胸部と膝は棒状で、上腕部の袖は長方形状に表現され、縦刻線を密にはどころ。髪と肘より先は線状にあらわす。東王父は、左衽の上衣をまとうなど、西王母と表現がほぼ同じであるが、三山冠をかぶる点などが相違する。脇侍の表現も基本的に同様

だが、神像前方のものは立ちあがり、後方のものは2体が重層する形姿をとる。

獣像はともに西王母に向かって配される点が特徴的であり、それぞれ逆方向に駆ける通有の画象鏡の獣像と相違する。平面的な神像にたいして、いくぶん立体的な造型である。西王母の前面に向かう獣像は、右前脚を蠍様に振りあげつつ左前脚を前方に突きだし、2本の後脚を前後にのばして疾駆する姿態を緻密に表現する。龍像であろう。高まる胸部から胴部に細めの羽翼が5本ほどのが、スリムな胴部をへて細線の獣毛を密に配した腰部へつながる。腰部の後方からは、波状に屈折する尾と、10本前後の細線の腰鬚が立ちあがる。胸部前面からゆるやかに屈曲しつつ斜め後方にのびあがる頸の先に側面形の頭部があらわされる。前方を向いて開口し、上顎は頭外へ突きだす。頭頂部から後方に2本の角が、後頭部から細い獣毛が後方にのびる。その頭部と相対するように、鳥像が1体配される。珠点であらわした頭部から線状の嘴が2本突きだす。体部は丸味を帯びた梢円形で、細線で胴部を囲繞する。おそらく雛であろう。

もう1体の獣像は、疾駆する姿をあらわし、先の獣像と基本的に同じ表現だが、いくつかの点で相違をみせ、二種の獣像を区別していたことがわかる。胴部は長細く、鱗文が目立つ。頭部は斜め前方を向いて開口する。鼻は大ぶりで、半円形の耳がつく。短い鬚が後方にたなびき、その上部に2本の角が突きだす。相貌は虎に似るが、鱗文と角を有しており、辟邪かもしない。

乳は円座乳であり、外周を連珠文がめぐる。円座は径約1.4cmのやや平な円形で、内側にわずかにくぼむ。乳は小ぶりで、径約0.6cm、高さ約0.3cmとやや低平である。連珠は25個前後である。鉢区・鉢座 鉢区は径5.0cmで、低めの平頂素文帯を配し、2本の圈線を介して、その内側に径3.6cmをはかる円座の鉢座をおく。鉢は径3.1cm、高さ1.3cmの断面半円形を呈する。鉢孔は乳の中間位置をつらぬく方向に開口する。鉢孔の形態は、入口部分がやや摩滅して丸みを帯びるもの、おおむね0.7×0.5cmの横長の長方形を呈する。その下端は鉢座面より0.3cmほど高い。

鋳上がり・調整 総じて鋳上りはよいが、鉢孔の片側の延長線上にあたる虎(?)像の頭部から頸部にかけてと鱗文に鋳崩れが観察できる。鉢孔の開口方向に湯口があったことを示唆する。先の獣像の腰部から東王父にかけても、鋳出に甘さが目立つ。調整は、縁部に斜め方向の研磨痕が、乳座と外区の鱗文に回転研磨痕がみとめられる。なお、鱗文の谷部に鋭い刃物で軽く搔いたような痕跡がある。出土後に、鱗文間につまつた土を除去した際につけた傷であろうか。

## 本鏡の位置づけ

本鏡の位置づけはむずかしい。両象鏡の研究を体系的に遂行した上野の分類〔上野2001〕に照らせば、広画面Ⅱ式となり系列は呉郡系ということになる。実際、それ以前に王仲殊は、本鏡を「確実に中国の吳鏡」と断定している〔王1992〕。

しかし、上野が本鏡を画象鏡の体系的分類から外しているように、本鏡は単純に分類しきれない要素を有している。たとえば、獣像の表現は通有の画象鏡のそれと相違し、むしろ劉氏系の同向式画象鏡の表現に近いものがある。獣像が同一方向に向くことも、同向式に多い配置である。同向式の画象鏡は上野の華北東部系、岡村秀典の徐州系〔岡村1995〕にあたり、呉郡のような

華南ではなく、むしろ山東半島付近の製作が考えられる。驥氏についても、『史記』孟子列伝に「齊有三驥子」などとあり、さらに魯に驥縣があることも、山東半島との関係を示唆する。ただ一方で、作鏡者が驥氏である盤龍鏡は、5例すべてが益州北部と荊州東部に分布の中心をおく西方青蓋系であること〔上野 2002〕が気にかかる。驥氏作の盤龍鏡が1世紀代の製作であるのにたいし〔岡村 1993〕、西方青蓋系と関連を有する尚方青蓋系の画象鏡が2世紀代、同向式・吳郡系いずれの画象鏡も2世紀末以降の製作であることによるのかかもしれないが、説得的な説明をくだすことはむずかしい。上野は最近、画文帶神獸鏡や銘文帶神獸鏡の分析をつうじ、3世紀に漢鏡を模倣しつつも当時代的な圖像表現・圖像構成を創出する作鏡姿勢がみられることを指摘している〔上野 2007〕。本鏡が2世紀代の吳郡系の要素をそなえつつも、3世紀代の華北東部系につらなる獸像表現を有することを重視するならば、あるいは本鏡もこうした「創作的模倣」の所産であり、華北東部系の鏡と考えてよいのではないか。

もしそうであれば、本鏡の出土地を推測する若干の参考になる。本鏡は、大阪府旧三島郡内（現茨木市）の出土とされる〔樋口 1979・大阪府立泉北考古資料館編 1988〕が、実は茨木市の満作神社が保有している以外に根拠がない。近くの阿為神社所蔵の三角縁唐草文帯二神二獸鏡のように、近隣古墳から出土したのち、神社に奉納されたという想定もなりたつるが、江戸期以降の古墳出土鏡の出土後の移動域は意外に広く、また宋代以降の輸入品も古社の所蔵鏡にしばしばみられる。本鏡が、先に推測したように華北東部系であるならば、日本出土の神獸鏡のほとんどがこの系統の鏡であること〔上野 2000〕と整合する。とはいっても、精確な出土地の比定は望むべくもない。近隣の古墳における出土伝承や当神社の古記録の精査をとおして追跡するのが捷径だろう。

本稿を執筆するにあたり、うららかな卯月の星下がり、散りゆく桜を縁側からながめつつ古鏡を熟覧するという風雅な経験をさせていただいた。閲覧の便宜をはかけてくださった三島紀之氏に厚く御礼申しあげます。また、岡村秀典氏から多大なご教示を賜った。記して深く感謝します。

（下垣仁志）

### 【引用文献】

- 上野祥史 2000 「神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰」『史林』第 83 卷第 4 号 史学研究会  
上野祥史 2001 「画象鏡の系列と製作年代」『考古学雑誌』第 86 卷第 2 号 日本国考古学会  
上野祥史 2003 「盤龍鏡の諸系列」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 100 集 国立歴史民俗博物館  
上野祥史 2007 「3世紀の神獸鏡生産—画文帯と銘文帯神獸鏡—」『中国考古学』第七号 日本国考古学会  
大阪府立泉北考古資料館（編）1988 『泉北考古資料館だより』No.31 冬季特別展 大阪府の古鏡展  
王仲殊（尾形勇・杉本憲司編訳）1992 『三角縁神獸鏡』学生社  
岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 55 集 国立歴史民俗博物館  
岡村秀典 1995 「奈浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』No.392 ニュー・サイエンス社  
樋口隆康 1979 『古鏡』新潮社



# 図 版



図版 1 将軍山古墳遠景



南西より



東より

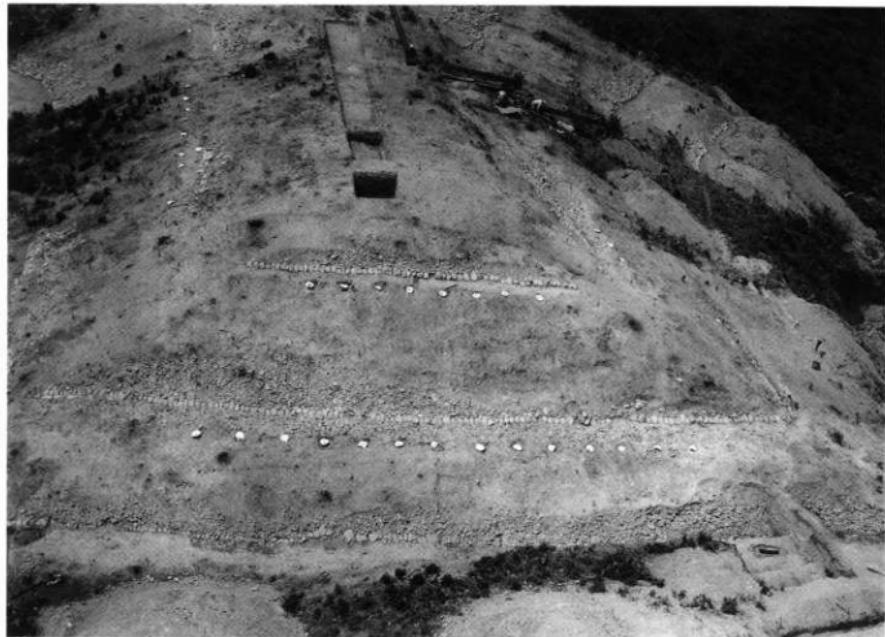
図版2 将軍山古墳上空写真1



北より



西より



南より



東より



南西より



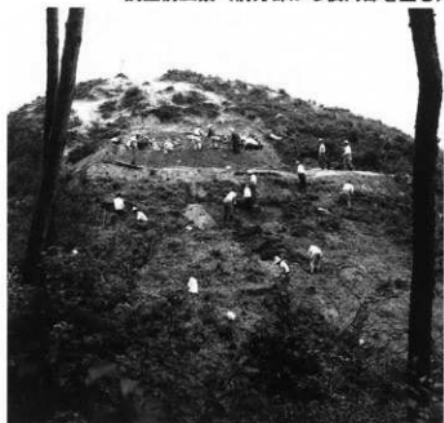
南東より



調査前風景（前方部から後円部を望む）



調査前風景（後円部から前方部を望む）



後円部（北より）



前方部前面（北より）



西側くびれ部（東より）



東側くびれ部（北より）



後円部全景（北より）



後円部下段（北西より）



東側くびれ部全景（東より）



東側くびれ部下段（北東より）



西側くびれ部上段（南より）



西側くびれ部中段（南より）



前方部前面上段（西より）



前方部前面下段（西より）



前方部前面下段（S20E0～E3, 南上方より）



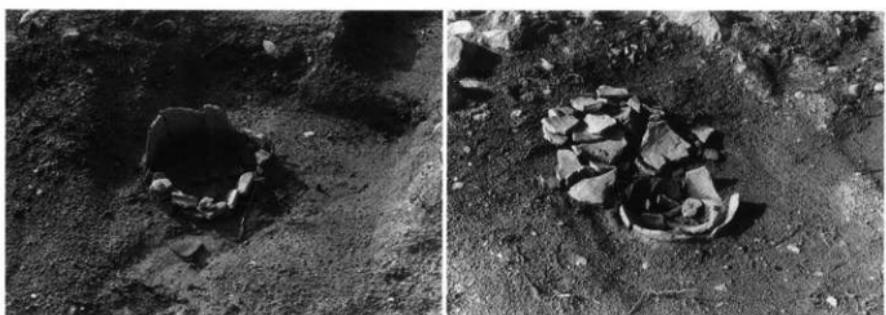
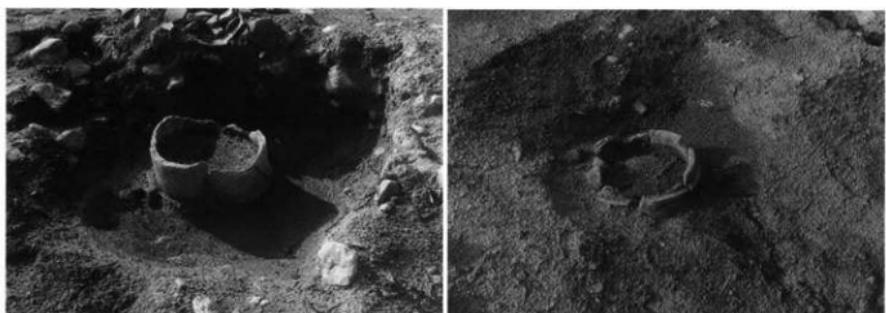
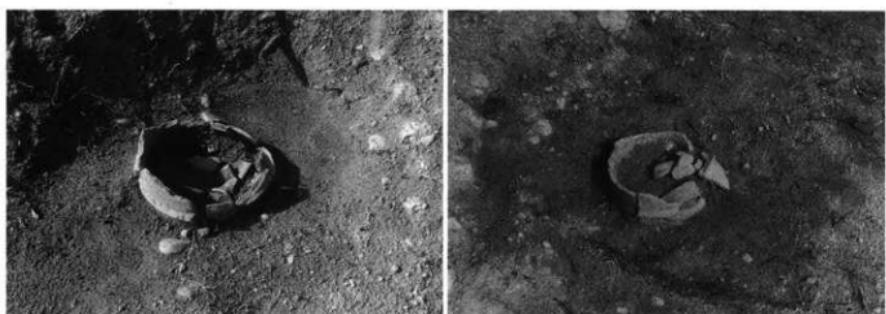
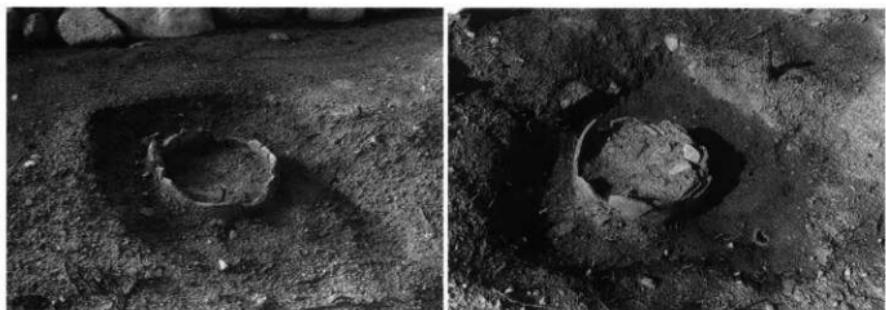
前方部前面下段（S20E3～E5.5, 南上方より）



前方部上段（S7W3.5付近, 南より）



前方部上段（S8W1.5付近, 南より）



図版9 将軍山古墳動物形土製品



検出状況





蓋石検出状況（東より）



蓋石除去後（東より）



石棺内清掃後（東より）



箱式石棺と前方部前面裙との関係（西より）

図版 11 将軍山 3号墳石室



南西より



南西より



北東より



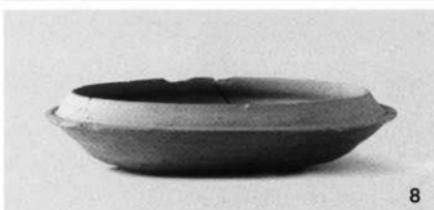
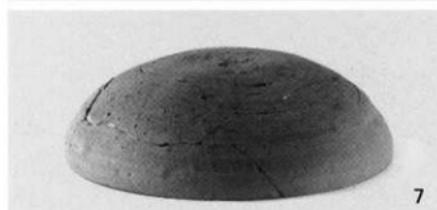
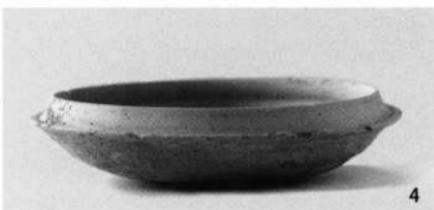
北東より



北西より

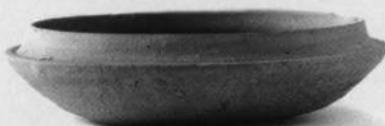


馬具検出状況





14



15



16



17



18



19



26



28



21



22